資料

（昭和五十四年十月）

第二十四回「合宿教室」（霧島）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

社団法人 国民文化研究会

—“合宿教室” 24年の歩み—

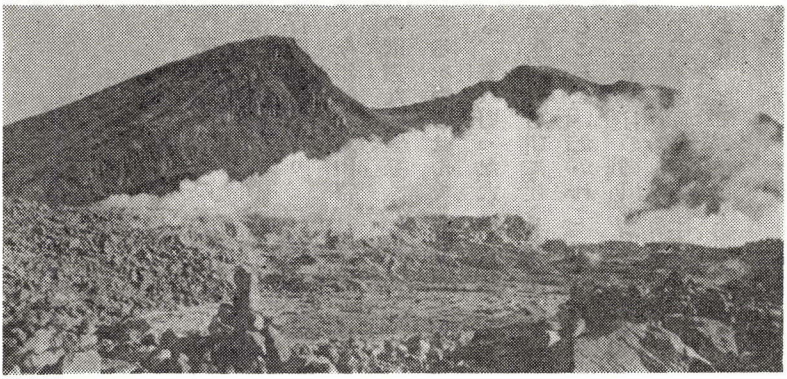
回数	年度	開催地	参加人員	主要講師
1	昭和31年	霧島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	〃 35年	雲仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲仙	208	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲仙	332	木内信胤・藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
累計・参加人員			7,028名	

第二十四回 〝合宿教室（霧島）〟 全参加者の感想文と和歌詠草

と　き　昭和五十四年八月五日（日）から九日（木）まで

ところ　鹿児島県・霧島国立公園「霧島ホテル」

参加総数　二六八名



霧島えびの高原

目　次

〝はしがき〟に代へて……理事長・小田村寅二郎……2

〝霧島合宿教室〟を振り返って……九大・四年　奈良崎修二……5

大学別参加者数・その他の人数の内訳……7

「合宿教室」の日程表（四泊五日間）……8

第24回〝合宿教室〟のあらまし……9

感想文と第二回目の〝和歌詠草〟……**参加者全員**……33

和歌詠草……合宿中の第一回目の創作作品……**参加者全員**……115

あとがき……135

カメラ・レポート　36枚（35ページから105ページまで、左ページに掲載）

〝はしがき〟に代へて

小田村寅二郎
（本会理事長・亜細亜大学教授）

昭和三十一年の本会の創立以来、第二十四年目を迎へての〝合宿教室〟は、本年は八月上旬の四泊五日間、九州・鹿児島県・霧島国立公園において開催いたしました。宿舎の「霧島ホテル」は、二回目の使用でありましたので、宿舎側の配慮も行き届いてをり、この〝合宿教室〟独特の日程推移にも、きはめて円滑な動きが見られました。

今年は、夏山特有の突然に降り出す雨にしばしば出会ひましたが、朝の国旗掲揚・国歌斉唱・体操をはじめ、第三日目夜の厳粛な慰霊祭も室外で行ふことができました。ただ全員が心待ちにしてゐた高千穂登山が、前夜の雨で危険のため断念せざるを得ませんでしたが、霧島神宮参拝・高千穂河原散策ができましたことは、せめてもの喜びでした。それにしましても、澄み切った大気、目にしみるやうな青空、時折り見られる夏の力強い白雲の動きなど、全国四十九大学から集った男女学生、ならびに社会人参加者と、主催者側の講師・助言者を含め、**総人数二六八**名は、都会生活から久しぶりに大自然のふところにいだかれて〝自然と人生〟を心ゆくまで味はひました。また、遠路はるばる御来会くださった昭和三十五年以来連続二十度目の御出講で、八十歳にかかはらず壮者を凌ぐお元気な木内信胤先生、そして、昭和三十二年の第二回合宿以来二十二年ぶりに御出講下さった高山岩男先生の、お心こもる長時間の御講義と質問への御応答は、その一言一言を聴き洩らすまじ、とする熱心な聴講と相俟って今年もまた、この〝合宿教室〟ならではの、真剣な求道の場をかもし出したのであります。

〝学問〟と〝人生〟と〝祖国日本〟と〝世界平和〟といふ四つの命題は、本来、一連の関連性と脈絡とを保って説かれる

べきものでありながら、それらがバラバラに教説されてゐるいまの日本の学園生活であってみれば、この〝合宿教室〟に参加された諸君が、〝学問・人生・祖国日本・世界平和〟の四つの命題を、わが身心に統一的に把握しようと努力してくださったことは、何より嬉しいことでした。はじめのうちは、いろいろの抵抗や反感を持たれた方もをられましたが、終幕に近づくにつれて、濃淡の差こそあれ、恐らく全参加者が、今日の学園における学問の知的偏重の欠陥について、何がしかの認識を持たれたやうでありました。

参加者諸君が、木内・高山両先生の御講義をはじめ多くの講師・助言者諸氏の懇切な指導によって、せめてここで、「学ぶといふことは、一体どういふことか」について、また「知識の伝達が主軸となってしまってゐる現代日本の大学は、果してこれでよいのか」、さらにまた「人と交るには、どういふ心掛けで自分の心を整へて相対すべきか」などについて、その心の底に、もし少しでも感得してくださった何ものかがあったとすれば、それこそ、今後の学究生活で大切に生かしていっていただきたいところであります。おそらくそれを基にしてお考へくだされば、きっと、今の世の欠陥が一体どこに宿ってゐるかについても、必ずや気付かれる所があらうかと思ひます。実は、その時点から出発し直してくださることこそ、今の日本が最も待望してゐる所だ、と思ふのであります。

さて、この〝合宿教室〟本来の課題であります所の〝**一人の真正なる日本人いでよ！**〟の念願のもとに、具体的には、

一　「国」とか「国家」とかを考へる場合に、抽象概念として考へがちになるのをやめるとともに、ともすれば、政治権力の面からだけで国・国家を考へたり、政治体制を優先して考へようとしたりする現代の学園内における一般的風潮の〝つまらなさ〟に気づいて、これらの迷蒙から、各人各様の勇気を出して、われとわが心を脱出しようと努力してくださったこと。

二　わが国民は、有史以来のすばらしい天皇をいま中心にいただいてゐながら、全国の多くの大学では、依然として「天

皇廃止論・消滅論」が盛んに講説されてゐる現状を注視して、「天皇」についても、ピラミッドの頂点といふ風な浅薄な体制的な見方だけで見てしまふ愚さに気づいていただけたこと。そして、改めて歴代天皇の大御心を、残された無数の御製を拝読して、各自自身の心の中に、天皇さまの大御心にこもる真実を、具体的に直接的にお偲び申し上げようとする気運が生れてきたこと。

その他、「交友における真実の交り方」「読書に際しての輪読の意義」、さらには「読む書物の選び方の人生における重大な意味」など、さまざまな問題が、真剣に討論されました。

さて、ここに編したこの『感想文集』は、全参加者が〝解散の間ぎは〟に走り書きしてくださったものであります。全文をそのまま載せえなかったのは、紙面の都合でやむをえぬことで、ご容赦いただきたいと存じます。**「この文集全体の編集」**は、日産自動車・社員の古川修さん、大成建設・社員の山口秀範さん、神奈川県立城山高校・教諭の原川猛雄さん、日本ユニバック・技師の大町憲朗さん、防衛施設庁・技官の皿田宏さん、日本興業銀行・社員の小柳志乃夫さんの六人が担当しました。また「はしがき」につづく**「合宿のあらまし」**は、九大の学生・弓立忠弘君を中心とする福岡地区の学生諸君がまとめたものを基礎にして、前記の山口・原川・皿田・小柳の四氏が編集し、また、巻末の第一回目の**「和歌詠草」**については、熊本市役所勤務の折田豊生さん、海上自衛隊の鎹信弘さんを中心にして熊本地区の学生諸君が、また**「各人の感想文の末尾の和歌」**は、東急建設・技師の奥冨修一さん、戸田建設・技師の青山直幸さん、東京都中野区立中学校・教諭の石井孝一さんが、それぞれ多忙な日常をさいて、編集に協力してくれました。

どうか書かれた方々、お読みいただく方々、すべての方々に、全ページを通してご判読を賜はりたいと念願するものであります。なほさいごになりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、朝野から寄せられた得難い御支援に心から御礼を申し上げます。

〝霧島合宿教室〟を振り返って

――合宿で共に学んだ友等へ――

九州大学・経済学部・四年　奈良崎　修二

二十四回目を迎へた今年の合宿教室は、緑濃き霧島の地に全国から二百数十名の友を迎へて開催された。

今、静かに思ひ起してみると、合宿を一緒に過ごした友等の顔と共に、四泊五日間の一コマ一コマが鮮やかに甦って来る。僕自身の心も次から次へと大きく揺さぶられた五日間であった。一週間過ぎた今でもなほ、いまだに整理し切れない心の昂まりを感じてゐる。全国に散って行った参加者諸兄姉と、あの合宿での経験を一つ一つかみしめたい思ひで一杯である。

合宿の中で僕等の心は様々に揺れ動いた。講義や輪読で身を打震はす様な感動を覚えた友、初めての経験に、驚きを全身に表はした友、又、今迄の自分が持ってゐた価値観が、根底から突き崩される様な思ひに苦しみ抜いた友もゐた。いづれも、真の学問を求めての姿であったと思ふ。僕等はこの合宿では、平素の学園生活でするやうな、単なる知的な理解や解釈に精を出したのではなかった。各自おのおのが、自分の心を研ぎ澄まして、先人の言葉を深く味はひ、先生方のお話や友達の真実の声にわれとわが耳を傾けたのであり、それを自分自身の問題として全身で受けとめようとしたのである。それは又、自己を深く凝視する事でもあった。僕等が味はったものは、この様な努力と緊張の連続の中での感動であり、驚きであり、苦しみであったのである。

第一日になされた「合宿導入講義」で、山田輝彦先生は仰有った、「現代は心の死にやすい時代である」「大学の中にあって、学生の精神は荒廃してゐる」と。そしてまた、「心の死にやすきを突破せんが為に、先人の心を皆といっしょに偲んでゆきたい」とも訴へられた。まことに厳しい御指摘であった。これらのお言葉に、事の重大さに愕然とする者、あるいは、反発を感じて先生の御指摘が理解できないと言ふ者、反応は様々であった。しかし僕等は、五日間の合宿を終へて見ると、

確かに「心の死にやすき」環境を、漸くにして突破し得たのではなかったか。先人の一首の歌、故人の数行の文章を通してその人々の心の躍動が、又瑞々しい情感が、自分たちの心を揺り動かしてきたことを知ったからである。はじめの頃は、山田先生のさきの御指摘を理解し得なかった友らも、自分の心がこれほどまでに活き活きとしてきた事に驚きを隠さうとはしなかった。虚心に人の心を偲ぶといふ事が、これ程までにすばらしい情感の通ひ合ひを生みだすものかと、改めて痛感したのは僕だけではなかったと思ふ。僕等は、心と心、いのちといのちが触れあひ、それらを活き活きと共感し合ふことのできる精神世界を、合宿の集ひの中に実現し、それをお互ひに実感し合ったのだと思ふ。そしてさうした実感の中から、祖国日本の、国や歴史といふものと自己とのかかはり合ひの深さに目覚め、又現代の様々な問題、さらには人生といふものの厳粛さを考へてゆかうとし出したのである。

かうした貴重な経験を積んだ僕等は、これから学園に戻ってから取組む学問の上でも、その体験を真剣に生かし続けなければならない。現今の大学にあっては、それは至難の業かもしれぬ。しかし、それを為さずに、以前と変りない学問への取り組みや、個人的な喜怒哀楽に終始する友達付き合ひに戻ってしまふのでは、この合宿での事どもも、結局は単なる思ひ出で終って了ふだらう。それでは全く申訳ないことである。大いに心して進まうではないか。

最後に一言したいのは、第五日目の「全体感想発表」の時間に、友が自分に寄せてくれる心遣ひの有難さを述べた友らが多くをられたことであった。そのことは、この合宿によって、学問を心で味ふことに気付いた結果、人生にとってかけがへのない真の友情とは何か、についても判ってきたことを意味してゐた、と思ふ。大変に嬉しいことであった。この大切な友情を、長く、強く育んでゆきたい。そしてその付き合ひの中で、黒上正一郎先生が詠まれたお歌、

信を共に偲びあひ又たすけあふつどひはとはの力なりけり

のご心境を、わが心の糧として味はってゆきたいと思ふ。

「第24回合宿教室」記念撮影（参加者268名）於「霧島ホテル」（霧島）

参加者

（学生班　四十九大学）（洋数字は参加学生数）

東北大1　一橋大1　亜細亜大13　高千穂商大9　早稲田大5　中央大3　日本大3　青学大2　高崎経大2　東海大2　大東文化大2　専修大1　法政大1　国際商大1　明治大1　東京農大1　慶応大1　学習院大1　多摩美大1　神奈川大1　明学大1　埼玉大1　旭川女子短大1　名城大2　皇学館大1　京都産大1　大阪経法大1　大阪市大1　岡山大1　島根大1　広島大1　山口大3　九州大25　福岡教大8　福岡大10　西南学院大5　中村学園大3　八幡大3　九州共立大2　第一薬科大2　福岡女子大1　佐賀大4　長崎大5　長崎総合科学大1　熊本大10　熊本工大1　尚絅大1　宮崎大4　鹿児島大10

計一六二名（うち女子二五名）

（社会人・教員班）会社員、公務員、小・中・高教員など

計十九名

（招聘講師）二名**（大学教官有志協議会・国民文化研究会）**

七二名　**（見学参加者）**三名　**（事務局）**一〇名

総合計二六八名

鹿児島県・霧島国立公園・「霧島ホテル」にて

第24回〝合宿教室〟日程表—昭和54年8月｛5日（日）／9日（木）｝4泊5日間

主催｛大学教官有志協議会／社団法人・国民文化研究会

	8月5日（日）（第1日）	8月6日（月）（第2日）	8月7日（火）（第3日）	8月8日（水）（第4日）	8月9日（木）（第5日）
6:30		（起床）	（起床）	（起床）	（起床）
		（洗面・清掃）	（洗面・清掃）	（洗面・清掃）	（洗面・清掃）
		朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）	朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）	朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）	朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）
		朝食	朝食	朝食	朝食
8:00		（8：00）	（8：00）	（8：00）	（8：00）
		（講義）	（講義）	（講義）	志賀健一郎運営委員長所感発表
		世界経済調査会理事長 木内信胤先生	文学博士 元京都大学教授 高山岩男先生	福岡県立修猷館 高校教諭 小柳陽太郎先生	（8：20）
					参加者による（全体感想自由発表）
10:00		（10：00）	（10：00）	（10：00）	（9：50）
10:10		（10：10）	（10：10）	（10：10）	合宿をかへりみて（小田村先生）
		質疑応答（木内先生）	質疑応答（高山先生）		（10：20）
10:40		（10：40）	（10：40）	（班別討論）	（10：30）
10:50		（10：50）	全員記念写真撮影（11：00）		（班別懇談）及び感想文執筆と第2回短歌創作
		（班別討論）	（班別討論）	（11：30）	
		（12：00）	（12：00）	（12：00）	（12：00）
		（中食）		（中食）	閉会式（このあと中食）
1:00	（1：00）	（1：00）	中食	（1：00）	（解散）
	開会式・合宿趣旨説明・諸注意伝達	（講義）	（12：50）	（講義）	
1:45	（1：45）	『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』	（短歌創作導入講義）	国文研理事長・亜細亜大学教授 小田村寅二郎先生	
1:50	志賀運営委員長あいさつ	亜細亜大学教授 夜久正雄先生	戸田建設㈱社員 青山直幸氏		
2:20	（2：20）			（2：30）	2:30
2:30	（2：30）	（2：30）	（2：00）	（2：40）	2:40
	（班別自己紹介）班別討論・『日本への回帰第14集』班別輪読	（班別輪読）	レクリエーション 霧島神宮参拝 新続 河原 散策	（班別討論）	
			短歌創作		
4:30	（4：30）			（4：20）	4:20
	（合宿導入講義）福岡教育大学教授 山田輝彦先生	（5：00）		（短歌全体批評）国文研理事 長内俊平先生	
		（青年研究発表）坂口秀俊 大町毅朋 前園由美子（6:00）		（5：30）	5:30
				地区別・大学別・懇談	
6:00	（6：00）		（6：00）	（6：00）	6:00
	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩	
			（短歌提出）	（7：30）	7:30
8:00	（8：00）	（8：00）	（8：00）	（班別・短歌相互批評）	
			慰霊祭の説明（吉田哲太郎）		
			（8：15）		
	（班別討論）	（班別輪読）	慰霊祭執行	（9：00）	9:00
			（9：15）	（夜の集ひ）	
			（班別懇談）		
10:00	（10：00）	（10：00）	（10：00）	（10：00）	10:00
	就床	就床	就床	就床	
10:30	（消灯）	（消灯）	（消灯）	（消灯）	10:30

（注意）↓ 学生参加者は、一班八名前後の班編成です。会場入口受付で、所属する班を確認のこと。↑

1. 同じ班の人々のあひだに限らず、全参加者一体となって、心の交流をはかっていただきたい。
2. 上記の日程は、合宿中途において一部変更されることもある。
3. 集合は敏速に行ふこと。
4. 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入場すること。
5. 講義のはじめと終りは正坐し、司会者の指示に従って講師に礼すること。
6. 講義中は服装・姿勢に留意し、度を過ごしたやうな不作法は慎むこと。
7. 講義会場、自室をとはず、部屋に入るときは、スリッパをぬぐときに、必ず向ふむきに、そろへてぬぐこと。
8. 質問は、司会者の指示をうけて行ひ、質問者は、質問のはじめに
   ① 班名 ② 学校名と学年（社会人は就職先） ③ 氏名を、明瞭な言葉で告げること。
9. 講義会場における席次は、常に移動するが、必ず班別に、指定の場所にまとまって、着席すること。

第24回 〝合宿教室〟のあらまし

第一日

（八月五日・日曜日）

昭和五十四年八月五日、全国各地の大学・職場から、二百六十八名の学生・青年・助言者たちが、暑中遠路をものともせず、合宿教室の開催地・鹿児島県霧島国立公園内「**霧島ホテル**」へと集まった。会場玄関には「**友よ！　と呼べば友は来りぬ**」と墨痕鮮かに書かれた横幕が、参加者一同を迎へてゐた。

開会式

午後一時丁度、九州大学三年、弓立忠弘君の力強い「**開会宣言**」によって〝第二十四回全国学生青年合宿教室〟の幕は切って落とされた。「**国歌斉唱**」の後、参加者一同は《戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命をささげられたすべての祖先の御霊（みたま）》に対し、一分間の黙禱をささげた。

続いて、主催者を代表して「国民文化研究会」理事長・小田村寅二郎先生が、

「この合宿では、大学の入試の難易度による格差、学年・年齢の違ひ等、世の中で言はれてゐるやうな外的な区別を一切取り払って、一対一の日本の青年として平等な立場でつき合ひを開始しませう」

と呼びかけられた。ついで、参加学生を代表して、九州大学四年、奈良崎修二君が、この合宿に苦労して友達を誘った経験を語ったあと、吉田松陰の若き日の遊学日記から、

「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く」

といふ言葉を引用し、

「この四泊五日の合宿中、ご講義の中から、また班別討論での友の友葉の中から、自己の心を発動させる〝機〟を逃さずつかみ取りたい」

と決意を述べ、開会式を終った。

合宿生活の細部に亘る注意事項が、指揮班長・田之上正明氏（熊本県立・人吉高校教諭・26歳）によって、参加者全員に伝へられた後、本合宿の運営委員長・志賀建一郎氏（福岡県立・三池高校教諭・32歳）が登壇した。

志賀運営委員長は冒頭、幕末の勤皇志士・平野国臣が、煙を大空に吐く桜島を仰ぎつつ、胸中に沸々と湧き起こる国への思ひを詠んだ、

我が胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすしさくらじまやま

の一首の和歌を紹介し、ここに集った学生・青年一人〳〵の心の中に、平野国臣に負けないだけの「燃ゆる思ひ」があるだらうか、と問ひかけた。そしてこの合宿では、

「自分の心に真向って、率直にものを考へ、また相手の心に真向って、率直に飛び込んで行く努力をして戴きたい。そしてその中から、自分の心を燃やすものを是非つかんで下さい」

と訴へた。この後直ちに全参加者は、各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶり等を含めた「**自己紹介**」を行ひ、続いて、昨年の「合宿教室」のレポートである『日本への回帰―第十四集』の輪読に入った。

講義　「明治の精神―現代精神蘇生のために―」　　福岡教育大学教授　山田輝彦先生

この「導入講義」を担当された山田先生は、戦後日本の思想の歩みを三つの時期、すなはち、①イデオロギーが神話のやうに扱はれた時代、②イデオロギーが至上のものではなくなって、相対的なものと扱はれた時代、③やがてイデオロギーが崩壊していった時代の三つに分けられ、これら三時期を貫くのが、「国家無視」の一語に尽きる、と指摘された。このやうな瀕死の状態に立ち至ってゐるわが国の現代精神を、蘇生させるために、山田先生は明治の精神に触れてゆかれた。

まづ、福沢諭吉の『文明論之概略』から、

「国の独立如何の事に逢へば忽ち之に感動して、恰も蜂尾の刺蕁に触るるが如く、心身共に頴敏ならんことを欲するのみ。」

といふ箇処を引用され、

「平素は各々自分の職業・生活に没頭してゐても、一旦国の独立にかゝはる如き問題に遭遇するや、敏感に反応する。そのやうな気持ちを明治の人々はみんなが持ってゐた」

と話を進められた。そして、その事実を示すものとして、樋口一葉が無名であった頃の『日記』や日露戦争従軍兵士の歌集である『山桜集』、更には小学唱歌『螢の光』の第三、第四番目の歌詞を紹介され、

「子供達の卒業式に〝千島のおくも沖縄もやしまのうちのまもりなり〟と歌はせた、明治時代の大人達の祈りを思ってみて下さい」

と語りかけられ、翻って現在の日本を取り巻く、竹島・尖閣列島・国後・択捉といった領土問題に関して、固有の領土が外国によって無法に扱はれてゐることに、心の底から憤りが湧いて来ないやうな人は、明治時代には一人もをらなかったこと、そのやうなことでは日本人として、根本的にをかしいのではないかと訴へられた。更に先生は、

「明治の文豪と言はれる、子規・漱石・鷗外・露伴・藤村らは皆、美・愛といったものを追求する一方で、非常に健康な愛国者であった。この点も明治の偉大さと言へる」

と続けられ、最後に、この明治といふ時代の中心に明治天皇が居られたといふ、重要な歴史事実に触れられた。明治三十七年、日露戦争開戦の年に天皇がお詠みなった御歌、

樹間花

こずゑのみ人に知られて櫻花木がくれながら散りや果つらむ

を紹介され、

「人知れず散ってゆく花に寄せる思ひは、また、目立たぬ処で黙々と生き、国を支へてゐる名もなき国民に注がれる御心に通ふものでせう。かけがへのない個人の生命が、天皇の深いみ心に摂取されてゆく、かうした陛下の憶念の情に支へられた、明治といふ時代の力を、本当に感じ取って欲しい」

と結ばれた。

夜は、各班室で**班別討論**の時間を持った。山田先生が心をこめて訴へられた問題は何であったのか。そしてそれを自分自身の問題として考へてゆくには、どこを手がかりにすれば良いのか、といった点に、次第に的が絞られて行った。参加学生青年諸君は長旅の疲れも忘れて、あるいは感動し、あるいは驚きまた戸惑ひつつ、合宿最初の夜は更けて行ったのである。

第二日

（八月六日・月曜日）

講義「これからの世界のなかの日本—近刊『新しい、健康な経済学』に触れながら—」

世界経済調査会理事長　木内信胤先生

今回で連続二十回ご出講の木内先生は「①日本は明治以来百十数年に亘る〝自己を西欧化する〟といふ長い道を、成功裡に走り了ったこと」「②近代西欧文明の作り主である欧米諸国において、その文明が概ねその任務を完了し、行き詰りに到達したことにより〝社会の乱れ〟が出て来たこと」の二点を指摘され、この三・四年来提唱してをられる「新しい日本の誕生」といふ事に言及された。

そして、新しい誕生を招来する「新しい日本文明」について、

「現下日本の、政治・経済上の諸問題を〝何となしに〟解決して行ってゐるのは、日本固有の文明に、印度・支那、更に西欧の文明を融合して生み出された〝新しい日本文明〟の力による。この文明は我々国民が一様に身につけてゐるものであるが、大多数の日本人はまだこの事

を自覚してゐない」と言及され、しかし、

「あと一年以内に、この自覚は国民に浸透すると思ふ。〃事実〃が〃自覚〃された時、更に大きな力となる」

と混迷を増す世界の中で「新出発」すべき日本の素晴らしさと、役割の大きさを説いて行かれた。また先生は、日本固有の文明とは、

「あらゆるものを、その美において感得する事を究極の願ひとしてゐるやうな文明」

「森羅万象に自己を投入出来るのが、日本人のひとつの特徴である」

と説明され、さうした日本人一人〳〵の生き方を包み込むやうな悠々たる言葉―「天行健」―を紹介して下さった。

先生はこのあと、学生の質問に答へて下さる中で、

「眼を開けて、聴く態度で八十年間生きてゐれば、たいがい、ものが見えて来るものだ。何か一つのことをきっかけにして、ものを考へて行きなさい」

と我々を暖かく励まして下さった。お若い頃から、常に日本経済の第一線に立って活躍され、そして日本人の生き方を考へ続けて来られた先生の、確信に満ちた言葉と、日本民族に対する熱い信頼のお心は、参加者一同に大きな感動を与へた。

講義「〃輪読〃導入講義」　　亜細亜大学教授　夜久正雄先生

先生はまづ、昨年の合宿で、小林秀雄先生が講義された中から

「心を開いて、人を信じてお互に語り合ふところに、火花のやうに散る知恵が、本当に生きた知恵だ」

といふ言葉を紹介され、〃輪読〃のあり方が、このお言葉に生き生きと示されてゐる、と語られた。

続いて、「友達がゐないと人が成長しないと同様に、文明も他との交流なしには、発展しない」

と述べられ、

「我が国固有の文明が、他の文明―印度・支那文明―と初めて本格的に交流した時代に出現されたのが、聖徳太子である」

と指摘された。太子の、大陸文明摂取のご態度について、先生は、

「太子の仏典研究は、単なる概念的理解にとどまらぬ太子御自身の体験と信念の表現であり、またその研究方法は〝輪読〟の形式をとられたことが偲ばれる。即ち、太子を中心として幾人かの人々が心を開いて語り合ふ中に三経義疏は成ったのであらう」

と語られた。

次に先生は、輪読のテキストである『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（黒上正一郎著）の中から、太子の御文章を実際に読み味はってゆかれた。まづ〝声は以て意を伝へ、書は以て声を伝ふ〟といふ太子の御言葉をあげられて、

「本を読む為には、論旨を分析的概念的に理解することよりも、作者の心情に思ひを致し、その心の声が聞こえて来るまで読み込むことが必要だ。そこに読書の感動が生まれるのです。太子の〝文に随ひて直ちに唱ふるのみ〟といふ御言葉はさうした太子御自身の感動の御表現である」

と示された。さらに太子の〝耳に善く聴く〟といふ御言葉をあげられて、

「善く聴き、善く読んでゐる時に、自分の心が先人の言葉の中に摂取されてゆくやうな感動を覚える。その自己内心の感動の事実を信じないで、我々は一体何を信じる事ができようか」

と語られ、最後に、

「本当に感動した時には、自他の区別はなくなってゐる。これが〝神情開朗にして小乗の凝滞なきなり〟といふ事であらう。このやうな心持ちを求めて生きてゆきたいものです」

と述べてご講義を終へられた。

ご講義のあと参加者は、各班室にもどり、先生の手びきに従って**班別輪読**の時間を持った。難しい文章を繰り返し〳〵読み、一つの言葉に班員皆が心を寄せ合ふ努力は、苦しいがまた楽しい経験でもあった。特に今回

は、「青年研究発表」の時間をはさんで、二つの時間帯を連続して都合四時間半に亘って輪読と取り組んだ。これは、合宿教室二十四回の歴史の中でも、初めての試みであったが、二回目・夜の時間帯には、更に集中度が高まり、読み方も深まったやうである。聖徳太子が、仏典の言葉を「概念的理解に依ってのみ摂取」されず、「生きたる言葉として、人生事実の上に味識」されたやうに、我々も少しでも、そのやうな読み方に近づかうと、具体的な学問の場が展開されはじめた事は、大きな喜びであった。

青年研究発表

最初に登壇した福岡県立若松高校教諭の**坂口秀俊君**（九州大学・文・昭和49年卒）は、まづ、今年の卒業式に同校で起こった国家斉唱妨害事件の経過を述べ、更に赴任当時の校内の雰囲気についても、

「生徒の早退遅刻喫煙があまりに多く予想以上の荒廃ぶりでした。又、日教組に入らなかった為脅迫電話があり、生徒の中にも私を右翼であるといふ者がをりました」

と告白して、教育界の異常な現状を訴へた。

このような情況の中でも、授業中に、日露戦争当時の野口英世の愛国の情あふれる手紙を読ませたり、文部省唱歌「広瀬中佐」を歌ってきかせたりして、生徒の心に日本人としての自覚を培って行った事を語ってくれた。そして、昨年の体育祭の閉会式・国旗降納の折、一人の生徒が歌ひ出した『君が代』が次第に広がり、遂には大合唱になった時の身の震へる感動を語り、

「その時の感動を支へにして、如何なる険しい道も着実に歩いてゆきたい」

と強い決意を述べた。

続いて、福岡県宗像郡の町立玄海小学校教諭、**前園由美子さん**（鹿児島大学・教・昭和52年卒）が登壇した。前園さんは理科の「へちまの観察」の折の体験を語り、

「みんなで育てたへちまの茎を実験のために切らうといふと子供達は口々に〝かはいさう〟〝ざん

こくだ〃といふのです。それを聞いて子供達がへちまの生命に驚くほど心を通はせてゐる事にはっとしました。子供達はへちまが切られる事をまるで自分が切られる事のやうに思ふやさしい心を備へてゐるのです」

とその時の感動を語った。更に、教へ子の一人リエちゃんの日記と、そのお母さんのことを紹介して、

「リエちゃんをみてゐて、教育とは『人間形成』などといった力んだものではなく、子供一人一人にある、成長しようといふ気持を助けてあげる事なのだと思ひました」

と語り、最後にその時の気持を詠んだ次の歌を読み上げた。

子供らの尊きいのちいつくしみ心つくして育くみゆかむ

最後に日本ユニバック㈱勤務の**大町憲朗君**（東京工業大学・理・昭和52年卒）はまづ、

思ふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

との明治天皇御製を拝誦し、この御製を偲びつつ発表に臨みたいと前置した後、自分の読書体験から語って行った。大町君は『いのちささげて』の中の石田安治さんの遺文に触れ、

「病床にありながら国の為に一心に心をつくし、精一杯生きぬかれた石田さんの姿に心をうたれはげまされる思ひがした」

と述べ、数へ年僅かに十七歳で亡くなった石田さんが終生愛読された『古事記』の中から「天若日子」の物語を引用した。そして、

「石田さんや、天若日子の物語に出て来る神々に〃動乱の生に随順せし情意的人格〃さながらの姿を見る思ひがする」

と述べ〃学生生活の中に打ち込むものがない〃〃何となく自分の生活に不満を持ってゐる〃といった低次元の悩みに停まることなく、先人の姿を偲んで精一ぱい生き〳〵と生きて欲しいと訴へた。

坂口秀俊先輩の発表をお聴きして

九州大学医学部三年　笠　晋一朗

さまざまの苦しみこえて先輩は己が思ひをつらぬき給ひぬ
先輩の御言葉聞けば松陰の「死して後已む」てふ御言葉うかびく
だれとなく歌ひだしたる君が代に心あはせてみな歌ひぬとふ
生徒からわきあがりたる君が代のしらべをきけば足ふるへぬとふ

第三日

（八月七日・火曜日）

講義「精神文化と科学的機械文明と―従来のイデオロギーでは、今日の難問は解けなくなった―」

文学博士・元京都大学教授　高　山　岩　男　先　生

先生はまづ、

「近代科学の進歩の歴史は〝道具〟の時代から〝機械〟の時代への移行の歴史であり、科学技術の恐るべき発達が人間社会を変質させ、人間性崩壊の方向に追ひやりつつある」

と指摘された。そして、

「急速な科学・機械の進歩は戦争の形態にも影響を及ぼした。兵器の発達につれて、局地戦争から国民戦争、さらには二十世紀の世界戦争へと進み、今や人類絶滅の危険すら現実のものとなってゐる」

と述べられた。

また、合成技術の発達により、今まで自然界になかった物質が次々と生み出され「試験管ベイビー」や「遺伝子の組み替へ」により〝生命〟までが合成される現代を、

「代用物が本物を駆逐する時代」

と規定され、我々の生命観が知らず知らずのうちに変質させられてゐる事に警鐘を鳴らされた。

続いて先生は「デモクラシー」の問題に触れられ、五百年間平和な状態が続いたといふローマ共和制について、

「平時にあっても非常時の備へを忘れず、直面する現実に国民全体が一丸となって対処し、一国として充実して存続してゐた」

と話され、さらに、

「王制・貴族制・共和制等の諸要素を自国の国柄にうまく融合し、非常時には如何に対処するかをよく考へたデモクラシーをこそ求めるべきである」

と語られた。

更に先生は、芸術・哲学・宗教等、精神文化の永遠性に触れられた後、

「今日の課題は、進歩して已まぬ科学・技術の面と〝進歩〟ではとらへられない精神文化とを、如何に調和させてゆくかにある」

と強調され、最後にその達成の道として、従来のイデオロギーにとらはれず、「公」と「私」の調和をはかった新しい所有権の形態として「総有権」といふ考へ方をお示し下さった。

先生の深い学識に基いたお話しは、処々、非常に難しい部分もあったが、ここでも、抽象的概念としてではなく、現実具体的人生の問題として講義を聞き、また班別討論でそれを深化させてゆくといふ努力が展開された。

なほ、初日から行なって来た**班別討論**は、この頃になると更に熱気を帯びそれぞれの思ひを各人の言葉で語り合ふ中で時に反発しあひ、また共感しあひつつ、参加者相互の交流は次第に深められていった。

講義「〝短歌創作〟導入講義」

戸田建設㈱技師　青　山　直　幸　氏（30歳）

短歌創作は、この合宿の主要なテーマの一つである。建設会社の青年技師青山直幸氏によって短歌創作の導入講義が行はれた。氏は、

「かつて本居宣長は、〝感ずべきことにあたりて、感ずべき心を知りて、感ずる〟と言ったが、最近の青年は、熱中すること、感動することが少ない。このやうな何事にも無感動な風潮から抜け出して、日本人の持つ生き生きとした心の働きを取り戻して欲しい」

と話しを始め、

「古人は感動した時に、それを三十一文字の短歌の形にととのへ、それによって感動に形を与へ、心情・感情の洗練を行ってきたのであり、和歌を詠むことは人間本来の自然な心の働きを回復する大切な道です」

と語った。そして、明治天皇御製、

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

を拝誦し、

「自分の心に感じたことを率直に詠めば、それはそのまま歌になるのです。平易な言葉でも心に感じたままに表現することが大切です」

と語った。また、日本人は、歌を詠むことを「しきしまの道」と呼び、万葉の昔から今日に至るまで、日本人が歩むべき道の中心として受け継いできたことを話して行った。

続いて、大東亜戦争に学徒出陣し、終戦後に自決された故寺尾博之さんが、出征直前に数人の友と霧島に遊ばれた時に詠まれた、

再びは見る日もあらじきりしまに友と眺むる月の影かな

以下七首の、友との永訣の思ひの込められた歌を読み味はっていった。これ等の歌の、悲しくも雄々しきしらべは、参加者の心を強く打つものがあった。切実な思ひを詠んだ歌は、人の心に深く刻まれることが、自づと感じられたのである。

短歌創作導入講義のあと、全参加者は、五台のバスに分乗して**霧島神宮**へと向かった。激しく降り続いてゐた雨は止んだが、当初予定されてゐた高千穂登山は、残念ながら中止となった。霧島神宮では、全員で参拝したあと、宮司さんのお話を伺った。再びバスに乗り、**高千穂河原**に向かった。高千穂の峰は霧に蔽はれてその姿を仰ぎ見ることはできなかったが、皆、思ひ思ひに高千穂河原を散策し、ある者は友と語らひ、ある者は和歌を詠むなど、緊張した日程の中で、心楽しい一時を過ごした。

慰霊祭

「慰霊祭」に先立って、**吉田哲太郎氏**（吉田歯科医院々長・31歳）によって慰霊祭の説明が行はれた。その後、屋外に設置された祭壇の前に全員が整列した。心配された天候も、降り続いてゐた雨があがり、夜空には星さへ輝くさはやかな宵となった。

まづ、お祓ひに代へて故三井甲之先生の、

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌が朗詠され、戦時・平時を問はず日本の国をまもるために尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊（みたま）をお呼びするため、黙禱を捧げた。続いて、参加者一同を代表して高木尚一先生が**祭文**を奏上され、そのあと、夜久正雄先生が**御製拝誦**をされた。うち数首を左に記載する。

明治天皇御製

明治三十七・八年、日露戦争の折に詠ませたまへる大御歌から

折にふれて

世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

峯

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

歌

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

披書思昔

のこしおく書をしみればいにしへの人の聲をも聞くこゝちして

凱旋の時

外國にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらむ

最後に全員で「**海ゆかば**」を歌ひ御霊をお送り申し上げ、慰霊祭を終へた。そのあと、なほらひの御神酒を全員がいただき班別懇談のため各班室へと入っていった。

第四日

（八月八日・水曜日）

合宿第四日目の朝、前日までの悪天候が嘘のやうに南国の爽やかな青空が広がった。参加者は、まばゆいばかりの朝日を仰いで〝**朝の集ひ**〟の広場に集合した。をりしも広場には、青空高く、明治天皇御製、

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな

の幟が掲げられてゐた。参加者全員の国歌斉唱によって、国旗が掲揚され、朝空に日の丸の旗が翻った。前二日の朝の集ひとは打って変はり参加者は朝の清々しい大気を胸一杯にすって、元気よくラジオ体操を行ひ、第四日の日程に入っていった。

講義「やむを得ざるの誠―松陰・素行・宣長を中心に―」福岡県立修猷館高校教諭　小柳陽太郎先生

先生は、まづ、吉田松陰の、

かくすればかくなるものとしりながらやむにやまれぬやまとだましひ

といふ歌に触れて、

「ここには日本人が昔から大事にしてきた人生の姿が、表現されてゐる。すなはち、小賢しい知的判断を拒絶して、心に湧きおこってくるその心の動きさながらに行って悔いることのない世界であり、古事記・万葉の世界に通ずるものである」とお話になられた。

更に先生は、松陰の『講孟餘話』から引用されつつ、講義をすすめられたが、「動処に於て本心を認むる、更に善し」の部分では、

「〝動処に於て本心を認むる〟といふ生き方は、また日本人が昔から大事にしてきた〝しきしまの道〟にもつらぬかれてきてゐる。自分の揺れ動くこころ、その動きを素直にみつめ、それをそのままに短歌といふ形にととのへて一瞬の感動をそこにとどめる。生きてゐる心のはたらきを固定化し死物化するのではなく、揺れ動くその心の動脈をそのままに表現しようとしてきたのが日本人である」

と語られた。又、松下村塾での松陰の熱情あふれる教育のありさまを『松下村塾零話』に偲ばれて、

「松陰にとっての学問とは、先人と巡り会ふよろこびをたしかめることにあった。然るに現代人は松陰が幕末といふ時代をどのやうに生きて行動したかを偲び追体験しようとする努力を怠って、すぐに歴史上にどのやうに位置づけたらよいのかといふことを考へたがる。生きたものを概念におきかへ、体系の中に封じ込めてしまふ。これが現代の悪しき学風である」

と、現在の学問のあり方を鋭く批判された。その後先生は、本居宣長、山鹿素行の文章にも触れてお話を進められたが、最後に明治天皇の御製、

疾き遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

を引用され、

「いつはりのない自然な心のはたらき、即ちまごころこそ、人の心を幾年をへても感動させるものである。我々はこのやうな生き生きとした人間本来の心をとりもどしていかねばならない」

と語られ、気迫のこもった御講義を終へられた。

講義「〝畏敬のこゝろ〟を身につけなくては、日本国民にあらず」

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授　小田村寅二郎先生

先生は、まづ、

「〝畏敬のこころ〟とは、自分自身が欠点の多い人間であるといふ自覚がなければ生まれてこない」

と述べられて、

「現在の学校教育の根本的欠陥は、日本人が昔から大切に守り育ててきたこの〝畏敬のこころ〟を教へようとしない点にある。その欠陥が、天皇の問題を概念的な不毛の議論に終はらせてしまってゐる」

と指摘された。

先生は〝畏敬のこころ〟の具体的表現として、帝国憲法発布の際、明治天皇がお示しになった〝御告文〟〝勅語〟〝上諭〟といふ三つの〝前文〟を取りあげられ、

「ここには、明治天皇が、近代的な憲法を発布されるに至った当時の日本といふ国家そのものについて、それはいま生きてゐる自分と国民とで作るものではあるが、その内容の本筋は、すべて皇室の御先祖と国民の祖先とが力を合せて作り上げたものである、といふことを宣明されてゐる。明治天皇のまことに謙虚なこの大御心を拝することなしに『大日本帝国憲法』を語ることは間違ってゐる」

と指摘された。

「ここに示された立法精神のどこに、今日の憲法学者がいふやうな〝押しつけ憲法〟といった専制的な性格がうかがはれようか。むしろ、国家の政治のあり方を、亡くなられた多くの祖先の存在をも含めて、考へてゐらっしゃるといふ点において、真の意味におけるデモクラシーの精神さへもが見事に顕はれてゐるではないか」

と語られた。

さらに先生は〝畏敬のこころ〟をめぐって、幕末の志士吉田松陰の処刑の日の様子に話をうつされ、

「松陰は志をうけついでくれる友を信じて、従容として処刑された。同囚の志士たちは、松陰の死に様に感動し、和歌を詠んで弔った。彼らにとって、友情とは友を畏敬する心であり、志をてらしあふ仲であったのです。死んでゆく者と生きて残る者の間は、断絶されたものではなく、畏敬のこころを通して、死んでゆく人が生き残る人を励ましてゐたといってよい。人生にはかういふ厳粛な事実があるのです」

と述べられた。

ついで先生は、木内先生が紹介された『ジャパン・アズ・ナンバーワン』といふ本に触れられ、

「学生の責務とは、国の運命を考へることです。今、アメリカの学者や学生は、日本の成功の原因を探らうと、日本に緊張した目を注いでゐる。その彼らの姿を我らは学ばねばならない。確かに今の日本の大学において、国の問題を考へ、心を鍛へる場はないだらう。しかし、さういふ〝場〟は、自分で作れるではないか。どうか、アメリカの学生が、今何を話してゐるかを思ひつゝ、現実の問題を考へ、友らとのつきあひを正していっていただきたい」

と熱をこめて、訴へられた。

最後に先生は、講義レジメに掲げられた歴代の天皇方の御製にふれられて、

「歴代の天皇様の御製には、国民の上やすかれといふ祈りが、一すぢに貫かれてゐる。畏敬の心の中に日本精神はのびてきてゐるのです。この畏敬の心を育むのが第一義的な学問であることを是非心に留めていただきたい」

と話されて、ご講義を終へられた。

小田村先生の御講義をお聴きして　　高千穂商科大学商学部二年　渡辺卓志

自分から心きたへる場をもてと強き御言葉胸をつき刺す
君たちと同年代の友の中に既に働きたる者ありといはれり
君たちは学ぶ者なり国の命考へたまへと厳しくいはれり
御言葉に我が身ふるへておのづから熱き思ひのわきあがるかな

和歌全体批評

電源開発㈱　環境立地部部長代理　長内俊平先生

参加者の全員から、前日の夕刻までに提出された和歌は一千五百首に及び、諸先生方の選歌作業と若手助言者によるガリ切り作業、そのあとの事務局の高校生達による深夜にまで及ぶ印刷作業によって、三十余枚の分厚い歌稿となって、全参加者に配布された。

長内先生は、まづ、

「私達はうまい歌を作らうとしてゐるのではない。自分の心を素直に述べた歌を大切にしたい」

と語られて、批評に入られた。一つ一つの言葉を大切にして作者の気持ちに迫ってゆかれる先生の指摘によって、参加者全員が、一人の友人の詠んだ一つの言葉に目を注ぐ。それは、一人の友人の心の動きに参加者全員が心を寄せてゆくことであ

った。一人の友人は次の歌を詠んでゐた。

班別で何もわからずただ一人意見を出せずくやしと思ふ

先生は、

〝ただ一人〟といふ言葉は、心のくぐもりがあるのではないか。しかし、この〝くやしと思ふ〟といふ言葉が僕は好きだ。青年には〝くやしと思ふ〟気持ちがなければ、だめです」

と語られた。

先生の真率なご批評は、また、たくまざるユーモアに溢れて、講義室は度々爆笑に湧いた。最後に先生は、「歌に上達する為の秘訣を教へます」とおっしゃって、

「一つは良い歌を読むこと。もう一つは、友達に便りを書いて、その便りの端に歌を一首書くことです。さうやってお互ひの心を通はせる中から、僕らは生きてゆく力を得るのです」

と語られて、全体批評をしめくくられた。

全体批評のあと、数か所の部屋に別れて「**地区別・大学別懇談**」が開かれた。各参加者は、それぞれのグループの輪の中に入って、今後の大学や職場における勉強会などの活動について、意見を交換した。

夜に入って、**班別和歌相互批評**の時間が持たれ、班員全員の歌が懇切に批評添削された。作者は歌に詠まうとした自らの気持ちを述べる。皆は力を寄せあひ、その気持ちにそって、表現をより正確に正してゆくのである。正確に訂正する為には、作者の心をより深く偲び、自らの内心に蘇らせねばならない。それは、正確な言葉遣ひの修練であると共に、心をくだいてゆく修練でもあった。かうして、作者の心を思ひ合ふ中に、お互ひの心が通ひ合ひ、心広がる共感の世界が生み出されていった。

最後の夜の集ひ

厳しい日程を消化してきた参加者は、この時ばかりは、緊張をほぐして余興を楽しんだ。一人一罐だけの僅かなビールと西瓜で全員

が心から楽しんだ。出し物も放歌高吟あり、馬鹿踊りあり、乙女の美しき斉唱あり、かつまた、和歌の朗詠ありで、爆笑と拍手の連続であった。班ごとに、大学ごとに地区ごとに様々のグループが登場した。最後は、参加者全員による「**進めこの道**」の大合唱であった。そのあとも、各班室では、語り尽せぬ思ひを夜の更けるのも忘れて語り合った。

第五日

（八月九日・木曜日）

四泊五日の合宿も、いよいよ最終日となった。各参加者がこの合宿教室で学んだことを確認して、霧島の山を下る時が間近に迫ったのである。

全体感想自由発表

全参加者が、この合宿で何を学び、何を感じたか、それを忌憚なく述べあふ全体感想自由発表の時間が来た。まづ、合宿教室運営委員長、志賀建一郎氏が次のやうに挨拶した。

「長内先生は、和歌全体批評の時に〝くやしと思ふ〟といふ一人の学生の言葉に注目された。その時、その言葉が、僕らの胸中に強く迫ってきたといふことは、〝くやしと思ふ〟といふ言葉が僕らの体験の中に〝生命化〟したといふことではあるまいか。僕らがこの合宿で学んできたものは、〝言葉〟といふものを生命化することであった。大学々内における精神の荒廃は、生命化された言葉が発せられてゐないといふ点にある。さうした学内の現状ををかしいと思ふか、思はぬかは、畢竟僕らの生命力の問題であり、〝くやしと思ふ〟心が、僕らの内心に鋭敏に生きてゐるかどうかにかかってゐる。この合宿で取りあげられた、学問の問題、教育の問題、あるいは国防の問題に直面して、僕らの内心にくやしといふ思ひが湧いてくるならば、それが、僕らの精神に、また大学の学内に活力をもたらすものと信ずる」

運営委員長の挨拶に続いて、各参加者が次々に壇上に登り、各自の思ひを披瀝した。合宿の感動を潑剌とした口調で述べる友、班での痛切な体験を涙して語る友、これからの決意を力強く表明する友、様々な友があった。

合宿に勧誘せし友の壇上で感想を述ぶる

とつとつと話し給ひし友どちの面輪を見れば涙こみあぐ
すなほなる心をもちて物事に当りゆくてふ御言葉嬉しも
大学に帰りてのちもこの友と共に学びてゆかむとぞ思ふ

福岡大学法学部三年　源嶋秀治

全体感想発表のあと、小田村寅二郎先生が、「**合宿をかへりみて**」と題してお話になった。先生は、

「この五日間の体験の中で友達づきあひの奥底知れない面が見えてきたのではないか。友情と一口に言はれるが、いはゆる大学の中で使はれてゐる友情といふ言葉と、この合宿に生み出された友情とのレベルの差を思ってほしい。学問をする者の友情とは、個人的な喜びや悲しみに留まらぬ、もっとスケールの大きいものの中で通ひ合ふ友情なのです」

と述べられた。さらに先生は、憲法問題に見られるやうに、日本固有の文明を看過して、西洋の文明をそのまゝ取り入れてしまった学問の問題を厳しく指摘され、

「誤まった西洋文明の摂取の例として〝ゴッド〟を〝神〟といふ言葉で訳してしまったことがあげられる。日本人は亡き人のこころを偲ぶとき、〝神〟とまつってきたのであって、それは一神教の〝ゴッド〟とは異質の概念である。かうした根本の問題を百年間おろそかにしてきたことが、現在の日本の学問を骨ぬきにしてゐるのです」

と訴へられた。

感想文執筆

全体意見発表で、いろいろな人達の意見を聞き、それを各自各様に受けとめた参加者は、それぞれの班室で感想文をしたためた。閉会式前のあわただしく短い時間であったが、各自、感じたままを書き綴った。感想文の執筆と同時に**第二回の和歌創作**も行はれた。これらの感想文と和歌を編集したのが、この『**感想文集**』である。

閉会式

全参加者が精魂を傾けて〝祖国と学問と人生〟について学び合った〝第二十四回学生青年合宿教室〟も、つひに閉会の時を迎へた。二度繰返された「**国歌斉唱**」は、参加者全員の声が一つに融け合って、力強く響きわたった。

参加学生を代表して、九州大学四年の亀川龍彦君が、

「友と真剣に語り合ひ、心が通ひ合ったとき、大きな喜びを得た。今、僕らに問はれてゐるのは、この感動をいかに持続させてゆくか、といふことだ。明治天皇の御製、

もろともにたすけかはしてむつび合ふ友ぞ世にたつ力なるべき

を胸にとどめて頑張ってゆかう」

と挨拶した。続いて、主催者を代表して、国民文化研究会・副理事長、宝辺正久先生が挨拶された。先生は、

「全体感想発表に立たれた諸君の姿を見て感動した。君達が心を動かせば、その君達の姿を見て、私の心も動くのです。小田村先生が仰有ったやうに、学問をしなければ学生とは言へない。この合宿で皆さんは学問の喜びを経験した。是非、学問に志して、日本を支へてゆくべく努めて下さい。この合宿で共に学んだ友らと、葉書一枚でもやりとりを続けてほしい。それが、日本の学びの道の第一歩だと信じます」

と、一語一語かみしめるやうに話された。

挨拶のあと、全参加者によって『**進めこの道**』（三井甲之作詞、信時潔作曲）を斉唱した。「祖国のいのちともろともに、たたかひ、たたかひ進むべし」といふ歌詞が、力強く声高らかにうたひあげられた。

最後に亜細亜大学三年、安田利雄君の「**閉会宣言**」によって、厳しくも充実した四泊五日間の合宿全日程の幕は閉ぢられたのである。式の後、各参加者は、共に学び語り合った友らとの別れを惜しみつつ、来年の再会を約して、霧島山を下ったのだった。

助言者の紹介

高千穂商科大学・教授　高木尚一
下関市・㈱宝辺商店・社長　宝辺正久
熊本女子商業高等学校・講師　故・瀬上安正
熊本県・八代市・助役　加藤敏治
住宅金融公庫・参与　島田好衛
島根県・玉造温泉・こんや別館・代表取締役　青砥宏一
神奈川県・舞岡八幡宮・宮司　関正臣
高千穂商科大学・助教授　名越二荒之助
太平洋工業㈱・取締役　高木晃吉
熊本市役所・収入役　徳永正巳
農村漁業金融公庫・副総裁　小田村四郎
㈱ファミリー・常務取締役　松吉基順
小泉会計事務所・所長　小泉明
吉野石膏㈱・総務部長付　加部隆三
㈱中央塩ビ製作所・役員　星野貢
佐世保市交通局・企画係長　朝永清之
㈱新川組・常務取締役　湯通堂義弘
県立・岡山芳泉高校・教諭　三宅将之
県立・横浜翠嵐高校・教諭　国武忠彦
熊本市立・大江小学校・教諭　貴島武之
熊本県・教職員連盟　満崎安
㈱日商岩井・燃料第二部二課・課長代理　沢部寿孫
県立・横浜平沼高校・教諭　福田忠之
航空自衛隊・第四術科学校・防衛庁教官　村山寿彦
㈱講談社・広告局　磯貝保博
神奈川県・湯河原町立・吉浜小学校・教諭　岩越豊雄
九州大学・医学部・循環器内科・助手講師　友池仁暢
東急建設㈱・技師　奥冨修一
福岡県立・三池高校・教諭　志賀建一郎
福岡県立・直方高校・教諭　小野吉宣
福岡・吉田歯科医院　吉田哲太郎
神奈川県立・城山高校・教諭　原川猛雄
水崎法律事務所・弁護士　中島繁樹
海上自衛隊・護衛艦〝はるさめ〟副長兼砲雷長　太田文雄
戸田建設㈱・建築設計第一部・設計課　青山直幸
大成建設㈱・海外事業部・経理課　山口秀範
神奈川県・座間市立・座間小学校・教諭　松本洋治
熊本県立・松島商業高校・教諭　中園俊郎
県立・福岡農業高校・教諭　小林至
福岡県立・豊津高校・教諭　堀田真澄
福岡県立・若松高校・教諭　坂口秀俊

熊本市役所・衛生局清掃部・東部清掃工場　折田豊生
海上自衛隊・佐世保造修所付・熊本大学大学院研修中　鎹信弘
熊本県立・人吉高校・教諭　田之上正明
東京都・中野区立・北中野中学校・教諭　石井孝一
福岡市立・春吉中学校・教諭　西原正博
山口県立・南陽工業高校・教諭　宝辺矢太郎
㈱丸善石油化学・技師　島崎祐司
西南学院大学・聴講生　安部博之
鹿児島県・菱刈小学校・教諭　南田武法
県立・長崎北高校・教諭　宮崎重人
県立・宮崎盲学校・教諭　竹下鉄郎
鹿児島県・大成小学校・教諭　村田研史
県立・東岡山工業高校・非常勤講師　砂川芳毅
防衛施設庁・建設部土木課・技官　皿田宏
日本ユニバック㈱・マーケッティング本部　大町憲朗
九州大学・工学部・大学院生　山根清
大牟田市立・大牟田養護学校・教諭　小田正三
日本興業銀行・資金部　小柳志乃夫
鳥海信用金庫　須田清文
福岡大学法学部卒　黒岩真一
鹿児島市立・桜丘西小学校・教諭　内山なな子
福岡県立・小郡養護学校・教諭　林田景子
福岡市立・長丘小学校・教諭　平山尚美
福岡県・玄海町立・玄海小学校・教諭　前園由美子
福岡女子大学文学部卒　光山香奈子

合宿運営委員（助言者欄に前出）志賀建一郎　三宅将之　青山直幸
小野吉宣

指揮班（助言者欄に前出）田之上正明　吉田哲太郎　石井孝一　安部博之　南田武法　宮崎重人　村田研史
山根清

事務局（助言者欄に前出）磯貝保博　中園俊郎　中島繁樹
（本会職員）蘇原幸絵・黒岡実
（事務協力者）都立蒲田高校二年・松吉基光　人吉高校二年・板野一生　同・小林敏郎　同・那須龍治
松島商業高校三年・草積直子　同・黒川シゲミ

記録班　元最高裁判所秘書課員・速記業・西川伍朔

写真班　亜細亜大学職員・広報室・加藤幸雄

走り書きの〝感想文集〟（各班別に集録）

閉会間ぎはの三十分間で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらひました。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡がお分りいただけることと思ひます。

合宿三日目，参加者全員で霧島神宮を参拝する。

第一班—男子学生—

壇上の友の声を聞いて気づいた

（亜細亜大学　経　一年　高橋　康）

この五日間、自分の心の奥深く受けた感動のなんと多かったことでしょう。最後の全体感想発表の場で、一時間いっぱい、この感動を表わす言葉をさがしていました。しかし、どれをとっても自分の素直な言葉にならないと思いました。壇上の友の声を聞いていてしだいに自分の胸の熱くなるのをおぼえました。そして、気づいたのです。あれこれと格好のいい言葉を自分はさがしていたのではないかと。今、自分が壇上の友の声を聞き、正直に自分の心がゆれ、胸があつくなる自分が自分のすべて、五日間で学びとったすべてではないのだろうかと。

壇上のみ友の熱き言の葉に我が目頭の熱くなる覚ゆ

感動する心が甦った

（中央大学　法　四年　馬淵雅宣）

今、幼き頃味わった素直に感動する心が胸に甦り、我新生せりの感で一杯です。僕達のまわりは、一見平和そうに見え、学友も満足しているようですが、それが如何にいい加減で冷たく浅薄なものであったかを痛感しました。本当の平和とは、自ら立ち、経験し、学び、人の心を思いやる事によって得られる。それが、日本人としての生き方なんだという事を、先人の生き方を学ぶことによって改めて知らされました。小田村先生がおっしゃられた〝国を守るということを社会に出ている青年達の分まで真剣に考える事が、本当の学生生活である〟という御言葉を胸に抱き、残り少ない学生生活を精一杯生きたいと思います。

小田村先生の話をお聞きして

唐丸の籠にゆられて死に向かふ松陰の心澄みわたりたり
辞世をば笑みたたへつつ朗々と吟じたる師に囚人も泣くとふ
死を前にかくまで清く美しき姿見せたる人のありしか
三十歳てふ短かき生命燃やし尽し神さりましし魂悲しも

合宿を終へて

霧島にて学びし誠の言の葉を時すぎゆくも我忘れめや
縁ありて共に学びし班友を永久の友にと胸に誓ひぬ

相手の気持ちになることに欠けていた

（大阪経済法科大学　法　二年　陣内道也）

他の人の述べた意見や詠んだ和歌について、本当に相手の気持ちになって意見を言ってやるということが、自分には欠けていたとつくづく感じました。和歌相互批評の時に、僕の下手な和歌について、どの言葉が僕の心に一番ピッタリ合うか、色々と心配りして批評して下さった班長の姿に、僕も見習ってゆきたいと思いました。これからも、この合宿で学んだことを忘れずに、学園生活や自分の日頃の生活にがんばっ

てゆきたいと思います。

み友らは吾が詠みし歌の言の葉を心をこめて直してくれぬ

人の心をしのびゆくことの尊さ

（九州大学　経　四年　奈良崎修二）

今回の合宿ほど、人の心をしのびゆくことのたふとさを痛感した合宿はなかった。班の友と共に、自らの全身を傾けてその事を行っていったが故に実感されてきたものだと思ふ。人の言葉といふものは、かく迄もはげしく胸を打つものかと思った。そのゆれ動く心をもて、学びゆく道、吉田松陰の言ふ「動処に於て本心を認むる」道を、この友らと共に続けて行きたい。終はりにあたってその事を痛切に思ふ。

慰霊祭ののち、友らと懇談せし折

慰霊とふ心になれず過ぐせしと首かしげつゝ友は語れり

その友も他の班友の語れるをまなこを見つめて聞きをりにけり

様々に語りゆくうち己が胸に思ひあたることあるがに見ゆる

真の友達とは何かを知った

（福岡教育大学　小学校国語　一年　土屋健一）

今まで大学で友達が出来ずに悩んでいた。しかし、求めてきた友達とは遊び友達にすぎなかった。だが、「真の友達とは、腹を割ってとことん話し、お互いをぶっつけながら高め合うものだ」ということを学んだ時、今までの自分が見えてきた。なんと上面だけの友達を多く持ったことであろう。また、今まで偉ぶったひま人の言葉の遊びだと思っていた輪読

カメラ・レポート　1

合宿教室の開催にそなへて、30余名の学生が3日前から事前の研鑽と準備にあたった。これは講義の演題を書いてゐるところ。

を初めてやって気付いたことは「本物の読書」ということである。普通だと、あっという間に読み飛ばす三行の文章を一時間もかけて読んだ。今まで、読書をしても何も残らなかったが、輪読をやってみて、本当の読書の素晴しさがわかった。

松陰の死に様聞きたる班友の時雨の音にも耳を貸さざり

緊張の連続であった

（九州大学　経　一年　井上総一郎）

この五日間、本当に緊張の連続でしたが、快い疲労に包まれています。全国の学生が一堂に会し、これほど一生懸命に語り、悩み、苦しむ姿に胸を打たれました。自分の内にある価値観とある面では共感し、また、衝突し、火花が飛ぶ、そんな五日間でした。今、静かに思い返してみると、自分の無知をあらためて実感し、この合宿を出発点として勉強して行きたいと思っています。国文研の先生方、事務局などの裏方の方々、本当に御世話になりました。ありがとうございました。

この地にて共に語りし友がきよ手を取り合ひていざ立ち行かん

第二班—男子学生—

素直になる事の大切さを知る

（亜細亜大学　法　二年　谷萩香織）

この合宿に参加して、はたして自分の思っている事、考えている事を、どれだけ友に訴える事が出来るかということが一番気になりました。初日、二日と名指しされなければ発言しない自分に腹立ちを感じました。三日目に入り、反省をもとにして、自分で進んで発表出来た様に思います。まず第一に感じた事は、短歌全体批評及び班別批評に於いて、相手の気持ちを察してやる事の大切さということです。この事は討論や輪読にも言える事だと思います。又、自分の考えを発表する場合に共通して言える事は、素直に自分が表現出来ないという事なのです。しかし、この機会に素直になる事の大切さ、又、言葉を発する事によって自分の発言した内容を自覚する事の意義を見いだした様に思うのです。輪読に際しては、御製に数多く触れたわけですが、天皇が我々と同じ立場で、しかも我々の事を心痛む思いでお受けとめになられて御歌を詠まれた事に、体が震えるのをおぼえました。この合宿における〝めぐり逢い〟と言うものを大切にして行きたいと思います。〝全国から集まった友〟とこの場だけでなく、何らかの形で、これからもつき合って行きたいと思います。

おやすみとつぶやく友の寝顔見れば一日のつかれいやさるるかな
獅子吼する師の御姿に古の人の生き様まざまざと見ゆ

積極性の無さを痛切に感じる

（中村学園大学　家政　一年　井上　勇）

何もかもすべて初めての体験でした。それ故に好奇心も多くて自分ではやる気があるつもりでした。しかしながら最終日に涙ながらに発表された人達を見ると、自分に積極性が無かった事を痛切に感じさせられました。自分達が知らない偉人の真の姿を知ることができ、全国の同世代の人達との出逢いという忘れがたきものを得ることができ、心から感謝いたしております。

己が身の至らぬところを心こめて指摘したまふ友ありがたし

人にわかってもらうことの難しさを感じた

（早稲田大学　理工　一年　五木田茂也）

五日間という短い期間ではあったが、この期間中に班友との輪読や討論及び諸先生方の熱のこもった講義によって実にさまざまな事を身に付けたと思う。心に思った事を素直に口に出し他人にわかってもらうことがいかに難しいことかを感ずることができた。実は、合宿に参加する前は、不安感で一杯であり、はっきり言って嫌であった。しかし、合宿を終えた今、参加したことが実に自分にプラスになったことを感じ、足どり軽く霧島から帰ることができることに感謝したい

近くの高校からお借りした椅子が講義室に運び込まれた。各地から友らが集ふ時も間近に迫った。

と思う。

霧島で共に語りし友どちと別るる時のつひに来たれり

わかってくれる先輩を得た

（西南学院大学　文　一年　重　博巳）

とうとう最後の時間となった。小田村先生の「畏敬のこころ」に就いて、班友の谷萩兄が感想を述べられる姿は、とてもすがすがしく印象に残っている。公門兄の体一杯にあふれる嬉しそうな表情、僕に対しての気遣いは印象深い。三日目の深夜、「僕もかべにぶち当ってどうしようもない時があって、とにかく先輩に悩みをぶちまけた。僕はその信和会の合宿がきっかけで脱け出す事ができた。悩みがあったら話して下さい。」と公門兄は私に言ってくれた。ふうっと気が楽になるような気持で兄を見ると、真剣な表情で向かっておられ、兄ならわかってくれると自信を取り戻す事ができ、心強く思った。

深夜まで心開けず苦しむ我をはげましたまふ友ありがたし

己に忠実に生きてゆきたい

（九州大学　工　二年　公門泰博）

思えば半年前、僕は大きな壁にぶちあたり、もがき苦しんでおりました。高校、大学とすんなり進んで行った僕にとって、初めてぶつかった大きな難問でした。全く個人的な問題であり、それまでの友達に話しても本質的な解決にはなりませんでした。それで毎日毎日日記帳に黒々と苦しみを書きつける事が続くのです。そういうある日、九州大学の信和会の新歓合宿にフラリと参加しました。これが僕の大きなターニングポイントとなりました。苦しい日々での一人旅で偶然出逢った〝吉田松陰〟、これがその合宿のテキストだったのです。その新鮮な言葉に触れ、信和会の先輩達に親しく触れることができ、当時の僕の心のモヤモヤをすべて話す事ができました。それ以来、吉田松陰は僕の心にかすかながら生き続け、この度の合宿においてその姿がさらに活き活きと僕の心に宿ったような気がします。吉田松陰のほかにも様々な啓発を受けました。いわば種を植え込まれたような感じで、今後大事に育てたいと思います。当時僕が悩んでいた事は、新鮮な気持で大学に入り、あれをやろう、これもやろうと頭でつくった計画があったのですが、それがことごとくくずれさったことなのです。観念的な人生態度こそが、僕の〝ガン〟でした。今後、自分の目で見、物を考え、己に忠実に生きて行こうと思います。

晴れわたる大空のもと寝食を共にせし友と別れゆくなり

合宿で学んだ事をしっかりと心に銘記したい

（鹿児島大学　教　二年　上原敏彦）

小田村先生の御講義の中で「あなたたちと同年代でも社会に出て働いている人がいる。大学へきている若者は、真剣に、人生、学問、国の事、社会の事を考えないでいいのか。」

「二十代前半に自分が何を考え、何をしたかは、三十、四十になっても変わらない。」とおっしゃられた。実際大学では、真剣に物事を考える真摯な学生は少ない。だからといって自分もそうでいいかと思うと納得いかない。吉田松陰の言葉に「境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し」とある様に、平和な世の中に、人生、学問について身にしみて切実な思いを抱くことは困難な事かもしれない。班別討論の折、友がかみしめるように言葉を吐いた時は、非常に嬉しく感じた。友と自分とが更に近づいたように感じた。この合宿で学んだ事は、ただ感動に終わらせる事なくしっかりと心に銘記してゆきたいと思う。

小田村先生の御講義を聞きし折
先生の気魄のこもる御言葉に戒めらるる思ひわきくも

心を開いて語れたのは天皇に対する信頼による

（福岡大学　経　三年　大山輝昭）

合宿期間中「群臣信無きときは、萬事悉く敗る」といふ十七条憲法の中の言葉がいつも頭にあった。班長として、何も皆にしてやれなかった。ただ人の心の奥底には、力の湧き出る源泉、国を思ひ天皇を慕ひ、信じてゐるといふ疑ふことのできない事実があることに気付いてもらへたと思ふ。また僕が心を開いて語れたのは、正に天皇といふ方への信頼によると思った。人が、信じ大切に思ってゐることを語るとき、その言葉は緊張し、生き〳〵としてくる。先生方の御言葉が皆

カメラ・レポート　3

ぞくぞくと合宿教室参加者が到着してきた。不安と期待の入り混った表情で自分の班を確認する。

さうであったと思ふ。

書読みて思ひしことどもしたためて送り給へや帰りし後にも

第三班—男子学生—

「耳に善く聴く」といふこと

（亜細亜大学　法　四年　大塩耕三）

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』にある太子の「耳に善く聴く」といふ言葉が、僕の心に響いてきました。それまでいい言葉だなあとは感じてゐましたが、実感できずにゐました。しかし、三日目の夜、「自分の思ってゐることは沢山あるが、皆の前で話すことができなくて、今苦しいのだ」と友が語ってくれ、別の友がそれぞれに自分の苦しいときの体験や、共に合宿をして心に思ってゐることを友の気持にせまりながら語ってくれました。苦しい気持に少しでもこたへてゆかうとする友らの姿を見たとき、耳に善く聴くといふことは、ただ相手の話を聞くことではなくて、友が苦しんでゐたら、その友の心の中に自分がとびこんでゆき、共に苦しむといふ心をもつということではないかと思ひました。

僕自身も今までは友の話を聞くには聞いてゐましたが、友の心の中に入って本当に苦しみを分ち合はうといふ気持はもってゐなかったなあと反省させられました。お互ひに真剣につきあってゆかうと思ってゐるのなら、友の苦しみを自分の苦しみとして共に苦しんでやらなければ、真のつきあひはできないのではないかと、今回の合宿では感じました。

胸ぬちの苦しき思ひを友みなに語るを見るはうれしかりけり
一人して苦しみぬきし友どもに心合はせて語りゆきたり
討論のすすみゆくうちだんだんと友の面（おもは）に明るさの見ゆ
時たつも忘るるごとく友はなほ苦しき思ひを語りゆきたり
はなれても心をかよはせつき合はうてふ友の心のうれしかりけり

大学生は何をすべきか

（熊本工業大学　工　二年　颯々野幸二）

小田村先生は御講義のなかで、大学生はいったい何をすべきかといふ問を提出された。就職した友達が一所懸命働いてゐるとき、大学生である私がどう生きるべきか、本当に考へてゆかねばならないと思ひました。今まで自分の事ばかり考へてゐて、友達の事を思ってゐたつもりでも、さほど考へてゐなかった私がとても小さく見えてきました。一度だけの人生を雄々しく生きてゆきたいものだと思へてなりません。

小野先輩の発表を聞きて
「有馬君も」と声つまらせて語らるる先輩見れば涙出で来も

人の心を察し得る尊さに心ふるえた

（高崎経済大学　経　三年　清野幸三）

講義を聞き討論をするうちに、この合宿に参加するまでの事々が遠いことのように思われてきました。そして、合宿に参加できなかった友人も、来年の合宿では、このうれしさが

自然にこみあげてくるような友を持つことのすばらしさを感じてほしいと思います。

人の心を察し得ることの尊さに心がふるえました。この心の確かさを、班友とこれからも手を取りあってゆくこと、先人の書を読むこと、実地にためすことで、ものにしてゆきたい、その妙を知りたい、胸いっぱいのここちを味わってゆきたいと思います。

思ひたることをのべえぬ友どもに声をかけえぬ吾身の口惜し

みんなの心が一体になった

（熊本大学　医　四年　坂口　守）

本当に緊張した五日間でした。こんなに緊張した日々を過ごした経験のなかった僕にとって強烈な印象となりました。

班別討論で、苦しむ友を見て何もしてやれなかったとき、班長が、「君たちは友達づきあいをやっているような顔をしていながら、この苦しむ友を見て何も言ってやれない。『耳に善く聴く』ことが大事なことだと言っておきながら、何も聴いていないではないか、そんなことでは友だちとは言えない」と指摘され、僕はそれまで言ってきた言葉がすべて空虚になるのを覚えた。涙が出るほど悲しかった。謙虚に反省し、その苦しむ友に言葉をかけた。他の班友たちも同じ思いにかられたようであった。

このとき僕は、「ああ、今こそみんなの心は一体となったのだ」と感じた。同時に、「本当にいい友だちと知り合えた」

受付で合宿教室参加許可証を確認後、講義資料・名簿などの入った封筒と名札をもらって各自の班室へと向った。

と感じた。これが今回の合宿における最大の収穫であったと思う。

友どちの苦しむこころ切々と伝はりて来ぬ吾の心にも

日本の国民の心にふれてゆきたい

（高千穂商科大学　商　三年　中田太七）

大学へ入って三年間、自分は糸の切れた凧のように空中に浮いていた状態でした。今度、高木尚一先生の紹介でこの合宿に参加し、たかが四泊五日で何を得ることができるかと初めは疑いをもっていましたが、この三班で友情の何たるかがわかりました。そして、本当の学問に対する態度も何とはなしに見えてまいりました。班長の大塩さんや、班員の皆さんの意見を聞いていると、自分の勉強の不足や、心づかいのたりなさがひしひしと感じられました。あまりにもさめてしまった自分の心に気づいたときは愕然とし、全体意見発表で班友の照屋君の涙を見て、すまないと思う気持ちで、いてもたってもいられず、自分も壇に上がってしまいました。

これからは、できるだけこのような会に参加して、自分の気づいていない日本の国民の心にふれさせていただきたいと思います。東京での会合にも参加してゆきたいと思います。

また、高校時代の友だちにも自分が味わった感動を少しでも知らせてやろうと思います。

岩風呂に友とつかりて語りゆくはや合宿も残り一夜と

友との交流を深めてゆきたい

（島根大学　文理　三年　和田正人）

班の友と語り合うなかで、教えられることが多く、自分の足らなさを気づかされた。苦しいと言っている班友の心を感じきれていなかったことに気づかせてくれたのは班長であり、班の友であった。自分の心の姿勢が正されるのがありがたかった。友を求めようとしている姿に胸打たれ、自分もがんばらねばと思ったが、その苦しんでいる友に言葉をかけることもできず、班長に指摘されるまで気づかなかったのだ。友あればこそである。「友だちっていいなあ」というのが実感であり、この班の友とめぐり会えてよかったと思う。このすばらしい友との交流を今後深めてゆきたい。

友どちと心通はせ語りゆけば心の姿勢の正さるるなり

貴重な体験だった

（九州大学　工　一年　甲斐郁人）

本当に苦しかった。自分の思うことを全然言うことができなかったのです。胸の中で何かもやもやとするものがある。しかし言葉に表すことができないのです。小林秀雄氏は、思うことを言葉で表現できないような感動は感動ではないと言われているが、では僕は何も感じていなかったのでは……。

しかし、断じてそのようなことはない。確かに何か感ずるところがあったし、自分の思いを表現することができるはず

である。本当に相手を思う心、物を見つめることのできる心を養ってゆきたい。短歌はそういった心をつちかってゆくのに最もすばらしいものだと感じました。折にふれて短歌を詠むことを続けてゆきたい。

この合宿で本当にいい友達を得、また、胸の高鳴る感動を得てうれしいです。先輩方の本当に相手を思って話されること、相手の身になって真剣に考えられていることに、ちょっと大げさかもしれませんが、人生はじまっていらいの妙な感動をうけました。何らかの形で先輩方と連絡をとりながら、つきあいを続けたいと思っております。自己修練となった合宿で、本当に貴重な体験をさせていただいたと思っています。来年も是非この合宿に参加させていただきたいと思います。

合宿にてめぐり逢ひたる友どちを我は決して忘れじと思ふ

良き師、良き友を得た

（八幡大学　法経　四年　照屋唯善）

大学で良き後輩にめぐりあい、ただ理屈だけで物事を処理する自分がはづかしくなり、理屈だけでは自分が成長しないことに気づき、行動で示そうと努力したのですが、結局、失敗に終ってしまいました。友だちと協力しなければ駄目だと思い、真の友人とは何だろうと語り合っているときに、九州大学の一人の学生に、合宿教室に参加してみないかとさそわれました。合宿の内容を聞くと、右翼団体の養成手段かと思

開会式―九州大学経済学部四年の奈良崎修二君は、参加学生を代表して、合宿教室に臨む気持ちを力強く述べた。

いましたが、「まったく右翼とか左翼などと関係ない」というその学生を信じて、この合宿に参加しました。

四泊五日、班の友達と心を開いて語り合った結果、国文研及び班長は何を言わんとしているか、自分なりに共感するものがあり、合宿に勧誘してくれた学生を信じて、本当に良かったと思います。良き師、良き友を得ることができ、国文研のみなさんに感謝します。

どしどしと我が背を洗ふ友どちの強き力の忘れがたしも

第四・第六合併班

―男子学生―（合宿二日目より、構成員の都合上、両班は合併しました）

自分に〝ワク〟を作っていた

（東海大学　政経　二年　須崎　進）

僕は今回で、合宿参加二回目ですが、こんなに感動したことはありませんでした。私は初め、他の人とうちとけることができるかと不安でしたが、その心配の必要はありませんでした。友人は、黙っている僕にも積極的に話しかけてくれました。特に、同じ班の里城君の誰とでもうちとけて話をする姿に接し、私は初めから、〝ワク〟を作って友人と接していたことに気づかされました。また、小田村先生は、「学生は、社会に出ている青年の分まで、国を守ることについて考えなければならない」と言われましたが、私も大学で、単なる単位を取るだけに終ってはいけないと痛感しました。

知らず知らず居眠りし我の肩をたたきおこしてくれし友ありがたし

友の注意がありがたかった

（中村学園大学　家政　一年　平田　繁）

初めて合宿に参加したのですが、初日あたりは、来ない方が良かったと思いました。しかし、班の友に「意見を言わないと合宿に来た意味がない、時間の無駄だ」と言われ、自分なりに頑張り、少ないながら意見を出すように努めました。五日間を終えようとしている今、この友の注意がありがたく、忘れることができません。また、班の友と、大学の格差を感じないで付き合うことができてうれしかった。

友どちの言葉に耳を傾ければしらずに我は胸たかなりぬ

素直な言葉に打たれた

（福岡大学　法　三年　源嶋秀治）

全体意見発表の時、話したことのない人の感想を聞いてゐて涙が止まらず、仕様がなかった。人の素直な言葉は必ず、人の心を打つと感じた。さういふ人の素直な心を大切に心に留めることから真の学問が始まる様な気がする。

合宿に勧誘せし友の壇上で感想を述ぶる
とつとつと話し給ひし友どちの面輪を見れば涙こみあぐ
すなほなる心をもちて物事に当りゆくてふ御言葉嬉しも
大学に帰りてのちもこの友と共に学びてゆかむとぞ思ふ

本当の友との付き合ひを求めて

（高崎経済大学　経　二年　里城雅文）

私はこの合宿に、本当の友だち付き合ひを今一度学び直し、実践したいと思って参りました。初めのうち、討論や輪読の場で、ほとんど何も発言してくれない友がをり、「何とか元気を出して発言して欲しいものだ」と思ってをりました。そのうち、直接話したり、詠んだ歌をよませてもらふうちに、学友がどんなに辛い思ひをしてゐるかを知りました。友達のことを思ひやって付き合って来たつもりが、まだまだ足りないことを知りました。合宿最終日、最後の懇談で、皆が皆、「本当に参加して良かった。大学に帰ってからも勉強を続けたい」と言ふのを聞くうち、これからもこの友だちと付き合って行きたいと思ふ気持ちが、益々強くなりました。合宿は素晴らしかった。しかし、本当に大切なのは山を降りてからの生活だと思ひます。大学の友人たちと、また、ここで知り合った友だちと本当の友だち付き合ひを続けて行きたいと思っています。

班のためその身も心もくだきしかただぐつすりと班長は休みぬ

「こころ」というものに気付いた

（九州大学　法　一年　先田督裕）

知識を積めば、それなりの意見が言える。しかし「力」がない。意見に「力」がない。このことは、合宿を一貫して感

開会式終了後、指揮班長である熊本県立人吉高校教諭・田之上正明氏から合宿生活に対する諸注意がなされた。

じられたことだ。イデオロギーではない。生の人間が問題なのだ。生の人間には「こころ」がある。「こころ」は人間を揺り動かすものだ。知識では説明のつかぬ感動を起こさせるものだ。そんな得体の知れぬ「こころ」というものに、改めて気付き、それについて追求してみたくなった。

今まさに部屋出でんとす班員のまなこ見やれば涙浮かべり

講義に心が奮い立つ

（福岡教育大学　教　二年　那須三元）

山田先生の合宿導入講義を、僕はちゃうど一番前の席で聞くことができた。マイクを両手で握りしめられ、一語々々かみしめるやうに話してゆかれる先生の御姿を拝見してゐると、目頭が熱くなって来た。「先の戦争で亡くなられた先輩や友人の魂を慰めるのが生きる力であった。」といふ言葉で始まった先生のお話は、人間の死といふ荘厳な事実に素直に感動できなければ、本当に人間を尊重する事は出来ないといふ事をとくと考へて欲しいと、繰返へし〳〵訴へてをられるやうで、先生の御人柄が偲ばれ、心が奮ひ立たされた。

降り続きし雨もあがりて見はるかすふもとの稲田の緑しるけし

自分が少し変わった

（福岡教育大学　教　一年　是松博視）

私は正直言って、この合宿に来るのに気が進みませんでした。合宿三日目の夜、班員の一人にもっと自分が感じたことを積極的に述べろと言われ、とても恥かしく、悔しくも感じられました。しかし、四日目の班別討論などでは、ある程度積極的に思ひを述べることができたのではないかと思い、なんとも言えない充実感に浸ることができました。初めは、合宿に誘って下さった先輩を恨みましたが、合宿を終えて、なにか自分が少し変わったように思われ、うれしい気持ちでいっぱいです。本当に参加して良かったと思っています。

友どもと共に思ひをかたらひて今は心のはれわたりたり

人の誠心を信ずること

（専修大学　経　三年　細川悌弘）

今回初めて参加しました。そして、自分が最も感じた事は、人の誠心を信ずる事は、素晴らしいことだということでした。吉田松陰は、誠を尽せば動かざるものはなしと言われましたが、自分も今後、この言葉を自分のものとするべく生きてゆきたいと思います。また、できるだけ日々、和歌を作り、自分の心を見つめてゆきたいと思います。本当に、参加して得る所の多い合宿でした。

とつとつと思ひを述べし友どもの心思へば胸打ちふるふ

第五班—男子学生—

人の心を偲ぶことの大切さを知る

（高千穂商科大学　商　三年　小神野洋一）

班別討論は、最初なごめない所もありましたが、人の心を偲ぶということをテーマにして、お互いの心を知ることのむつかしさを話し合ううちに、班友となごみ合うようになりました。

自分のいたらなさを感じさせられた班別討論でしたが、これからは人の心を偲ぶことを大切に、友とのつき合いをしたいと思います。

窓の外ゆさす月影に照らされて友の寝顔の美しく見ゆ

自分が一回り成長したような気がする

（法政大学　文　一年　町山和也）

初めのころは、帰りたいと何度か思いました。でも、最後まで合宿に参加して、自分自身一回りぐらい成長したような気がします。

又吉田松陰という人に興味を持ちました。家に帰って、松陰先生のことを調べたいと思います。文学にあまり関心がなかった僕が、興味を持ち始めたということは、それだけ成長したんだなと思います。

合宿で初めて知りし友達と別れををしむ時は来れり

カメラ・レポート　7

合宿運営委員長の福岡県立三池高校教諭・志賀建一郎氏は、「自分の心を燃やすものをつかんで下さい」と、合宿全参加者に訴えた。

十年の知己のように思われた

（亜細亜大学　法　一年　大木　隆）

昔の学生は激烈な討論を毎日のようにしたとよく聞きますが、これこそ本当の勉強であるとあこがれていました。そんな折、知人からこの合宿をすすめられました。全国から集まる学生にまじって自分の意見を言えるかという不安と、よし、やるという期待とが入りまじって複雑な気持ちでした。毎日のスケジュールは、とてもきついものでしたが、ぼくのあこがれていた討論そのものでした。討論をしていくうちに班員たちが互いにとけ合い、もう十年以上も付きあっている友人のように感じました。それと言うのも、先生方の熱烈な御講義や、先人の文章を何度も班員たちと、心から読んだたまものだと思います。ぼくは、ただ単に、討論の場所と思っていたのに、人間として最高の喜びである友情が芽ばえ始めたことに驚嘆するとともに、本当に期待していた以上の充実感をしみじみ感じています。

友どちと心かよひて来年も再び会はんと誓ひあひたり

本当の仲間でありたい

（大阪市立大学　理　四年　氏原秀起）

「つい今しがたまですぐ傍にいた戦友が、ふと見ると撃たれて倒れている。その時はもう〝撃った敵を八つ裂きにしてやりたい〟という気持ちでしたよ。」もの静かな星野先輩が急に語気を強めて語られた。合宿三日目の輪読の時だった。瞬時に友を失われた先輩の、もう悲しみでも怒りでもない、もっと奥深い、もっと激しいお気持ちに胸がきゅっと締めつけられるようだった。この時から班の皆が少しずつ胸の内を語ってくれるようになり、僕も皆に近づくことができたように思う。班の皆に対して、星野先輩のような気持ちでいられるような仲間でありたい。

班友と月仰ぎつつ声あはせうたひゆきけり学びし御歌を

友のこまやかな心にふれられうれしかった

（九州大学　工　二年　松井哲也）

各地の大学からくる友と、はたして互ひに心を開いて、語り合ふことができるのだらうかと不安であった。しかし、元気のでない友がその苦しい思ひを皆に話してくれ、班友がその友の苦しい思ひを真剣に考へたり、合宿にいまひとつ打ちこめなかった友が、先人の心を偲び、友の心を知らうとしだしてきた姿に、僕の心の底にあった不安はふきとんだ。日本人の持つ、こまやかなかつ雄々しい心にふれた様に思へ、うれしかった。

閉ざされしみ友のこころ松陰の姿にふれて開かれにけり

松陰の本読みたしと言ひたまふ友の言の葉のうれしかりけり

相手の心を偲ぶことを大切にしたい

（九州共立大学　経　三年　宮里一史）

先生の御講義の中の「観念的に考えるのではなく、相手の心を偲ぶのだ」という御言葉に「よし」と思い、諸先生の御講義の内容や先人の御言葉をできる限り心にきざむようにしたら、おのずから自分の考えや感想がわいてきて、本当に一瞬一瞬を大切に過すことができたように思います。これからも「相手の心を偲ぶ」という心がけを大切にしてゆきたいと思います。

五日間共に過ごせしみ友らと別れつぐればさびしさおぼゆ

第七班—男子学生—

吉田松陰が好きになった

（熊本大学　教　一年　仁木義邦）

僕は吉田松陰が好きになりました。合宿中いろんな事を経験しましたが、人を好きになるという自然と出てくる感情には我ながら嬉しく思います。講義の時の感動はもう言うことができないほどでした。初日からの記憶は決して連続しているとは言えません。それでも僕のこれからの生き方を決める尊い言葉が感動した瞬間に僕のものになったと言えます。

「あの合宿はすばらしかった」という莫然とした気持ちの

カメラ・レポート　8

合宿教室導入講義は、福岡教育大学教授・山田輝彦先生の「明治の精神—現代精神蘇生のために—」と題するお話であった。

み残って後に何も無いなどという悲しいことにはしたくありません。今日家に帰ってから早途「講孟余話」を読みたいと思います。人を好きになったことが、その人のことをさらに深く知りたいという気持に駆りたてられることが初めて分かりました。

善く聞かば友の気持ちが伝はりぬ今こそ学ぶ始めと思はめ
心から発する言葉を聞かずしていかなる言葉を聞かんとせんか
理屈のみで考へたがる我が性分直して行かねばならんと思ふ

時代を超えた青年の真実の魂

（九州大学　医　三年　長澤一成）

四日目の班別討論の折、明治天皇御製を皆とともに一首一首味はひつつ拝誦して行った折、次の歌に心が震へるやうな感動を覚えた。

樹間花
こずゑのみ人に知られて桜花木がくれながら散りや果つらむ

凱旋の時
外國にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらむ

日露戦争の華やかな凱旋の陰には、勇敢に戦ひに出で立ち、しかも生きて祖国の地を二度と踏めなかった多くの人々がゐた。誰もが生還と勝利を祝ひ、提燈行列にその喜びを託してゐた時、祖国の為に命を捧げた人々の家族、恋人、友人らが日本のいづこかで、語りつくすべくもない悲しみにうちひしがれてゐたことだらう。明治天皇はこの喜ばしい凱旋の時、何よりも先に再び帰ってくる事の出来なかった人々の上を思はれた。そして、それのみならず、それらの人々の魂が、たとへ屍は外国にさらされてはゐても、その戦友の心に生きて必ずや今、故国日本に帰って来てをられるとお信じになった。「たまもみやこにけふかへるらむ」といふ静かな調べは明治天皇の深い悲しみを私の心に伝へてくる。

若くして戦ひに斃れた無名の人々の大多数は、生きてゐた跡すら後世に留めてはをらぬが、しかし、その人々も私達がこの合宿で最も美しいと感じた先人の行為―命ささげるといふ行為―に、何とか近づき連なってゆきたいと願ってゐたに違ひない。それを願ふのが時代を超えた青年の真実の魂だと思ふ。

別れ
輪になりて書読むことをゆくさきもつづけゆきますと友の語りぬ
あまたなる書買ひ入れて今からはこの書読まむと語る友あり
手を握り笑みて別れを告ぐ友の面かがやきてすがすがしけり
来る年もこの集ひにはかならずや出てまゐりますと別れゆくなり
ともどもに語りし友を偲びやりぬあかねさしたる雲ながめつつ

もっと敬虔な心をもたねばならない

（名城大学　理工　四年　浜田好徳）

私がこの合宿教室の中で最も痛感したことは、言葉の重さと大切さです。私がこれまで語ってきた言葉は、いかに概念的なものであり、概括的なものであったか、その事を最も反省させられました。日頃より、他人に対しては「日本人とし

て生きよう」とか「まごころを大切にせよ」等と語っていましたが、実は私自身、言葉で表しにくい〝思い〟とか〝情感〟を一まとめにして語ってきたのだと気づかされました。昨日小田村先生が「畏敬するこころをもたざるは日本人にあらず」とお話しになられました。私がこれまでに「日本について」「先人について」語ってきたことは、やはり概念的なものであり、とても浅はかなものであったということを気づかされた時、私は、もっと敬虔な心をもたねばならないと思いました。そしてそれは、一つ一つの言葉に、いかに思いを込めるかということであるような気がします。

小田村先生の御講義をききて
かしこみてうやまふ心もちゆけと小田村先生は訴へ給ひぬ
のどからし汗かかれつつ訴へ給ふ師の御姿のただありがたし

自分は何を考えているのかをつきつめたい

（亜細亜大学　経営　一年　横山吉光）

この合宿で何かつかもうという気持ちはありましたが、自発的に参加したわけではなく強い意欲はありませんでしたので、最初はとてもつらいものでした。けれども班友と心を開いて話し合ったり、講師の方々の話を聞いているうちに、何か心の中にわきあがってくるものがあるようになりました。そうなってくると、あっという間に五日間が過ぎてしまった。私は大学での輪読会に疑問を持っていましたが、この合宿に参加して疑問のいくつかがとりさられました。合宿で色

長旅の疲れも忘れて、班別討論に取り組む男子学生。

々な事を学びましたが、自分が一番先にしなければならないことは、もっと勉強して、もっと自分に問いかけて、自分は今本当に何を考えているのか、それをつきつめることだと思います。

全体感想自由発表にて
壇上で涙ながらに話さるる先輩の顔に雄々しさの見ゆ

生きた学問の存在を証明していきたい

（九州大学　法　二年　後藤和孝）

私は、この合宿に参加し、友の心を思いやることのむつかしさと喜びを感じました。物事を初めから概念で規定してしまっては、その真実の姿は見えてこない。心を空しくして率直に、あるがままにながめ、一つ一つの言葉に託された思いをくみとろうとする努力が本当に大切だと感じました。私は、大学へ帰ってからは、自分の学問を試すべく、友と語り合い、教授と議論をかわしていきたいと思います。人の心を無視する学問に対し、我々の生きた学問の存在を証明してゆきたいと思います。私達の学問を否定する人々に対しては、声を大にしてその非を訴えるべきだと思います。そうする中から、より一層自分の内面を凝視していくことができるのではないかと思います。松陰先生の「動処に於て本心を認むる、更に善し。」とはそういうことではないでしょうか。

前園さんの発表をききて
語らるるひとつひとつの言の葉にまごころこもりてあたたかきかな
次々にまごころこめて語らるる先輩の姿ありがたきかな

事務局のドアを見て
合宿をうらでささへし人々のことを思へば胸あつくなる
長内先生の話の折に
青年は「くやし」のおもひが大切と力をこめて語り給ひぬ

小田村先生の御言葉に胸底をつきあげられる思ひがした

（高千穂商科大学　商　二年　渡辺卓志）

合宿第四日目の小田村先生の御講義の中に次のやうなお言葉がありました。それは「君たちは、現在自分の大学で本当の学問といふものを求めてゐるか、君たちは今大学といふ学びの場に於て本当に人生を、学問を、考へようとしてゐるか、もっと考へるといふことを、そして自分の国のことを考へる必要があるのではないか。各々が自分を鍛へるといふ場をつくっていかなければならない。」といふ非常に厳しい御言葉でした。この御言葉を聞いた時、何か胸底をつきあげられる思ひがしました。本当にその通りで、僕たちは大切なものを見失ってゐると思ひました。自分の中に燃ゆる思ひがわき上がってくるのを感じ、先生の御講義の中にあった吉田松陰の生きざまに感銘しました。

小田村先生の御講義をお聞きして
自分から心きたへし場をもてと強い御言葉胸をつき刺す
君たちと同年代の友の中に既に働きたる者ありといはれり
君たちは学ぶ者なり国の命考へたまへと厳しくいはれり
御言葉に我が身ふるへておのづから熱き思ひのわきあがるかな

善く聞き、考えることのむづかしさを知った

（福岡大学　商　四年　山鹿耕平）

私は、以前より西郷南洲を尊敬していたのであるが、それはただ単に南洲の偉業や、人格の漠然とした貴さというものであった。ところが、先人の心にふれ、善く聞き、善く考えるということの貴さ、むづかしさを知り、南洲の偉さが分った気がした。私は、西郷南洲という人物に尊敬とともに、例えようのない親しみを感じるようになった。

つきあぐる思ひをしぼり出すやうに師は我々に語りたまひぬ

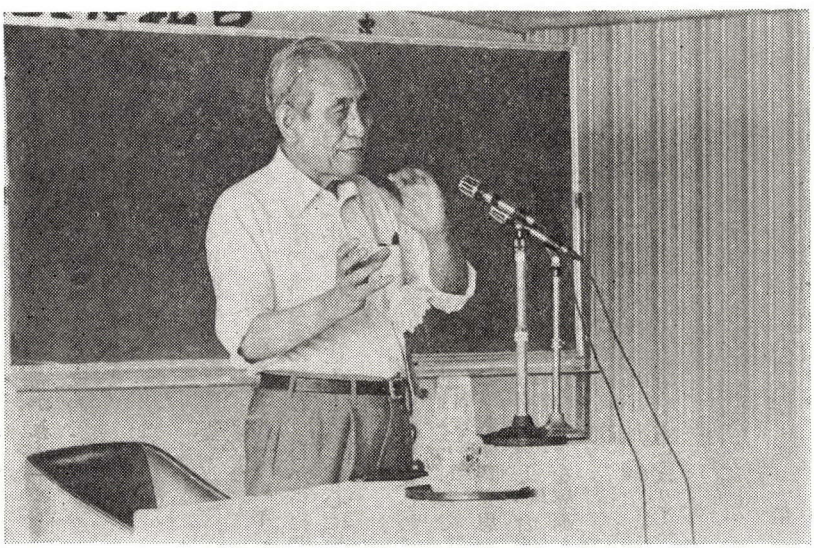
第八班—男子学生—

すがすがしい気持で帰途につける

（皇学館大学　文　一年　小柴良介）

この合宿で得たものはたくさんありました。たとえば、短歌を詠むということ、心をひらいて友と語るということ、日本のことを考えるということ、友人をだいじにし本当の意味での友情のある友と接すること等々です。この中でも一番得たもので大きいのは、心をひらいて話し合ってできた友人です。ぼくはこの友人たちを大事にしていきたいと思います。

大学へ帰ったとき、クラブや友人たちに、ここの合宿での



第2日目は、連続20回御出講であられる木内信胤先生の「これからの世界のなかの日本—近刊『新しい健康な経済学』に触れながら」と題した御講義で始まった。80歳といふ御高齢を全く感じさせない迫力で日本の将来の姿を描いてゆかれた。

御講義や班別討論、輪読を通じて得た自分自身の素直な気持、自分たちが心を開いて語りあったことをぶつけてみたいと思います。

ぼくは、この合宿を終え、とてもすがすがしい気持で、故郷への帰途につける。

友どちに名残りおしさのそのあまり気ばかりあせり言の葉いでず

心が混乱してしまったが素直に考えてみたい

（福岡大学　法　三年　久米奈津雄）

自分の信念をつらぬくこともだいじなことだと思いますが、自分の考えが熟していないのに、その考えを人におしつけることをしたり、自分の意見が反対されることをおそれて何もいわなかったりしたのでは、こころをかよわすことができず寂しいことだと思うし、自分の考え方も進歩もしないと思いました。

しかし、今の僕の心は非常に混乱しており、この合宿の考え方に賛成できないところが多くあります。すなおな気持で考えてみたいと思います。

かたくななわれにむかひて夜ふけまでかたりたまへる友ありがたし

みんなが和歌を批評してくれたことがうれしかった

（長崎大学　教　一年　植松伸之）

和歌の班別批評で、みんなが僕の駄作を、あゝでもない、こうでもないと一所懸命批評してくれて、ほんとうにうれしかったです。以前「和歌で感性が磨かれる」と大学の先輩に言われたことがどうも納得できませんでしたが、ここに来て何となくわかったような気がします。

大人（うし）の書に心打たれて合宿に初めて来しと先輩（とも）は語りぬ

心をふるわせる感動をした

（亜細亜大学　経営　一年　畠山正明）

班別輪読で聖徳太子の御言葉に触れ、自からに問ふて己れを知り、自己を常に爽快にして他人と接し、心に触れるといふことの大切さを感じました。

また、心をふるわせる感動も何度もありました。特に前園先輩の御話をお聞きしたときの感動はひとしおでした。母の子らへの愛情がせつせつとつたわり、我が親を思い出さずにはいられませんでした。このような素晴らしい合宿が何年も続く事を祈ります。得がたい物を得たことを感謝してやみません。

前園先輩のりえちゃんの御話を聞きて
わが子よと子のゆくすゑをいのらるる母君の心つたはりてきぬ

厳しかったが充実した五日間だった

（九州大学　法　一年　野田和孝）

先輩に勧められてあまり気乗りのしないまま参加した合宿でしたが、集まった人達の真剣なまなざしと真摯な態度に、

いつの間にか合宿にのめり込んでいきました。同班の友とも心を尽して語り合い、心を開いて人と接するということを身をもって学ぶことができました。厳しく苦しい五日間ではありましたが、それだけにその中に見出せる楽しさも大きかったと思います。人の心に触れ、短歌の楽しみを知り、数多くの真実を学ぶことができ充実した五日間でした。

大御歌心尽してときたまふ先輩の心のしのばるるかな
合宿をかげで支へし人々の心せまり来て胸熱くなりぬ

人の心を心で受けとめることの大切さを知る

（西南学院大学　法　四年　酒村聰一郎）

初日、小田村先生の昨年の講義を皆で輪読した。その中に書かれてある「心で受けとめる」といふ言葉をそれぞれの経験を交へて語り合ったが、人の話にしろ文章を読む場合にしろ、人の心を心で受けとめることの大切さを班員がしっかり受け止めてくれたので、その後の討論や輪読では、ポイントをついた話し合ひができたと思ふ。

物事に向かふ場合、観念的な正悪の問題に止まることなく人が持ち合はせてゐる自然の情にかなってゐるか、或は人生事実に根ざしてゐるかどうかが大切であると思ふ。そしてこのことは、実際に太子の言葉や防人の歌に触れてみると、古来より日本人が最も大切にしてきたものであることがわかった。

青山先輩の短歌導入講義の際、寺尾博之さんの「霧島温泉にて」といふ

御講義のあと各班を廻られ、学生の質問に一つ一つ丁寧に答へられる木内信胤先生。

歌を読まれるのを聞きて
御軍に発つ日も近く霧島のこの地に来られしかみ友らとともに
友どちのねがほを見てはうづまきし大人の心のいかにかありけむ

第九班—男子学生—

心の内を言葉に表わせて嬉しかった

（福岡大学　経　一年　柳川浩司）

班長の亀川さんに指名されるまで、自分の気持ちを心開いて言葉に表わすことができませんでした。短歌相互批評の時に自分から積極的に心の内を言葉にしようと思いました。思い通りに心の内が言えた時は、本当に嬉しいやら恥かしいやらで顔が赤くなりました。最終日の全体感想自由発表の時に、亀川さんが登壇され、僕の言葉を一番嬉しく思ったと言われた時には涙が止まりませんでした。心を開いて話すことのできる友のあることをありがたく思いました。

先輩の苦しき思ひを我知らず心開けず日々は過ぎゆく
我のため涙を流さるる先輩のまごころ知りて心打たれる

班長の心に感動した

（宮崎大学　教　二年　梶栗勝敏）

今考えて、この合宿で僕が一番学んだものと言えば『至誠にして動かざるものは未だこれ有らざるなり』と言う言葉を亀川さんを通して実際に理解できたことです。小田村先生をはじめ、諸先生方の御講義も印象に残ってはいますが、やはり真心をつくして班友を一つにまとめ上げてくれた亀川さんの心に感動しました。

班長の涙ながらの叱言に高慢な己が心知らるる
初日から悩みたまへる班長の苦しみ思へば胸痛くなりぬ

誠には誠をもって応えられるようになりたい

（中央大学　法　二年　中村芳生）

この合宿にて僕の心に最も響いた言葉は「誠心誠意ということは、感じてはじめてわかるものだ」というものでした。吉田松陰先生は「至誠にして動かざるもの未だこれ有らざるなり」とおっしゃり、そのことを具体的に実行しているのがこの国文研合宿だと思いました。誠には誠をもって応える、そういう信の世界が本当の日本人、我々の祖先達の生き方であったのなら、我々真の日本人たらんとする者は己れも誠を尽し、人の誠には誠をもって応えられるようにならなければならないと心に強く思いました。

班別討論の時、国武先生の力強い言葉を聞きて
真心は必ず人を動かすとのたまふ大人の言葉ひびきぬ

私には強いショックだった

（亜細亜大学　法　三年　矢野剛一郎）

この合宿に参加して先生方の御講義を拝聴しておりますうちに、自分のあやまちに気付き、大変はずかしく思いました。それほどこの合宿は私に強いショックだったのです。こ

の合宿に来てはじめて、真の日本の姿を知り、また日本国民の魂を感じさせられました。とても素晴しいことだと感じました。

明日には離れ離れになる友らとの名残りは尽きず夜はふくるとも

本当の学問に近づく確信を持った

（九州共立大学　経　三年　町田豊彦）

人間として一番大切にしなくてはいけない素直な心を、わざとさけていたようです。今の僕にはこの素直という言葉がすごく重くそして貴重に感じられます。心に感じた思いを実行してゆくこと、そのための気力と情熱をいつまでも大切にして、自分に言い聞かせ続けること、この繰り返しが本当の学問に少しずつでも近づくのだと確信しました。

吾が胸を打ちしみ友の言の葉を我の心にしかと留めむ

班員の心が一つになっていった

（九州大学　工　四年　亀川龍彦）

四日目の短歌相互批評に於て、はじめて互ひに心を通はせることが出来た。班員一人一人が、これまで心を閉ざして了ってゐたことをわびてくれたり、それまで自分から語ることのなかった友が、懸命に自分の思ひを言葉にしようとしてゐる姿に、班員の心が一つになってゆくのを感じた。

己が思ひを語れず居りし傍の友おもむろに話し出したり

うちとけて語ることもなく合宿を過ごし来たるが申し訳なしと

第2日目午後は，亜細亜大学教授夜久正雄先生による「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読導入講義が行はれた。

今度こそ自ら進んで話さむと思ひ居りしと友語り給ふ
己が思ひを言葉にせむと震へつつも語る姿を見るはうれしき

第十班—男子学生—

大学では背を向ける問題にとりくんだ

（熊本大学　法　一年　園田達也）

合宿に参加するまでは、右翼化するんではないかと怖れもあったけれど、今まちがいであったと素直に言える。ぬるま湯に浸ったような大学にいて、もっと何か自分らの忘れている大切なことがあるんではないかと思い、自分にもっと厳しさを与えるべきだと思って参加を決意した。

班に入って、昨日まで顔も知らなかった友達と、これほど早く心を割って話のできることは素晴らしいと思う。そこには、大学間の隔たりも年齢による隔たりもなく、ただ〝やむを得ざる誠〟の心においてのみ通じる場があった。正直なところ、今回ほど、政治、経済、その他、本来学生が考えていなければならない大事な問題に対して、素直に意見を交したことはなかったと思う。大学ではそういう問題に背を向ける学生が多く、自分も知らず知らず背を向けていたし、友の機嫌をとるような浅いつきあいに終わっていたようだ。だから、政治その他に関する知識も浅く、これから一年勉強せねばと、そして来年の合宿でまた友と語り合いたいと思った。

諸先生方の御講義はそれぞれ素晴らしいものだった。多くは今までの自分の考えと違っていて意外に感じたのだが、納得するところが非常に多かった。

合宿を通して感じたことは、〝アメリカが怖い〟ということだ。国を顧みず、ひたすら〝アメリカ化〟してゆく日本。東洋精神の素晴らしさを真に取りあげない教育。僕には今が、消えつつある東洋精神と、更に侵入してくる日本のアメリカ化との頂点だと思える。物事を概念的にとらえるよりも体験的にとらえられる活きたる精神を大事にしてゆきたいと思った。

男泣きに泣きしみ友の真心に胸のふるへて涙落つるも

一人の友達に向かった

（亜細亜大学　法　四年　富本哲弘）

何とかして人の心がわかりたい、お互ひに通じあひたいといふ願望を強く抱いて合宿に参加した。僕の気持は合宿中、一人の友達に向かった。

二日目の夜、輪読が終ったあと、彼は僕に「一緒に輪読をしてくれませんか」と言ってきた。輪読後、夜遅くまで話した。三日目もつづいた。四日目、僕が洗濯をしていると、彼がきて、彼は心をさらけだして話し始めた。思ひを僕にぶつけてくるなら何時間でもつきあはうと思った。

しかし、いくら注意しても一向に行動に表れてこなかったので討論の最中にきつくいった。すると、「もう合宿をやめたくなった」と彼はいった。僕は衝撃をうけた。彼がだんだ

んと一人の世界におちこんでいくやうに見えた。僕はいろいろと話した。だが、彼の心の中まで届かないやうだった。

合宿最後の所感発表のとき、彼と心が通じるやうになればいいなあと思ってたら、涙があふれてきた。僕の語る言葉はつきてゐたのだが、気持だけは言ってしまはうと思って壇上に立ったのだった。

友どもと心通へる喜びを思へば涙の知らずあふれ来

学問する喜びを体験した

（京都産業大学　経営　四年　鈴木利幸）

班別の短歌相互批評のときに、班友すべてが、本当に心尽して批評してゐる、その姿を見て、やっと友らの心が一つになったと思ひました。そして皆が学問する喜びをそこで体験できたと思ひました。

私はできるだけ友の身になって批評したつもりでした。ところが、それ以上に私の身になって友らが歌を批評してくれて、たまらなく嬉しい気持になりました。

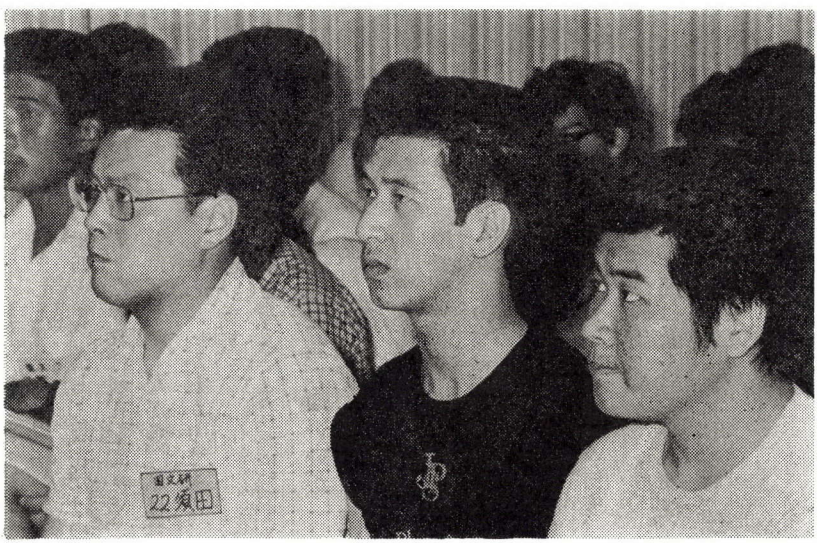
班友皆が学問する喜びを体験したこと、そこに大きな意味がありました。

宣長の歌を友らと声あはせよみゆくことのうれしかりけり

今までもっていた観念と違い、驚かされた

（国際商科大学　教養　一年　山口唯観）

この合宿教室に参加したのは、私と同世代の人たちは何を



先生の御言葉を一言も聞きもらすまいと真剣に講義に耳をかたむける学生たち。

考え感じているのかということを知りたかったからで、アルバイトをしてお金をつくり、参加しました。

四日目の夜の班別討論に夜久先生、小柳先生がこられたので、心の奥にひっかかっていた問題を質問しました。――戦後教育をうけてきて、歴史というものは事実を正確に学ぶことが大事で、神話に出てくる神々は作り話かもしれない、神武天皇の存在は疑われているのだ――と。夜久先生は『日本書紀』に書かれている話が事実かそうでないかということは重要でなく、大事なのは、そういう神話の時代の精神がずっと続いてきて現在の精神につながっているということなのだと答えられました。私の今までもっていた観念とあまりにも違うものであり、非常に驚かされました。

またの日に集はんことを誓ひつつ微笑む友の顔すがすがし

過去を正しく理解してゆきたい

（九州大学　工　一年　藤田泰之）

初めての合宿でしたが、班友を知り、語りあい、とても感銘深く心に刻まれました。ほんの五日間語っただけで一人一人の心にせまれたのも、心を開き他を受け入れることを自然に許しあえたからだと思われます。この合宿では自分の従来の意見・考えを捨て、善く聞こうと努めたおかげだと思われます。

今合宿で特に学んだのは、現在大学で行われている学問は、知識を与えるだけで心にせまっていないということ。そして、心にせまるには友と一緒に、時と場を設けて努めなければならないのだと思いました。また、現在の我々は過去の歴史の延長上にあるのであって、決して現在だけの存在ではなく、過去を正しく理解しなければ現在を考えることはできないことを教えられました。しかしながら、私にはまだ天皇というものをどうとらえたらよいかわかりません。これからの問題としていきたいと思います。

夜更けまで語りあひたる友どもと別るることのひたにつらしも

こんなサークルが大学にあればいいが

（広島大学　理　一年　内田武文）

初めて合宿教室に参加してみて、とまどいもあったけれど終ってみれば残念な気持でいっぱいです。僕の大学には、こういった種類のサークルがありません。しかし、こうしたすばらしい体験を僕はここだけのものにしたくない。一人でも二人でも大学で見つけ、この合宿教室に参加させてやるのが僕のできるつとめだと思います。この思いを何度、全体意見発表のとき言おうと思ったかしれません。

この合宿で僕の抱いた疑問はたくさんあります。しかし、それらは次の合宿でまとめてみなさんにぶつけてみたいと思います。いや、ぶつけます！

「まごころ」てふ大人（うし）の言の葉いだきつつ我が学び舎に友を求めん

心に熱き思いを感じた

（高千穂商科大学　商　二年　池田　満）

一度は合宿に参加するのをやめようと思いましたが、人の意見に左右されるのではなく、素直な気持で合宿に参加してみることが重要であると考え、決心しました。

いざこの合宿に参加してみると、本当によかったと心から感激しました。我が人生において貴重な体験をさせていただいたと思っています。大学では味わうことのできないものがこの合宿にはあることを確信しました。輪読や和歌の創作は苦しかったです。でも、友と語りあったこと、良い歌に感動したことは、いつまでも心にとどめ、これからの自分の勉強に役だてたいと思います。亜大の富本さんが涙ぐんで、「池田君、これからも頑張っていこう」と言われたとき、心に熱き思いを感じました。富本さんにどこまでもついていこう、富本さんの気持を大切にしたいと心から思いました。

輪読で得た体験を大切に我が行く道に生かしてゆかん

先生方の生き方にふれて

（福岡教育大学　教　三年　大石育郎）

折りにふれて
世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさを
を

この明治天皇の御製が、今回の合宿を通じて私の心に一番

食事中も話は尽きない。夢中で語り合ふうち、いつの間にか茶碗も空になり「おかはり下さい」。

強く残った歌である。合宿導入講義において山田先生は、「戦争で国のために死んでいった人たちの思いを若き人々、戦後生まれの君たちに語り伝えていくことが、生き残った私の任務である」といわれた。合宿を始められた先生方は皆そのような思いでいらっしゃるのであろう。先生方の心には友人の「死」と亡き友人が命を捧げた「国」が絶えずくっついているのであろう。現代青年に欠如しているのは「国家」と「死」の概念であろうといわれるが、本当にそうだと思う。

友と心が通じあうことは本当に嬉しいことだ。そしてまた先人と心が通じあうことも嬉しい。合宿で先生方は私と先人との心を通いあわせて下さっているんだなあと思った。また生命ある限り語り伝えていくことが任務であると思って生きておられる先生方の生き方、これが歴史に生きることではないかと思った。

物質的に最も恵まれた時代に生きている私たち、ややもすると、歴史を忘れ、国家を忘れ、私利私欲の人生を過ごしがちである。しかし、短い一生、たった一度だけの人生を、この永い日本の国の歴史の流れを正す支えとして生きることが本当に歴史を生きることなんだと思う。

山田先生の講義を聴きて

戦ひに散りにし友の悲しみを偲びなむとぞ大人(うし)はのたまふ
亡き友の思ひを若きらに語らむが残されしわれの任務(つとめ)とのたまふ

第十一班—男子学生—

心から湧きあがるものをおぼえた

（西南学院大学　文　一年　結城誠二）

私の合宿での大きな感動は、二つばかりある。その一つは、日本人として生れた私達が決して、私達の祖先とまったく離れていないと言うことである。いや、そんな事よりももっと強く先人達と、日本の言葉（日本人であり、日本に生まれ、日本で育った私達だからこそ心で思い、それを受け継いでいくことができる高い調べを持つ和歌や文章）を通して結びついているという事である。心に語りかけ心に響く、日本の言葉を大切にしてゆきたいし、ゆかねばならないということである。二つ目は、いかに天皇様が私達のことを思っていらっしゃるか、どんなに強く、暖かい真心でみつめておられるかということだ。大東亜戦争終結において、今上陛下が詠まれた御歌が、慰霊祭の時、夜久先生の口から流れでた時、何か湧き上がるものをおさえることができませんでした。

日本人としてこれから先、生きてゆく中で、この合宿で学んだ様々な事。短歌を詠む難しさ、たのしさ。私達は今生きている者だけで日本という国をつくっているのではないということ。遠い祖先の人達の赤き心を伝え受けていること。これらの思いを胸にして、大学にもどって生活をしていきた

いと思っている。

班友のふともらしたる言の葉に目を開かるる思ひしたるも
我がおもひ素直に言ひしその後に返へる言葉もうれしかりけり

互ひの心をつなぐもの

（九州大学　法　二年　金子光彦）

ただ、言葉を交はせば、心が通じ合ふのではないと思ふ。互ひの心をつなぐものは、やはり「耳に善く聞かう」とすること。相手の心に触れたいと念ふ気持だったと思ふ。十一班の班長を務めさせて戴きましたが、友が輪読や討論の時に、素直に思ってゐることを述べてくれた時、また、友の思ひを解からうと真剣に友の声に耳をかたむけてゐる姿を見た時、本当にうれしく思ひました。

茶谷武さんの遺書を読みし折
声合はせ御遺書にしるせし言の葉をたどりてゆけば胸あつくなりぬ
遺書を読む友等の声のその語気にあふるるごとき思ひこもれり

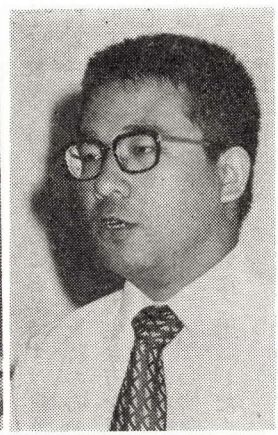
緊張した五日間

（早稲田大学　政経　一年　斉藤　勝）

初めは不安と緊張でいっぱいでした。日がたつにつれだんだん慣れてきましたが、やはり班別討論では幾分緊張していたようです。長かったとも短かったとも言いようがない五日間でしたが、非常に充実したと同時に緊張した五日間だったように思われます。

眠気おそへどねたしと思はず友どちと語り明かせるうれしき夜なれば

カメラ・レポート　15



「青年研究発表」
右から、日本ユニバック㈱の大町憲朗君、福岡県立若松高校の坂口秀俊君、福岡県玄海町立玄海小学校の前園由美子さん。それぞれが切実な体験を語り、聴く者に大きな感動を与えた。

苦しかったが今はすがすがしい気持

（中村学園大学　家政　一年　塚本研也）

人間とは、友とはこのようなまでにもすばらしいものかと改めて痛感させられた。これがこの合宿を通じての第一の感想である。最初は不安もあった。緊張もあった。しかし、それを班員七名全員の力で乗り越えていった。何か自信というか、得がたいものが身についたように思われる。班員七名、それぞれ出身地・大学ともにばらばらであり、ましてや初めて見る人達ばかり、共に苦しみを克服して友達になれた。自分はこのことがいちばんうれしい。つらかったこともあったが今はすがすがしい気持がして、本当に合宿に来てよかったと思っている。

霧島の短き合宿で我が胸に残るは友の深き情なり

ありのままの心を表わす大切さを知る

（明治大学　法　三年　田村英治）

この合宿では、自分の心をとにかく素直にだそうということを心がけてやったつもりです。結果はともあれ、その場その場を精一杯やり抜く時、本当に心がさわやかになり、気持ちが明るくなるような気がしています。

小柳先生や小田村先生の御講義を聞いていて、心の動き、ありのままの心を表わしてゆくことが、知識とはまた違ったもっと人間の根本にかかわる非常に大切なものであることを改めて教えられ、たいへんありがたく思っています。

友どちと寝起きともにし学びたる四泊五日の忘れがたしも

人としての生き方を見い出した

（東京農業大学　農　二年　石井一行）

この合宿に参加して、ほんとうに驚きました。これほどまでに深く友をおもいゆく、その心に深く感動しました。今、自分は幸せに思います。この美しい日本にいることが、そして、数多くの友といることがです。自分の心を述べることに何もさえぎることがなくなった時の心の発露が何んと素晴しいものであるか。人としての生き方を見い出したような気がします。自分自身がまだまだ低い次元にいたことを恥かしく思います。この合宿で培ってきた心情を決して忘れることのないように、毎日を悔いなく過ごしたく思います。

全体感想自由発表にて
友どちが身の至らなさつくづくと語る姿にわれは涙す

第十二班—男子学生—

慰霊の意味が実感できた

（鹿児島大学　水産　三年　姫野政直）

合宿期間中は、日露戦争従軍将士猿田只介さんや吉田松陰等の書かれた歌や文に直かに触れ、今は失せた人々の心が、

どうしようもない時間の壁を超えて、私の胸につよく呼びかけてくるという経験の連続でした。其の人達の生き方は、本当につよく悲しかったことを思うと、私はただ頭を下げるしかなく、その時、慰霊の意味が、初めてはっきり実感できました。たとえ失せたにしても、其の人の心が、今に生ある私達に響くが如く伝わってくる、その悠久の流れ、歴史が国の生命のように思われてなりません。

小野さんの発表をお聞きして

先輩は声つまらせて御祖らの御霊祭りのこと話さるる
ああ先輩は昨年亡くなりし有馬兄の御霊憶ひて泪さるるか

思いやりを体で感じた

（佐賀大学　理工　二年　小野伴美）

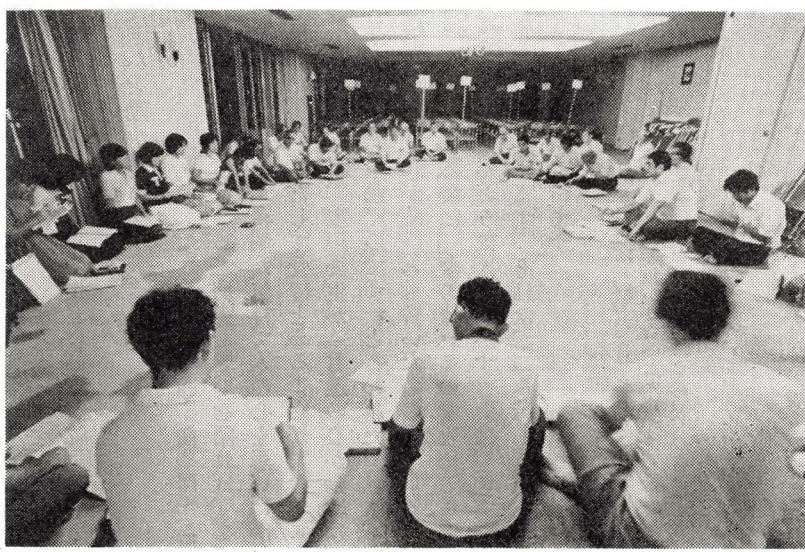
「他人の心を思いやる」ということを、今までの私は、自分なりにわかったつもりでいました。ところが、この合宿で、班別輪読等をやっている時、本当に先輩たちが自分のことを思ってくれているのだなあということを体で体得できたような気がします。

われを思ひ涙ためつつ語らるる先輩の心のありがたきかな

友とのつき合い方を反省させられる

（長崎総合科学大学　工　三年　下川新次）

私は親友に対して自分でできるかぎりのことはしたつもりでした。しかし「人に対して至誠をつくす」という言葉を聞



班長からの報告を受けた助言者達は各班の問題点を整理し合宿運営について深夜まで検討を続けた。

いて、自分をふりかえって見ると、ああいう点もいけなかった、こういう点もいけなかったと思いなおされ、再度、親友との付き合いに「誠」をもって、新しい付き合いをしていこうと思っております。

いろいろ悩み、苦しむことがある時は、合宿で知り合った友達に手紙を書きたいと思っています。

先輩に苦労せよてふ手きびしき言の葉戴き嬉しくなりぬ

多くのことを学んだ

（慶応大学　経　三年　前島克治）

短い四日間でしたが、大変充実した日を過ごさせていただきまして感謝の気持でいっぱいであります。とにかく多くのことを、先生方の話から、討論から、そして友の発言から学びました。

まず自分には甘えがあったことを先輩から指摘されまして今後の生き方の指針となりました。

第二に、吉田松陰の迫力ある炎のような生き方に強く感動致しました。

第三に、寺尾さんや猿田さんをはじめとする、日本を守ろうとして戦死した方々の短歌を読んで、いいしれぬ感動を覚えるとともに、今までの自分に、いかに友人を思いやる心、国家を守ろうという意識が欠けていたのかに気づき、非常に恥かしくなりました。

最後に、小田村先生のお話をお聞きして、自分に残された大学生活、あと一年半余りを悔いのないように過ごそうと決意しました。

掲げらるる日の丸の旗は山々の深き緑にひときは映ゆるも

人を動かす言葉

（福岡大学　商　四年　原田憲治）

ほんとうに真心をこめて切実な思いを語れば、必ず人を感動させ、また自分が真剣な気持で人の心を思いはかれば人の感動を自分のものとして受けとめることができることを痛感した。閉会式の時、宝辺先生が「君達の心が動けば、その姿を見て、私の心も動くのです」と言われた。私も、友が、真剣に、自分はこれがぜひとも言いたいのだという、その感動を伝えようとする姿に、涙の流れるのをとめることができませんでした。ほんとうに人を動かす言葉は、切実なものにほかならないと思います。それは、悩み苦しんだところから出てくるものだと思います。

全体感想発表にて

一言も思ひ述べ得ぬ友どちは今壇上で喜び語りぬ
友どちは初めて班のみ友らとわかり合へたと声つまらせぬ
み友らの思ふがままを聴きをればあふるる涙ぬぐひきれずも

第十三班—男子学生—

本を読む姿勢を学んだ

（一橋大学　商　一年　水原　潔）

まず第一に、今までの不勉強さを痛感すると共に、輪読の楽しさを知った気持ちがする。輪読を通じて、本を読む姿勢を初めて学び、心の中にずしんとくる重みのようなものを感じ取ることができ、大いに有意義であった。反面、講義において、自分に強烈な印象を与えた言葉が少なかったのは、残念であった。又、天皇という人を少し前面に押し出しすぎていないかという疑問を持った。これは、僕の不勉強の為かもしれないが……。最後に、この合宿に参加し、経験したことが、自分の将来に少しでも生かすことができるならばなあと思います。

爽やかに晴れ渡りたる夏空に友らと共に再会誓ふ

自分の気持ちを言葉にする難しさ

（佐賀大学　農　二年　佐本将彦）

この合宿に参加し、普通の生活では気付きにくいところを、気付かせてくれたような気がして、とても有意義であったと感じています。輪読では、友との心のふれ合いの楽しさを感ずると共に、自分の気持ちを正確に言葉にして伝えることの

カメラ・レポート 17

第三日目は高山岩男先生の「精神文化と科学的機械文明」と題された御講義で始まった。今日の課題は、科学技術と精神文化との調和であると強調された。

難かしさと、大切さを痛感致しました。この点は、和歌創作の時にも、強く感じたことです。この経験を生かして大学生活を頑張ってみたいと思います。

美しき月仰ぎつつ友どちと語る今宵ぞとはに忘れじ

勉強したい気持ちが湧いてきた

（岡山大学　法文　二年　塚村範雄）

この合宿教室も、昨年に続き二度目の参加になるが、やっと進歩がみられた感じだ。とにかく、勉強しようという気持ちが起ってきた。今まで、自分から進んで勉強しようなどと思ったことがないから不思議だ。とにかく、今年は自分の思うことを言ったのがよかったのだと思う。ほんとに長かったという感じの合宿教室であったが、もう一泊したい気持ちである。皆と別れてゆくのが、本当に辛い。班の友だち、班付の先輩方に、心より感謝したい。

友どちのことばの中にこめられしまことのこころの伝はりてきぬ

輪読のすばらしさを知った

（九州大学　農　二年　佐野淳志）

輪読のすばらしさを知った。一人では全くわからないような文章も、数人集まって、自分の思ったことを心開いて語り合い、文章を書いた人の気持ちになって読んでゆくと、だんだん内容が解ってくる。とても、不思議であった。また、和歌も声を出しておぼえるまで読まねば、本当に解らないのではないかと思った。今までの自分の和歌の読み方の足りなさを、つくづくと感じた。

心より語れぬ吾れをすまなしと頭を下げて言ひし友はも
友どちの心の底ゆわき出づる言の葉聞けば心打たるる
先輩の元気出せよと語りしにはげまされりと友の語りぬ
その友のまごころこもれる言の葉にみなも続きて語り始めり

先輩の言葉に感謝したい

（長崎大学　教　一年　川上浩太郎）

今まで、あまりに〝日本人〟であることを自覚しようとしたが為に、気負いすぎて、本来の自分というものを見失っていたようで、心が閉され、なかなかそれを突き破れなかった。そうしている時、「もっと思った事を、感じたままにぶつけたらどうか。」と、班の先輩が言ってくださった。僕を思って言ってくれたその言葉がありがたく、感謝したい。合宿後半、しだいに僕の気持ちも明るくなってきたが、もっともっと、班の皆と話せればよかった、皆にどんどんぶつかってゆけばよかったと、思われてならない。

思ふこと素直にのべよとうながし給ふみことばただにありがたきかな
先輩のわがこと思ふみことばにこたへむとしてつとめたりけり

物に感ずることの大切さを痛感した

（熊本大学　医　二年　古井博明）

今度の合宿で、太子の御本の中の「耳に善く聴く」という

言葉について、多く議論されましたが、「耳に善く聴く」といふ事を体験する事の難しさを感じました。様々な雑念がまとひ付いて、なかなか素直に感ずる事のできない自分に、改めて気づかされました。短歌全体批評の時、長内先生が、「自分は、和歌の批評をできるやうな人物ではないが、ただ物に感ずるといふ気持ちは、まだ持ってゐる。」と言はれた言葉が胸にひびきました。自分も、「物に感ずる」といふ事を大事にして生きてゆきたいと思ひます。

六名の友らとともに声あはせ「神洲不滅」歌ひし夜はも

生きた学問は身近な処にある

（亜細亜大学　法　三年　安田利雄）

私は合宿で、先生方の御講義をお聞きするうちに、「国を思う心を大切にしたい。」「生きた学問をしなければいけない。」と、つくづく思いました。しかし、この気持ちを明日からの自分の生活の中で、どのように実行して行ったらよいか、よく解りませんでした。御講義の中で引用された松陰先生の文章に、『動処に於て本心を認むる』『或は書を読みて意中の人に遇ひ、意中の事を見るか、同志の人を会し、劇談豪論するか、……都て吾が心気力を発動せしめたる後は、……』とありましたが、この文章を読み、生きた学問とは、自分の身近なところにあることを知りました。

心こめ問ひかくる友の姿見れば人の事とはゆめ思はれず

高山岩男先生の御講義について質問する男子学生。

第十四班―男子学生―

日本人としての畏敬の心

（九州大学　経　一年　江崎雅彦）

実に低い次元でしか物事を考えることのできない私の発言などを熱心に考え討論してくださった先輩・友達に感謝したい。そういう体験は日常の大学生活ではなかなか得ることのできぬ貴重なものだった。確かに未だ釈然としない点もある。納得できない点もあった。だがそれは些細な事だ。私が大事にしなければならないのは、日本人としての心ばえ、畏敬の心を身につけるということである。そこを教えていただいたのはうれしい事だ。

わが背をば太き腕にて流されし先輩の心のありがたきかな

班長の態度に感動した

（東海大学　工　三年　濱崎　博）

班長さんの班員に接する態度には深く感動しました。自分の軽率な発言や、的はずれの発言にも耳を傾けて、自分の気持を汲み取ってくださろうとする態度、また他の班員に対しても同じように深い愛情を注いでおられた姿には本当に学ばされました。

力のこもった、愛国の情ほとばしる小田村先生の御講話に圧倒される思いでした。

車中より錦江湾をのぞみ病床の祖母を思ふ
年老いた祖母は丸尾にただ一人不治の病の床につきをり
雲海に浮かぶがごとき桜島を病の祖母に一目見せたし

大学生活の目標が定まった

（熊本大学　理　一年　吉田貞徳）

五日間の貴重な体験を通じて得たものは、私達若者がやらねばならないということ、何事をするにも心をもってするということです。明日への希望がみちみちています。大学生活における自分の目標が定まったと言っても過言ではありません。全体感想発表を聞いていて目頭が熱くなるばかりで、特に今上天皇の御製を聞いたときには涙がボロボロと出て来ました。今日のこの新たなる決意の気持ち、すばらしき感動をいつまでも忘れずに明日から本当の学問をやってゆこうと思っています。

全体感想発表
友どちの我らに訴ふる言の葉に我が目頭は熱くなりけり

本気になって和歌を研究してみたい

（鹿児島大学　法文　四年　良本光明）

講義の中では、その一言一言に感ぜしめられ、真剣に考えることができたのですが、班内であるいは他の学生との間では、どうしても最後まで心の隔たりをぬぐい去ることができませんでした。ただ、私は、合宿中和歌を詠み読けました。四十首ほど詠みました。つまらないものばかりで、もう一度

本気になって和歌を「研究」してみようという覚悟が生まれました。

合宿に集へぬ友に手紙を書きて
入浴の時をさきても文せむと今日の講義のノート見入れり
一通の文書き終へて筆置けば集へぬ友のことの偲ばる

友の言葉をかみしめるように聴いた

（福岡大学　経　四年　杉山直樹）

なかなか友達の心に入っていくことが困難であった時、太子の「耳に善く聴くを聰と曰ひ、心に明かに察するを慧と曰ふ、……」という「聰慧利根」の釈文が浮かんできて、友の一人一人の言葉をかみしめるように聴いていった。人の心に入っていって心を開いて語っていくことが如何に困難であるかを知り、また、ひとつ大きな勉強をさせていただきました。

壇上ゆはつらつとして友どちは学びゆかむと語りたまひぬ

「畏敬の念」を身につけるやう努力したい

（早稲田大学　政経　四年　内海勝彦）

小田村先生が明治憲法の前文を説明されながら、歴代の天皇が、常に皇祖、皇宗のみ霊にひれ伏されて、全く私心といふものがないことを指摘なさった。現在の日本をつくってこられた先人の徳を偲ばれつつ、国民と共に新しい日本を築いてゆかれようとする明治天皇の姿勢には、権力で国民を縛ら

和歌導入の講義をする青年設計技師青山直幸氏（戸田建設㈱）。氏自身がはじめて歌を詠んだ頃の話は、これからはじめて歌を詠む者の不安をほぐしてくれた。

うとするものであったといふ如き解釈がいかに浅薄なものであるかが思はれてくる。先生は、「畏敬の念」を身につけることが日本国民だと言はれた。僕もさうなるやうに努力してゆきたいと思ふ。

全体感想発表

これからも松陰のみ文読みたしと強き言葉で友は語りぬ
我もまた友の決意につながりてはげみゆきたしふみかはしつつ

感激したことをじっくり考えたい

（高千穂商科大学　商　二年　神原　誠）

今回の合宿で得たことは、本当の友をつくるには、自分も本当にならなければいけないということです。それともう一つ、皆とともに感激したことを、何故感激したのか、家に着いてからじっくり考えたいと思います。

今しゆく高千穂の山の麗しき姿思へば心をどれり

第十五班―男子学生―

先人の〝おもい〟にふれて

（鹿児島大学　工　二年　一丸　修）

一つの文、一つの歌を読むときに、いかなるおもいで書かれたのだろうと、先人のおもいを偲ぶことはとてもむつかしいことだが、それ以上にすばらしいことなんだと感じました。むかしの人の文を読むと、言葉の新旧や年月のへだたりをこえて、ぼくの心にいきいきと流れこんでくるものがあって、うれしくなるとともに、こんな書物を読まずにおくのはなんてもったいないことかとおもいました。

考えや意見ではなくて想いを語ってみなさいと、ある先生に指摘されたことが心に残っています。『文明論之概略』を第一日目に読みましたが、その中の〝国をおもう〟ということがいまだによくわからず、おもいをめぐらしております。

また、吉田松陰先生の、感激と感動に満ちた熱い血の流るる人間性に、すがすがしさを感じ、すばらしいと思いました。

ありがたうとなみだごゑにて呼びかくる友どちのこゑのむねにひびきく

生きている証を体験した

（福岡大学　商　三年　田中義彦）

今回の合宿には誰の意見も聞かず、ポスター一枚を見て参加する決心がつきました。

この合宿で、人間にとって必要な心のあり方、神を重んじる心、古典を愛する心、人との交わり方、物の見方、考え方など、現代教育では教えてはくれない教育本来の姿を直接、目で見、膚で感じることができました。

私は大学で人間形成に努めなければいけないと思ってきましたが、現在の大学では三無主義に巻きこまれそうで、一方では何かを求めている心理状態にありました。そこで、この合宿での毎日の充実は、自分にとって生きている証を体験し

たようなものです。班別討論は、昨日まで顔も知らなかった人と話し合う場で、とても新鮮でした。「人生とは人との出会い」と思っています。

古人の気持、生きざまが迫って来た

（宮崎大学　教　二年　松原慎治）

班別の和歌の相互批評で、本当に心の通ひ合ひを感じました。大島さんの「とつとつと語るみ友の言の葉に深き思ひのこもるを知りぬ」と詠まれた歌が心に残ってゐます。また、輪読では、最初は意味ばかり追って少しもわからないでゐたものが、みんなで文章を味はふうちに、少しづつ聖徳太子や吉田松陰の気持、生きざまが自分に迫って来るのを感じて、改めて書を読むことの深さ、大切さを知りました。

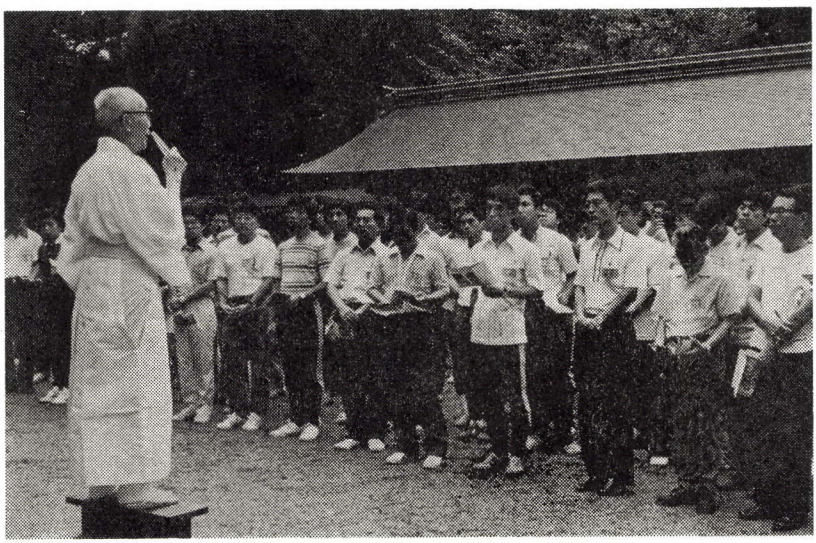
小田村先生の「畏敬のこころを身につける心の鍛練こそが必要」といはれた言葉のなかに、私が日本人として生きようとするときの最も重要な問題――自分に最も足りないもの――を指摘されて、自分の本当の心を知り、他に対して畏れ敬まふ姿勢が大切に思はれました。

全体自由発表の折に
友どもの思ひのままを言の葉に述ぶる姿に心うたるる

くやしさを忘れてはならない

（中央大学　経　三年　田嶋敬一）

合宿教室に参加してよかったと思えるのは、学問的な問題



霧島神宮にて宮司さんのお話をお聴きする。霧島神宮の由来についてお伺ひしたあと、全員で参拝。

はもちろん、班員の者同士が一生懸命考え、それを仲間に伝えようと、苦しみながらも努力していたことである。皆で感じたことを出し合って、それを感じ合い、話し合っていけるような討論会にしていきたいと言われたとき、自分ではその通りだ、自分もそうしなければいけないと思いつつもそれが出来ずにいた自分がはずかしく、くやしい思いである。このくやしさを私は忘れてはならないのだ。

こみあぐる胸の思ひの言の葉に我も同じと胸熱くなりぬ

自分の心を見つめたい

（九州大学　理　四年　大島　洋）

色々心を動かされたことはあるが、反省させられたこともあり、言葉に表すことは何かしらひどくかけ離れたものになるようで、今はただ自分の内心をじっと見つめたい。

唯じっと我が心根を省みれば心ふるひしことを思ひ出したり

うれしかった班友の指摘

（九州大学　工　四年　久米秀俊）

今一番うれしいことは、班友の一人が「君はまだ遠慮してゐるよ。けんか別れしてもいいから思ひっきりぶつけるべきぢゃないのか」と胸内を打ち明けてくれたことだ。彼の気持に僕も励まされ、僕も彼もまた班友みんなもそれぞれに思ってゐるそのままをぶつけあへたと思ふ。しかし、それが一人の班友への非難といふ形になってかへってその人の心を閉ざしてしまったやうな気がしてならない。一対一でぶつかってゆかなければならなかったと後悔してゐる。

また、輪読のとき、「直接耳にひびき心に味はは〻所の生きたる教法の信受體達」といふ文章にふれ、その生き生きした言葉に惹れて皆に感想を求めたところ、班友が「さっきの坂口さんの発表に感じなかったんですか」と指摘してくれ、自分の聴く姿勢がまだまだたらはなかったことを思はされた。体験に則して文章を味はへと口で言ってゐても、それが実践されてゐなければ何にもならないと思った。

小野先輩の所感発表を聞きて

今年程慰霊祭の時雨やみてうれしきことはなしと宣ふ
戦場にゆかれし父上偲びつゝ燃えあがる炎見つめられしと
終戦時の御製の調べ聞きをれば倒れるが如しと語り給ふも
去年の夏失せにし友もこの場に還りきつるかと御声つまらせり
あふれたる涙のままに高らかに終戦時の御製読み給ひしも
先輩の読み給ひたる大御歌の強きしらべに涙あふれり

第十六班—男子学生—

言葉と真剣に取り組む

（九州大学　法　四年　安部　修）

この合宿に参加したことによって得たことが、二つあります。一つは、自分の気持ちを適確に表現できるように、言葉というものを真剣に使うことであります。日頃、友人と話す

時など、いい加減な気持ちで、曖昧な表現で言葉を使っていたことを知らされたのです。輪読会において、一つの言葉にどんなに深い気持ちが込められているのかを知りました。また、短歌を自分で創作することによって、自分の気持ちを相手に解ってもらうことが、どんなに難かしいことであるかを知りました。そして、相手の気持ちの一端にでも触れることができたり、自分の気持ちを解ってもらえた時の嬉しさは、実に大きなものでした。もう一つは、国を愛するということです。僕は今まで、戦争は許されないものであるから、戦争に関するものは、軽視し、黙殺して、「国」という言葉には触れたくもないと思っていました。しかし、この合宿で、国を愛するということは、日本という祖国の山河の連なりを愛することであり、父母、妻、兄弟、そして、友だちを愛することなのだと知り、日本人として当然持つべき、自然な感情だと知りました。来春卒業をひかえて、国を愛する一社会人となるよう、残りの学園生活を精一杯努力して送りたいと思っています。

明日(あした)にはたがひに別るる友どちと内庭(うちには)に出でてともに語らん
つかれてもなほ眠りがたし共にをる時のわづかとなるを思へば

心を開いて友と話せた

（青山学院大学　法　一年　小田村直昌）

私の合宿に参加した動機というのは、今年大学に入学してから今日まで、あまりにも勉強をしていなかったからという

カメラ・レポート 21

高千穂河原での散策の一時。
同じ班の友とすっかり打ちとけて語らひつつも、短歌創作のことが何となく気になる。

ことでした。全く異なる地域の学生と接して、皆がどれ程勉強しているのか、それだけでも知れれば良いと思いました。実際に合宿を終えてみると、諸先生方の御講義のすばらしさは忘れ難いものでした。日頃の大学の講義に比して、この合宿での講義は、身を乗り出さんばかりのものでした。また、班別の輪読、討論では、友が心開いて話してくれ、自分も積極的に自分の意見を話せたことは、非常に意義がありました。合宿後も、この体験を生かすべく、自分から進んで勉強をし、これからの大学生活を有意義なものにしたいと思っております。

語り合ひ共に過せし友どちと別れゆくこそ悲しかりける

久しぶりの充実感

（東北大学　農　一年　桑原正貴）

合宿で最も印象に残ったのは短歌の相互批評であった。短歌の批評の時は、自分の歌に対して班員が、いろいろと思いを真剣に述べてくれるのに対し、自分の気持ちを述べたり、以後、他の皆の歌についても思いを述べあい、時間を忘れて取り組んだ。相互批評を終わった時は、久しぶりの充実感をおぼえた。これからも折にふれて、自分自身すすんで歌を詠み、先生方や班員の皆とも、手紙などで歌を送り、批評し合えればと思います。

再会はいつの日にかと思ひつつ筆はしらせる友の顔見ゆ

深い付き合ひをしたい

（西南学院大学　商　二年　冨田重徳）

顔も知らなかった人達と互ひに過した四泊五日は、またたくまに過ぎてしまった。私自身、何ら悔ひの残らぬ様、自分の心から話してきましたが、班の皆は今一つ、心の中を明かしてくれなかったと思ひます。小柳先生の御講義の後の班別討論の時から、次第に皆話し始め、短歌の相互批評の時には、一人一人の歌の感動の中心を見つけようと、思ひを語り合ひ批評し合へたことは、一生忘れ得ぬ経験となりました。ただ、班の友と、もっと深い付き合ひをしたかったといふ気持ちが今も残ってゐますが、手紙をやりとりし、歌を詠み合ひながら、付き合ひを深めてゆきたいと思ひます。

お互ひに折あるたびに文を書き真の友人にならう班友よ

疑問が多く残った

（九州大学　文　一年　岡田洋三）

僕は、畏敬の心を持てと言われても、ピンと来なかったし、山桜集の中の和歌をよんでも、気持ちは解らなかった。天皇のことを考えるにしても、御製だけをよんで天皇を理解したりするのは、自分が制度のことなど学んでいないだけに、盲目的な気が今でもしている。小田村先生が「制度として天皇を考えてゆくのは次元が低い考えだ。」と、声を大にして言われたが、もしそれが正しければ、そのことが解るくらい勉

強したい。疑問は多く残っているが、心は不思議と晴れやかである。

合宿の短き日々に知り合ひし友と便りを交さんと約す

班友の心に迫れなかった

（熊本大学　医　四年　福田　誠）

今年初めて班長をやったが、僕は一人一人の班友と心を通はせ合ふことに心がけ、班友の言葉に耳を傾けた。しかし、どこまで班友の心に入り得たか、はなはだ不安である。それは自分の力の不足もあったと思ふ。班員一人一人の心に迫って、心からの友達付き合ひができるやう努力したが、班員の気持ちが一つにまとまらぬこともあった。しかし、合宿が終った今、班員の一人一人と握手をして別れる時、別れ難い思ひと共に、爽やかな気持ちがした。

全体感想自由発表

我が友の胸の苦しさ伝はりて語ることばに涙流るる

班長の苦しき胸内伝はりて班員の心も通ひゆきしとふ

歴史上の人物の生き方にふれた

（高千穂商科大学　商　二年　林　宗城）

この合宿に参加してみて、歴史上の人物などの書いた文章、詠んだ歌に対し、思いを込めて接すれば、その人物の気持、人柄にふれることができるものだと思いました。そういう人物の生き方にふれた時、あまりのすごさに、自分が突き放されそうにもなりましたが、その壁を突き破らねばならないと

カメラ・レポート　22

慰霊祭の説明が歯科医師吉田哲太郎氏により行はれた。「二礼二拍手一拝」といふ〝神まつる手ぶり〟をわかりやすく教へてくれた。

痛感致しました。

真夜中に中庭見れば露おりてしづく照らすは夏の月かな

第十七班―男子学生―

今まで感じる事がなかった事を感じた

（熊本大学　理　二年　佐藤利憲）

諸先生方の御講義をお聞きして、自分が今まで感じる事がなかったという事を感じ、又、全く目新しい事を知る事により、納得のいかなかった所が納得できた事はうれしかった。

若山牧水の奉悼の歌で、大正天皇が長く病んでおられる間中、「国民の我等がうれひ常にとけずありき」というのをよみ、当時の天皇と国民との関係が思いうかんできた。

全体感想発表の折

友を思ふ心の通ひし喜びを涙ながしつつ語りゆかるる

一段と大きな声で言はれしは「ありがたう」てふ言葉なりけり

学風改革の使命を痛感する

（鹿児島大学　法文　四年　松竹圭輔）

『〝畏敬のこころ〟を身につけなくては日本国民にあらず』と題して御講義いただいた小田村先生のお話には、溢れる涙を禁じ得ませんでした。一高昭信会より始まる道統を今日まで受け継ぎ守り抜かれて来られた先生方の思いは如何ばかりでしょうか。戦い半ばにして倒れて逝かれた今は亡き四十六柱の方々を偲ばれてお話された先生のお言葉の一つ一つが今もなお忘れられません。そして未だ果たせぬ学風改革への思いを私達学生に訴えられたことを考えると、大学で学ぶ私達こそ、学風改革の第一線に立たねばならぬ使命を痛感致します。

更けし夜に露天の風呂で二人して語りしことを我れは忘れじ

もう一度新たな気持で御製に触れてゆかう

（九州大学　理　二年　白水重憲）

自分の心にこだはりがあった。班友と語るべき思ひさへ持てなかった。居づらかった。苦しかった。しかし、明治天皇、今上天皇の御製に触れたとき、やはり何か心ひかれるものがあった。感動させられるものがあった。やらなければならないと思った事にはやる気を出さなくてはならない。やる気を出すには、自分の心ひかれたところからやりはじめてみるしかない。もう一度新たな気持で天皇の御製に触れてゆかうと思ふ。

今よりは決意新たに学ばむと明治天皇の御集買ひ求めたり

先人の書をもっと読みたい

（長崎大学　教　二年　北村芳正）

班の人で悩んでいる人がいて、その悩みが僕の友人のそれとよく似ているのでなんとかしてあげようと思ったが、やはりうまくいかなかった。班の人とのつき合いをふりかえって

みると、所属するサークル員とのつき合いが思い出され、今迄本当に心を開いて話し合っていただろうか、相手の言葉を懸命に聞いていただろうか、と反省させられる。もう一つ今思うことは、先人の書をもっと読みたいということである。先人の心に触れて思いを新たにしたい。

大学に帰らむ時はもう一度心を開きて友と語らむ

天皇の御心に触れた思いがした

（亜細亜大学　法　三年　横山　徹）

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読では、日本人としての真の生きる道のようなものが自分の心の中で再確認されたような気がしました。歴代天皇方の御歌をよむ時、天皇の国民を思われる気持ちが痛切に感じられ、また天皇の御心に触れた思いがしてうれしく思いました。

全体感想自由発表にて

涙流し声をふるはせ語らるる友の姿を我は忘れじ

第十八班—男子学生—

精神を集中させて取り組んだ

（八幡大学　法　三年　阿波連　昇）

初参加の不安に加えて、旅の疲れ、睡眠不足が重なったが、合宿中は眠くとも、精神を緊張させていた。やはり、集

心配された雨もすっかりあがり≪戦時・平時を問はず祖国のために貴い生命を捧げられたすべての祖先の御霊≫に対する慰霊祭が夜のしじまの中、厳粛にとり行はれた。

団生活の良さがそこにあったからこそだと思います。皆で精神を集中させて一つのことに取り組む、そこに魂の触れ合いがあり、一体感を感じました。その感じたことを大学に持ち帰り、友とサークル活動を通じて実践し、高めていこうと思っています。

友らとの話はずみて胸底ゆしらずよろこびの湧き上りたり

明治の精神を知りたくなった

（山口大学　経　四年　中山直也）

私はこの合宿で、持って帰れないほど多くのことを学んだように思います。山田先生の御講義で、現代精神の蘇生のために、明治の精神の再検討が問われていることを教えられたが、明治の精神について何も知らない。現代に生きている人間、現代思想の影響を受けている人間とのつきあいはあっても、歴史の先人たち、明治の先人とのつきあいはほとんどない。レジメの資料を読んで、明治時代について深く知りたくなった。

み霊らを慰めまつらむと詠みゆかるる御歌の調べは高くひびきぬ

確かなものが生まれた

（早稲田大学　社会科学　四年　阿川信次）

初日、二日目と黙ってゐた友が、慰霊祭を体験し感激して「祖先の思ひを大学の友達にも伝へたい」と自ら語ってくれた。これをきっかけに班員の気持が一つにつながってゆくのを感じた。班員一人一人が力を出し合って四泊五日を過した今、僕等の中に確かなものが生まれたことを感じてゐる。その確かなものとは、輪読においては自分達の心を働かしあって一つの言葉、一つの文章を読み味はってゆくことの喜びであった。

小田村先生の御講義の中に「志を励まし合ふ友情」といふ言葉があったが、合宿後もここで学んだことを深めあふつきあひを実行してゆかうと思ふ。

先人の思ひ伝へてゆきたしと友は自ら語りたまひぬ

胸が熱くなった講義

（高千穂商科大学　商　二年　菅野大三）

この四泊五日の短い期間でしたが、とてもよい経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

四日目の小柳先生と小田村先生の御講義が一番印象に残りました。一番身近に感じられ、自分に訴えかけられているようで、胸が熱くなり震えがくるほどでした。特に小田村先生が『いのちささげて』という本を紹介され、「いのち」と語られたとき、胸が高まりました。一度自分のいのちを粗末にしたことがありますので、先生の話を聞いて「いのち」の大切さを考えさせられました。つきさされるような思いは、はじめての経験でした。

心なしかさみしさ見ゆる友どちの面（おもは）を見ればかなしくなりぬ

充実した時間をすごした

（熊本大学　工　二年　日野満司）

参加する前は、不安と重苦しい思いでいました。しかし、合宿がすすむにつれて、そんな思いはふっとんでしまいました。自分自身にとって、反省すべきこと、学ぶべきこと、考えなおさなければならないことが非常に多く出てきたからです。こんなに緊張し、本当に学問について考えたことはありませんでした。充実した時間をすごすことができ、非常にプラスになったと思います。

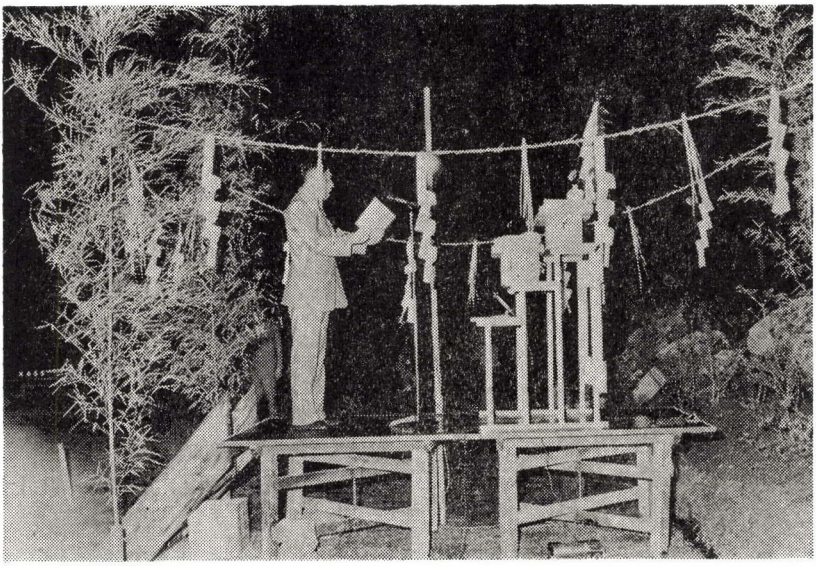
合宿で心かよはせし友達は顔輝やかせ別れゆくなり

慰霊祭で学んだ

（学習院大学　経　四年　飯島啓史）

すべての先生方の御講義が慰霊祭に集約されるのではないかと感じた。日本の国に生まれたありがたさをほんとうに知れば、国のために何かしよう、国民のために何かしようという気になると思います。そのように先人たちは私たちに生き方を教えられていると思います。慰霊祭の時に先人の和歌が拝誦されるのを聴いたとき、多くのことを学んだ。これからも自分の命をかけて生きてゆかれた先人の文章に学んでゆきたい。

学問をするとふことは先人の生きざま偲ぶこととわかりぬ



慰霊祭。夜久正雄先生が御製を拝誦される。

心に残った二つのこと

（九州大学　工　一年　高山佳久）

心に二つのことが強く残りました。その一つは和歌に対する考え方です。討論した班友の「和歌は美しい言葉を自分のものにする勉強になる」という言葉や、班別で相互批評をしたり、導入講義を聞いているうちに〝和歌のこころ〟がだんだんわかってきました。これからは、毎日自分を見つめて、感動したときは常に和歌をつくっていこうと思います。

あと一つは、日本の文化、日本人ということについて真剣に考えていきたいと思うようになったことです。

友どちの思ひ心に伝はりてあふるる涙おさへがたしも

第十九班―男子学生―

素直な心が人を動かす

（第一薬科大学　薬　二年　栄　謙師）

この合宿で、一番勉強になったのは、心の働かせ方です。今までの私は、イデオロギーというものにとらわれすぎていましたが、そんなものは、本当に次元の低いものであるということがわかりました。本当に人を動かすものは、素直な心で話した言葉だ、また、そういう心で人の言葉に耳をかたむけることにより、自分も感動を受け、そこに本当の友情というものが生まれるということがわかったのです。

この合宿での経験をこれからの生活に生かしていくよう、勉強にはげみたいと思っています。

友どちと思ひのままに語らへば己が心のすがしくなりぬ

これを契機に勉強したい

（鹿児島大学　法文　一年　樺山浩二）

輪読して、自分のものの感じ方の未熟さと読書量の少なさを痛烈に思った。友がいろいろな本に書かれている内容について話し合っているのに、それについて自分は何も意見をいうことができなかった。友と語らう楽しさを共に味わうことができずに非常にくやしさを感じました。

しかし「これを契機に勉強してやるぞと思う気持ちが起こればいいんだ」とおっしゃって下さった国文研の先生のお言葉は、僕の胸を強く打ちました。

来年の合宿こそは、本当に共に語らう楽しさというものを味わいたい、と思っています。

来年もあはんと言へば友どちの顔はやにはに喜びに満ちぬ
喜びとうらはらに思ふ参加せぬかの友にこそ思ひはつのらめ
必ずや来る年にこそかの友を合宿にはと切に思ひぬ

耳から離れない先生のお言葉

（名城大学　商　一年　安江邦夫）

学問についての話でも、雑談であっても、友達と素直な気

持ちを出して話し合うことの大切さ、素晴らしさと云うものが、おぼろげながらわかってまいりました。学べば学ぶほどに自分に執着していた自分を、友達への思いやりの足りない自分を痛感致しました。

長内先生が話された「友達を殺した敵を八裂きにせんと思う、その思いが解らなければ、本当の平和は解らない」というお言葉が、僕の耳から離れません。友達を思い、親を思い国家を思い、平和を本当に考えることのできる日本国民に僕はなりたい。

班員の親しき顔を思ひ出し山降りし後の日々を励まむ

学問への「燃ゆる思ひ」

（九州大学　法　四年　加藤多夏詩）

多少の衝突はあったが、無理なく班友と心懐を語り合へるやうになったことは嬉しかった。班友の素直な気持ちに僕が引っぱってもらったやうな気がする。

また、全体感想自由発表での長沢兄の言葉に、歴史を一筋に貫く日本の国柄が痛感せしめられ、目の覚まされる思いがした。

小柳先生のご講義を始めとして、学問への「燃ゆる思ひ」は、心中に確かにたたきつけられた。あとはそれを絶やさぬやう努めるのみである。

全体感想発表の折、長沢兄が明治天皇御製「外国にかばねさらしますらをの魂を都にけふかへるらむ」に就いて感想を述べしを聴きて

全参加者から短歌が提出されると国文研の先生方により、直ちに選歌作業が始まる。

打ちふるふ感動のままに兄は今思ひを述ぶべく壇上に立つ
「凱戦」にて国民のみな歓喜せし時にぞよまれしこの御製はも
凱戦す兵士ら見給ひ天皇はますらをの魂偲び給ひぬ
生き死にを越えてみ民の心はも天皇の御歌にすべられしとふ
とこしへに御製に生くるかいにしへゆ国をきづきしみ民の心は
友どちの述べし思ひにいまさらに御国につらなる思ひ湧き来も

「学問」をやりたい

（日本大学　経　二年　井口　崇）

このような合宿活動に参加したのは始めてでしたが、五日間をふりかえってみて、これほど満足のいく日々は、最近になかったなあとうれしく思っています。

一日目、二日目は本当に逃げ出したい思いだったのですが今の心は大変に落ちついています。そして、落ちつきながらも何か熱いかたまりが、私の胸の底の方からせきをきったかのようにあふれています。

これから「学問」というものをやってみようと思います。「学問」という言葉は、今まで私がいつも避けていた言葉だったのですが、今は「学問」をやりたいです。

まどろめど我れゆりさます熱き魂心ぞ知るかかの大和魂

歌を詠んでゆきたい

（佐賀大学　経　二年　大里富重）

この合宿で、心を働かせるということが非常に大事であるということがわかりました。その手段として歌を詠むことが本当に良いものだと感じました。是非実行したいという気持ちです。この合宿で心に感じたこと、学んだことを、今後の生活に是非生かしたいと思います。

思ふこと思ふがままに言ひし後は心の中のさはやかになりぬ

吉田松陰に感動した

（福岡大学　工　一年　橋口英生）

この合宿で、吉田松陰というすばらしい人物を知りました。御講義の後、班の皆と、松陰の文章を味わったのですが、松陰の言葉が、いかに人生の美しさ、すばらしさ、生きている有難さを教えてくれるかが感じられてきて、僕は言いようもないほどの感動を覚えました。

先輩の心こもりし言の葉も伝はりてこぬはつらきことなり

第二十班—男子学生—

班員の心が一つにつながった

（九州大学　医　三年　笠　普一朗）

班別討論・輪読では、最初は概念的な意見が中心でした。そんな時、班員の一人が日常生活の苦しみや疑問を話してくれました。皆がその友のことを真剣に考へ、その思ひをくみとらうと努力してくれ、それぞれの思ひを話してくれました。その時、皆の思ひはその友を中心にひとつにつながって

ゐる、さう思はれて、私は胸にこみあげる物を感じました。私達の人生にとって真に必要なのは此の体験であり、生きてゆく力は此処から生まれてくるのだと思はれてなりません。長内先生が和歌全体批評の中で「私達が学問を積みかさねていった時、その先は断崖かもしれない。その時、そこから立ち上がる力を与へてくれるのは友だ。」と言はれましたが、その御心が偲べたやうに思ひます。私は四月から此の合宿直前まで信和会の例会にもほとんど参加せず、勧誘もしていませんでした。今省みると、心がくぐもり、心に垣根をつくってゐたことが反省され、夜久先生の御講義の中で「不動の信念などといふものはない。私達は、自分の心が動かされた経験、その事実を信じてゆくしかないのです。」と言はれた言葉が胸に沁む思ひです。

全体感想発表の折に

つぎ〳〵に壇上にのぼりしみ友らは思ひのたけを語りてくれぬ
とつとつとつまりながらも胸ぬちの思ひのたけを語りし友あり
ことばでずたどひとことに「ありがたう」と涙うかべて語りてくれぬ
胸ぬちのもゆる思ひを語りたる言の葉きけば涙あふれく
言の葉の雄々しきしらべ我胸にひびきわたれり大波のごと

自分で学び、自分で苦しむことを知った

（鹿児島大学　工　一年　満丸　浩）

充実した生活を過すには、どのような心構えでとりくんだらよいのか悩んだことがありました。しかし、今、合宿教室を終え、何かしら解答を得られたような気がします。これか

翌日の和歌全体批評に間に合はせるため、国文研若手会員は深夜に及ぶまで、歌稿のガリ切りを行った。

らも数多くの壁にぶつかると思います。その時、一番必要なのは、自分で学び、自分で苦しまねばならないということを知りました。自分の心を開き、壁に立ち向かう姿勢はいつでも崩すまいと思います。私がこの合宿教室で得たものは数多い。しかし、現実社会へ帰ると、そこはきびしい。きびしいけれど、合宿教室で心に感じ学んだことを一つでも自分の生活に還元しようと思う。いや、しなければならないと思います。今、出発点に共に立った友よ。ともに歩もう。

わが胸にうつたへせまる同胞のすがしきまなこを我は忘れじ

合宿教室への誤解がとけた

（亜細亜大学　法　二年　松田　剛）

私は、大学の先輩にすすめられてこの合宿に参加したが、非常に嫌だった。右翼の考えを無理やり押しつけられそうな気がしたからです。何人もの先生方の御講義を聞いても、先の先入観はぬぐい消せませんでした。しかし、最終日の小田村先生の御講義を聞いて、この合宿教室に対する誤解をぬぐい去ることができ、非常に感銘を受けました。それに、班別の輪読や討論では、私達の発言に対し、班長自らの体験談や感じたことを語ってくれたこと、国文研の先生の心温かい御意見が身にしみました。これまで、感じる心・思う心を持たなかった私のこれからの人生は、これらのことを生かして変って行くと思います。又、班員みんなとの友情を深めていきたいと思います。

事思ふ心をつねに養へと語るがごとき霧島の山

己の世界が崩れ去った

（早稲田大学　文　一年　小森秀俊）

自分は物事を少しぐらいは知って居るのだろうと考えていました。そして、合宿を終えようとしている今、自分が何のことはない「ただの人間」であることを自覚しています。自分が持ってきた己の世界がガラガラと音を立てて崩れていくのがわかります。理論で構築されていた己の世界というものの虚しさ、それがいかに今までの時間を無駄にしていたか痛感されます。己の世界が崩れ去るのを感じるということは確かに辛く、認め難く、くやしいものです。でも、それでいいのだと思います。また、「ただの人間」から歩んでいけばいいのです。合宿は辛く疲れました。でも、また元気をとり戻したら、ゆっくりと手紙でも書こうと考えて居ります。

何得しか今は定かにわからねど日々生くうちに掴まむと思ふ
その思ひ掴みし時はきつとまたなつかしき友に書送りなむ

勉強の足りなさを知った

（多摩美術大学　油絵　二年　河内　実）

この合宿に参加して、今までの自分に対する深い反省と、これからの自分はもっと〝ガンバルゾ〟というのが今の気持ちです。何といっても自分は勉強が足りないと思いました。常に国民を思う天皇陛下の大御心・私情にたえて国に命を捧

げていった先輩の思いを憶念していくうちに、この国に生れたことがうれしく思われました。また、班員のみんなの真剣さと班長の実感こもった言葉のおかげで自分も真剣に合宿にとりくむことができたと思います。

いとまなく民思はるる大君の大御心のありがたきかな

第二十一班—男子学生—

生きた心に触れる事の重大さを知った

（高千穂商科大学　商　三年　三戸康俊）

今ふりかえってみると、友達の意見を聞き、それを何とか理解する事で精一杯であった。しかし、人の話しを聞き、その人の生きた心に触れる事の重大さ、すばらしさを知る事が出来、本当にうれしく思います。吉田松陰先生の生き方に触れ、天皇陛下のみ心に触れ、自分のしなければならない事に取りくんで行きたいと思う。

大勢の友と考へ語らへばいかなる難問も解けぬことなし

真実の気持ちが伝わってきた

（第一薬科大学　薬　一年　古井祐二）

初めて逢った人達と班をともにして語り合い、先生方の講義を聞いて班友と意見をぶつけ合いましたが、最初のうちはなかなか心に素直に入って来なかった。ただ自分の心の根底

合宿教室3日目まで降り続いてゐた雨もやうやく上がり、4日目の朝はすみきった空気を胸いっぱいに吸ひ、戸外で「朝の集ひ」を行ふことができた。

にあるものが打ちくだかれるような気がして、不安が増すばかりでした。それが班友の素直な心に触れて、又自分の感動した事を素直に心に取り入れて行こうと思ううちに、心のもやが少しやわらいでくるのがわかりました。そして最後の日の全体意見発表のみんなの意見を聞いていると、相手の事を思う気持ち、真実の気持ちというものが伝わってきて、自分もこれは信じてよいのだ、これを求めて行かなくては、という気持ちがふつふつと湧き起ってきた。

友どちのなみだながらに語らるる言の葉胸にひびきくるなり

「畏敬のこころ」を大切にしたい

（福岡大学　商　四年　柳沢　均）

吉田松陰先生の生き方に感動した。「書を読みて意中の人に遇ひ、意中の事を見る」という先人とのめぐり逢ひに、よろこびを確かめる姿に感動した。吉田松陰先生は、自分の思った事を信じ、その通りに突き進んだ人である。小田村先生の御講義の「畏敬のこころ」を身につけ、これをこれからの人生において大切にしていきたいと思う。

山宿に友と泊りて語らへば我が身も心も洗はるる思ひす

心に響く言葉

（九州大学　文　一年　渡辺健作）

多くのことを考えさせられた五日間であった。今でも得心のいかない御言葉など数多い。しかし、それは決して自分にとってマイナスではないと思う。むしろ、今まであまりに考えるべきことを考えず、目を向けねばいけないことに目を向けていないことに気付かされた。しかし、素直に感動させられたことも多い。真剣に発せられた言葉は必ずや心に響くということである。自分は是非そうした言葉が発せられるようになりたいと思う。また、班別討論を通じて、人と人との付き合いは、厳しいものであること、同時に暖かいものであることを感じた。これが友との交わりだと思った。

くさぐさの想ひを胸にたたへつつ決意新たに山を下らむ

素直なこころを大切にしたい

（山口大学　医　四年　小林俊三）

如何なる思想運動も、その本質に、闘ふ友の心との直きつながりがなければ、真実のそれではあり得ないと言ふことを痛感致しました。胸内のなつかしい様なこころを大切にしてゆきたいと、素直に思へる自分をうれしく思ひます。

小田村先生の御講義を聞きて

あたたかき大きこころのひろごりて吾をつつみゆくは慕はしきかな
はり満てる御声の魂の厳しさに心ふるへて身のひきしまりぬ
国守りの道を思想し実行しゆくが学徒のつとめなりとふ
国守るとひたに心を燃しゆく同志になれよと言ふが如くに

小田村先生のお言葉に心うたれた

（日本大学　法　二年　松田一朗）

小田村先生のお話の中に「君たち学生は、大学の勉強をし

ているだけではいけない。これからの日本の進むべき道を考えねばならない。」というお言葉があり、その言葉に強く感ずるものがありました。この合宿生活の感動を忘れることなく、日夜努力したいと思います。

みはるかす高千穂の峯ながめつつ我おもふ大和の国は神ゐます国

友の涙ながらの発表を聞いた

（九州大学　工　三年　弓立忠弘）

最後の全体所感発表の折に、友の涙ながらの発表を聞いてゐると僕も本当に嬉しくなった。班は違へども、御製や、聖徳太子、吉田松陰の御言葉に、そしてまた講義や友の言葉に各々が心を傾けて自分の生といふものを見つめていったからであらう。その時の思ひを打ち明け、友の言葉を良く聴く中に、ともに手をとりあって学んでゆくことのできる友の姿を見つけたからだと思ふ。全国各地に、言葉を正していかうとする友がゐることを思へば、僕も輪読や短歌を始めとした学問に一層うちこみたく思った。

小野吉宣先輩の所感発表をききて

来年もこの合宿をやりたしとふ先輩の御声に力こもれり

かずかずのさはりあるとも頑張るとふ先輩の御言葉あに忘れめや

我もただ今しの思ひを忘れずて輪読の輪を広げゆきなむ

第4日目午前、「やむを得ざる誠」と題して福岡県立修猷館高校教諭・小柳陽太郎先生が御講義された。

第二十二班—男子学生—

二つの課題

（神奈川大学　工　二年　里見裕之）

この合宿で二つの大きな問題を与えられたような気がします。一つは、「公」の自分と「私」の自分についてです。もう一つは、大学においての学問についてです。小田村先生の「大学で単位取得のことばかり考え、生きた学問を大学生は一体いつするのですか」という、力強い御言葉が今心に残っています。

二つとも、自分のこれからの課題だと思います。東京地区での輪読会を通して答えを出したいと思います。

友どちの帰り仕度くを見てゐると急に心のさびしくなりぬ
さよならと言ひ合ひながら帰りゆく友の面の晴ればれと見ゆ
我もまた気をひきしめんこの友に負けじと思ふ心のあれば

合宿にきただけのかいがあった

（九州大学　経　一年　片山洋徳）

霧島にきて多くの友と行動をともにし、またすばらしい講義を聞いたりすることによって、この合宿にきてよかった、きただけのかいがあったと思いました。合宿教室で学んだことは、今まで自分が知らなかった事実や、そのほかの重大なことをたくさん含んでいます。それらをすべて自分自身のものにしていくために、霧島をはなれてから、もう一度レジメを読み返してみようと思います。そして、この合宿で学んだことを、自分のこれからの大学生活における課題としていきたいと思います。

わづかなる期間にあれど心から話し合ひたる友をわすれじ

新鮮で大きな感動を受けた

（八幡大学　法経　四年　照屋全明）

一日一日が充実し、目が妙に冴え、友と語らいつつ床に入った日もありました。友が唇をかみしめ、一言一言、自分自身に言いきかせるように話したこと、また目に涙を浮かべて語る御製のこと、今思い出しても、一つ一つが新鮮で大きな感動です。友の熱い、まごころのこもった瞳でみつめられ、何度目頭が熱くなったことか——。互に心を開いて一つの書物、歌を読むすばらしさ。この世に生を受けて初めての体験です。

班別討論での高木先生のお話にも、ずいぶん心温まるものがありました。柔和なお顔でお話しなさる高木先生のお人柄が偲ばれます。機会がありましたら、またぜひ参加したいと思います。

大御歌を瞳うるませ読む友のあつき思ひに心うたるる

本当にわかることは大変なことだ

（山口大学　理　一年　神門誠司）

あっという間にすぎた合宿ですが、学ぶべき点がいろいろありました。まず、人と話をすることの難しさです。人が何を言いたいのか、またどんな気持ちで話しているのかを本当にわかるということは、とてもたいへんなことだと感じました。こちらが熱心に全精神を傾け、真心をこめて聞かなくては本当にわからないのだと痛感しました。また、このことは自分の言おうとすることや、自分の気持ちを正確に伝えることにもあてはまります。これまでぼくは、ともかく聞いたりしゃべったりしていたら、なんとか話ができると思っていました。強く反省しました。

それから、ぼくは学ぶということを、ずいぶんいいかげんにしていたようです。本を読むにしても文章を味わわなくてはならない。知的に理解することだけではない。著者の姿がみえ、声が聞こえなくてはならないなどと教えられたこと一つ一つが強く胸に響きました。先生方や先輩方が語りかけて下さった、あの熱意にこたえなくてはならないと決意しました。山を下っても、ここでうけた感動がうすれないようがんばります。

かがり火の燃えあがりたるその中にくっきりとうかぶ祭司の姿
おおと言ふ魂よせの声長々と暗き木立ちに消えてゆきたり

第4日目の午後、『畏敬の心を身につけなくては日本国民にあらず』と題され真剣なまなざしで、訴へかけられる小田村寅二郎先生。「学生の責務とは、国の運命を考へる事です」との御言葉は聞く者の心を強く打った。

根本にたち返る

（日本大学　法　二年　松田從郎）

以前、剣道の技にゆきづまったとき、基本に戻れと教えられました。この合宿で、古典を読みなさいとか、短歌を作りなさいと言われますが、たしかにそうだと感じました。古典を読み、学問の根本にたち返って伝統を知り、短歌を作り、人間の純粋な気持ちにたち返るという、人間としてあたりまえのことをわからせていただきました。

この合宿を終えて混濁した社会へ出ても、日本人の自覚を持ち、ゆきづまったときは日本人の自覚の根本にたち返って自分の悪いところ、おとっているところを直して成長してゆきたいと思います。

合宿できたへし心世の中でいざためしみんと決意固めぬ

みんなの中に入ってゆけた

（高千穂商科大学　商　一年　山本啓三）

第一日目は、自分が何を求めてここに来たのか、またこれから五日間どういうふうに過ごせばいいのか、全くわかりませんでした。しかし、時がたつにつれ、班の人たちが一つの問題に対して本当に心を開いて意見を出し、真剣に聞いているのがわかり、自分もみんなの中へ入っていけるようになりました。最初、ハードスケジュールだなと感じましたが、二日目からは何ともなく、充実した五日間が過ごせたと思います。この今の気持を、この場かぎりのものとせず、大学を出て社会に入ってからも、ずっとたいせつにしてゆきたいと思っています。

高千穂の河原に立ちてながむれどけぶりてみえず口おしきかな

第三十一班―女子学生―

かたくなな心がとけていった

（鹿児島大学　法文　一年　江口定子）

何日たっても、どうしても心で感じたそのままの素直な思いを言葉にできない自分が、とても辛く悲しかったけれど、四日目の班別討論の折に、そういう自分に耐えきれなくなってみんなの前でそのとおりのことを話しました。その時私は今まで自分で自分の心をすっかり閉ざしてしまっていたことに気付いたのです。班員の皆さんが心をこめて語ってくださる言葉に、私の中のかたくなな心がどんどんとけてゆくのを感じました。この合宿で本当にすばらしい友達にめぐりあえました。いつまでもこの友達を大切にしてゆきたいと思います。

み友らと共に過ごせし合宿もはや五日目となりにけるかな
来年もまた会ひませうと口々に語る友等に我もうなづく

美しいものを見続けていきたい

（福岡教育大学　教　四年　久間敏子）

友達を思う時、相手の心の中にはいり込んでその人の気持ちを思い遣ることができなかった自分、書物に接する時、それを書いた人の思いを憶念できなかった自分に大きくむち打たれるような毎日でした。今の感動をいつまでも持ち続けるためにも、崇高なものを求め、美しいものを見続けていきたいと思います。

友どちと一つの言葉に心寄せ語りてゆけば心なごみぬ
すなほなる友の姿を見てをれば心洗はるここちするなり
ふるさとに帰りてもなほこのきづな結びゆかんと誓ひ合ふなり

日本人が守り伝えてきた心を自分も身につけたい

（旭川女子短期大学　家政　二年　早坂栄理子）

小田村先生が最後に「この合宿では、一人の力ではわかりようもない事を多くの人のお蔭で知ることができた」と仰有ったとき、本当に人間は一人で生きてゆくものではないのだと思いました。そう思った時、合宿で先生方が語られたことや輪読で触れた文章、また班員の方々の言葉等々が頭の中を流れてパーッと広がる思いがしました。日本人が守り伝えてきたものが何かしら自分の中にもあるのだということに少し気付かせていただきました。そして自分も、守り伝えられたこの心を少しでも身につけてゆきたいと思っています。

和歌全体批評をされる長内俊平先生（電源開発㈱）。うまい歌より素直な歌をと前置きされ、一語一語心を込めて添削された。

すみわたる青きみ空の心もち山下りても吾れは忘れじ

新たな気持ちで成人として出発したい

（佐賀大学　教　二年　寺崎周子）

先生方の様々なお話は、私にとって驚きの連続でした。そして自分の考えの至らなさを痛感しました。今まで私は、言葉遊び・議論ゲームをしているだけで、言葉のずっと奥にある〝こころ〟に触れることを知らなかったようです。九月二十五日で二十歳になりますが、新たな気持ちで出発したいと思っています。

ひたすらに我こころぬち言ひたけれどことばにならず胸のつまりて

生命のこもった言葉に触れた

（宮崎大学　教　三年　三浦紀枝）

ご講義を通じて、数多くの生命のこもった言葉を与えて下さった先生方の心を本当にありがたく思いました。そして、その生命ある、温かい、思いのこめられた言葉は、やはり生きた、思いやりのある心でうけとめなくては、たちまち死んでしまうものだと気づきました。一体どれほどの言葉の生命を、私は自分の心の中で殺してしまったのだろうかと考えた時、今まで接してきた人達にすまない思いで一杯になりました。先生方のお話しに、これまで経験のない程心が動き、また先人が書き遺した言葉の中に、いまだに生き続けている生命のあることを知ることが出来ました。

来年もまたあふ契りかはしつつかよふ心はひとつなりけり

慰霊の心にうたれる

（鹿児島大学　教　四年　前之園登美子）

慰霊祭において御製拝誦される夜久先生が、御霊の前に深々と拝礼されるのを見て、先生はこんなにも深くいのちをささげていかれた人々のことをお心に留めておられるのだと思われて来て、その御姿に涙がこぼれました。他の先生方も、亡くなられた人々に思いを馳せつつご講義して下さいましたが、そのように、いのちをささげていかれた人々の思いをわが思いとし、胸にいだきつつこの合宿が行なわれていることがしみじみと思われました。そして、そういう数多くの御霊に見護られて私達が生かされていることがありがたく思われました。

慰霊祭にて夜久先生が御霊を拝み給ひし時
深々と拝礼されし師の御心深く思はれ涙こぼるる

第三十二班―女子学生―

合宿の前の私とは違う

（福岡教育大学　教　一年　野口ゆかり）

この五日間、多くの先生方の御講話をお聞きしたのですが、お話が難しくてよく理解できないところもたくさんありまし

た。でも先生方の熱意と真心はひしひしと感じました。まだ私自身日本人としての自覚をようやく持ち始めたという段階で、国のためとか天皇様のためとかいうほどの段階まで達していないのですが、この合宿に参加する前の私と現在の私は、どこかが違うと確信しています。この合宿を終えまして日常の生活に戻っても、これまでの周囲の物に対する感覚とは違った感覚で物事をみつめ、他人と接することができるような気がします。

せつせつと友への思ひ語りたるますらをの声のふるへて聞こゆ
ますらをの流す涙にわれもまたまぶたのあつくなりにけるかな

物に心を働かす努力

（福岡教育大学　教　四年　伊藤智恵子）

ともすれば失なってしまいがちな物事に対する謙虚さが、今の私に最も必要なことだと痛感しました。日本のすばらしさ、天皇陛下のすばらしさがわかっているつもりになって、揺り動かされた思いが生きていないのです。長内先生が「この年になっても、ものに心を働かす魂だけは持っているつもりだ」と力強く自信に満ちておっしゃられた御言葉に身を正されました。うそ偽りのない自分の心と、心を働かす努力から逃げようとする心との対決だと思います。何十年も、その心の対決を続けてこられた先生方の後に続いていきたいと思います。

長内先生の率直な御指摘は、先生らしいユーモアに溢れ、講義室は度々爆笑に湧いた。

この年になりてものに感ずる心をば持ちてをると師はのたまひぬ
年月をへてもなほもいそしまる師の御姿に吾が身正さる

一生を貫く学問をしたい

（明治学院大学　文　二年　上田厚子）

四泊五日間過してみて、様々な事を学ばせていただいたと実感しています。今までは、自分の心というものが解らなくて、他人の心も断片しか解らなかった。誠実な生き方をしたいという思いは強かったのですが、隣にいる友人の心も見ずに自分勝手に走って来たことを恥ずかしく思いました。先生方から、学問に対する姿勢、人に対する姿勢を、まざまざとあざやかに、押し迫る様な迫力でもって教えていただきました。今からは、謙虚に物事に当り、一生を貫く学問を、大学時代に、自分の内に確立したいと思います。この思いをここだけのものとしたくないので、今日から毎日、一首、歌を詠んでいくつもりです。来年の合宿には、友達とともに参加したいと思います。

心して心を磨き今日からはしきしまの道をわれも歩まむ

躍動する心を持ちたい

（大東文化大学　法　二年　吉田千賀子）

同じ様に生活をし、御講義を聞いても、他の友達と同じ様に感動できなく、一人の友達にすら今までの思いを語ることのできない自分が、くやしくてくやしくていたたまれない様な気持ちでした。どうして構える気持ちを捨てて素直な気持ちになれないのかと班別討論のたびに思いました。そういう中で、夜遅く、ふとんに入りながら自分の気持ちを少しだけ言ったとき、自分の気持ちに何の構えもなくなっているのに気がつきました。心を打ち明けて話すことの大切さ、そして何よりも、そういう仲間が全国各地にいるということがうれしくてたまりません。そして、心を常に働かせるには、やはり和歌をつくることだと思いました。和歌を詠もうと努力をすることによって、鋭敏に躍動する様な心を持ちたいと思います。

大学にきた意義何かととひし友に師の君の言葉文にしたたむ

胸襟を開いて話し合った

（青山学院大学　文　一年　西峯由紀）

班別討論の時など、他の人はみんなわかっていることなど愚かな質問ばかりして御迷惑をかけました。しかし班の皆さんや先生方が、必死になって言葉を探し、説明してくださった姿には感激しました。今までこれほど胸襟を開いて話し合ったことはありませんでした。私は、この合宿において〝生きるということ〟〝生きざま〟を教えられました。今まで気ばかり使って心を使っていなかった自分を反省する機会を得ることができました。先生方の謙虚なお姿、また表には出ない縁の下の力持ちになって働らいてくださった方々の御尽力を忘れてはならないと思います。

わからぬと涙にくるる我をみて今にわかるとさとす友どち

日本人としての心を知る

（大東文化大学　文　三年　平崎恵美）

私は、日本人としての心というものを知り、これから生きてゆく上での大切なことを学ばさせていただき、本当に感激いたしました。友だちの意見に対し、同情と理解でしか接してこなかったのではないかということが、本当に自分自身なさけなく思いました。心のかよいあいがあり、本気でぶつかり合ってゆくことが真の友情だとわかりました。又、学生として何をなすべきかを考えていなかった自分をふりかえり、ただ学校は通過する過程としてしか考えていなかったことが反省させられました。日本人としての心を持つことを知らずにいた私ですが、日本人としての感性を持ち、心をかよわすことのできる自分となりたいと思います。

はるかなる故郷の空を思ひつつ我友らとの別れ惜しみぬ

第三十三班—女子学生—

心豊かに生きてゆこう

（尚絅大学　文　二年　川田京子）

私と同じ年代の人達の感じ方が豊かであるのにおどろきました。私はいわゆる〝無感動人間〟みたいでした。感動はす

合宿教室も最後の夜をむかへた。一本の缶ビールに心地良く酔ひ、各班、各大学、各地区から出しものが出、楽しい夜の集ひとなった。

るにしても、すこしの感動だけであった私。たとえば、ある友人は、失恋した友のことを聞き、その場で涙をながしたのです。その心の深さに私はおどろきました。私も友のためそんな涙がながせたらと思ったのですけど、そういうわけにはいかなかったのです。今までの私は友達の悲しみを客観的にみすぎたみたいです。この合宿のおかげで少しは無感動人間にはならずにすみそうです。

友達とかたりあふ夜も最後だと思へばしらず悲しくなりぬ

素直な心で生きてゆこう

（西南学院大学　文　一年　一宮浩子）

この合宿に来て一番感じたことは、人と人との心のふれあいということです。人と人との心のふれあいというのはそれほど生やさしいことではありません。まず、相手に対して素直な気持ちで接することが難しいことです。また、相手を思う気持ちを持てたとしてもその気持ちが相手にわかってもらえるかどうかはもっと難しいことです。こうした難かしさを乗り越えなければ真の心のふれあいは求められないのだということがわかりました。

さ夜ふけて皆と歌ひし元冠の歌朗々と響きたりける

自分なりの言葉で語れた

（熊本大学　理　三年　村上佐代子）

人と話すということは、自分が試されるようで、とてもこわいことだと思います。けれど、つたなくても言葉にしなければ自分の思いを相手に伝えることは出来ないし、自分を成長させることも出来ません。それで、合宿中ご講義を聞いて感じたことや疑問に思ったことは、自分なりの言葉で班のみんなにぶつけたつもりです。それに対して、言葉数の差こそありますが、みんなから自分が受けた感動や思ったことなど素直な意見が出て、班別の討論や輪読等、楽しくやれました。

夜更けて背を流してくれし友どちのやさしき心に疲れもいえぬ

松陰先生の視線を感ずるようになりたい

（宮崎大学　農　二年　木下小夜子）

松陰先生についても、まだ「すごい」と思える処へ達してはいないことに気付いた。まだ遠い存在である。これから先、どこまで近付いてゆけるか、それこそ声が耳許できこえ、視線を感ずるようになるくらいまで努力して読んでいきたい。

吾のことを素直なりしと歌詠める君を思へば心苦しき

御製を読んで天皇の存在の確かさを感じた

（埼玉大学　教　一年　高木秀子）

明治天皇の御製は今まであちこちで目にしており、短歌としての素晴しさというものは、ある程度わかっていたのですが、それは心で受け止めていなかったので、短歌の根底に流れている深い思いにはふれることはできませんでした。しかし、読めば読む程、心で感じることは〝人間〟としての天皇

「全体意見発表」次々に登壇する参加者たちは、こみあげてくる思ひをうちつけに語った。

のお姿であり、国民のことを思われるお心でした。それはもう、天皇の存在の確かさを教えるものであり世間で言われる天皇制反対などということ以前のレベルの高い事なのだと痛感しました。

絶え間なく流れる川の音聞きて目ざめし朝の心さやけき

気持ちが充実している

（亜細亜大学　法　三年　小貫広子）

四泊五日の合宿で、身体はかなり疲れていますが、気持ちは充実しています。自分の考えを言葉や文字にして、人に理解してもらうことは、非常に難しいことですが、まごころをもって人に接すれば、多少の違いがあっても人に伝わるものだと思いました。討論や読書を通して、わからない時はわからないという素直な気持、わかるまで知ろうとする真摯な態度が大切だということがわかりました。今、自分が何をしなければならないかということをもう一度考えてみたいと思います。

言の葉はむづかしけれどまことなるこころをもちて学びゆきたし

大学生としてはつらつと真摯に生きてゆこう

（長崎大学　教　二年　北川雅子）

今回の合宿で一番心に響いたのは、小田村先生の御講義でした。小田村先生御自身、私たちにほとばしるがごとくの燃える思いをぶつけられた様に思った。今の私にあの先生の様な目の輝きがあるであろうか。正しい事を正しいと、虚偽を虚偽とはっきり言い放つ勇気と誇りと悲しみがあるであろうかと何度も何度も問いつづけた。確かに先生は私よりも人生経験は豊富であるし、御努力も測り及ばざるところではあるが、一方私には若さと鋭敏な感受性があるではないかと思う。そう思う時、今、在学している長大という場で、精一杯大学生としてはつらつと真摯に生きて行きたいと思う。

慰霊祭に参加して

御霊らの降り給ひしとのたまへば身のひきしまり頭下がりぬ
頭下げ目をとじをれば亡き祖父の笑みしみ顔浮かびくるなり
御霊鎮めの祭りにあれどなかなかに吾が心しも鎮まりてゆく
御祭の終りて夜空ながむれば星のすがしくかがやきてをり

第三十四班―女子学生―

素直な心持ちで人に接していこう

（長崎大学　教　三年　下釜ゆかり）

合宿教室に参加して、自分の心を偽らずに語ることのすばらしさがわかったように思います。自分を無にして人の心の内を知るまでにはまだ至りませんが、その大切さはしみじみと感じました。以前、高校時代の友達に、「外から眺めて居るだけじゃ駄目さ。自分からその中に入って行って、一緒に考えなくちゃ…。」と言われたことがありましたが、今回の合宿教室に参加し、いろいろな事を経験できて、その友だちの

言葉のすばらしさが今わかったように思います。素直な心持ちで家族や友達の心に接していこうと考えています。

友どちはまだ寝て居るに我れ一人窓辺に立てば空に月見ゆ

一番大事なことが疎かになってしまった

（福岡女子大学　文　二年　海山美津恵）

今、一番大事な、話される人の一語一語を大切にしながらその人の気持ちの中にはいっていこうとする努力が足りなかったように思われます。自分の思いを素直に思ったままを口に出す、ということの難しさを新たに感じて、何とか言えるようになりたい。またいろいろ話しかけて下さる方に応えたいとばかり思っていたようです。友だちの話を心を込めて聴く事が疎かになってしまっていたようです。合宿に初めて参加された班の人が、参加するのにとても不安だったとか、ハードスケジュールで疲れた、と、言いながらも一所懸命講義を聞き、感じられている姿を見て、私も去年の事を思い出しました。そして初参加で戸惑いつつも真剣に聴いて語ろうとした気持ちを忘れずに勉強していきたいと思います。

何事に向かふ時にもいきいきと活きたこころを持ち続けたし

人の思いを察することの難しさを体験した

（福岡教育大学　教　四年　平山とき子）

ひとつひとつの言葉の中には深い人の思いがあり、その思いを察する事がどんなにむずかしいことか痛切に体験しまし

カメラ・レポート　34

いよいよ閉会式。宝辺正久先生が「共に学んだ友らと、葉書一枚でもやりとりを続けてほしい」とかみしめるやうに語られた。

た。御講義を聞いて「よかった」と感動して言葉をはくのはとても簡単ですが、それを深めてどこに感じたかという事は自分でわかってもどう感じたかはなかなかわかりません。今迄自分の心の動きをしっかりみつめることなく古典にふれ和歌にふれてきたことがよくわかりました。日常の些細なことへの心づかいを大切にしてゆきたいと思います。

前園さんの青年発表の前日原稿を聞きし折

原稿をよみかへしつつ先輩はをかしいねてふことばかけくる
発表の原稿用紙にかきつづられしことばよんではをかしいねといふ
心こめひとことひとことこれでいいかてふことばかけくる発表ひかへて
何度なくかきかへらるる先輩を見れば頭の下がる思ひす
子らのため心つくされし先輩の心を思へば胸あつくなる

どれだけ力づけられたかわかりません

（熊本大学　教　三年　武藤慶子）

四泊五日の合宿の最後の日、この霧島に着いたころより思い出してみると、木内先生、小柳先生の御講義がずっと何日も前に聞いたことのように思われて、私の印象が薄かったのかとも考えていました。しかし、そんなはずはないと感じつつ、今日の朝、小田村先生の話の中でこの何日間、精神を集中していたからだということをきいて自分自身納得でき、又そのような体験をしたことをありがたいと思っています。合宿に来る前の普段の生活の中で人と人との付き合い方のむずかしさを感じていたのですが、班付の方や班長さん班員の方たちのやさしさにあふれる言葉に接していると自分までそんな気持になってきている事に気付きました。そんな人達はまるで自分と別格ではないだろうかとさえ思っていたのですが何日間か過すうち、それは自分で悩み努力しつづけているという話をきかされて私もそうした努力をしてゆこうと自分自身に誓いました。いのちというものは、たえずはたらきかけなければ死んでしまう。瞬間、瞬間というものが一生の別れであるが、しかし、あせってはいけない。何かをしようと思えばすぐやる事だ。また自分をだめだと思うとき、その自分を客観的に評価している自分こそ本当の自分だというそんな言葉にどれだけ力づけられたかわかりません。以上が班生活で感じたことです。最後に三十四班の班長さん班付きの先生達の暖い御指導に感謝します。

友どちを大切にする日々こそが君子の道との言葉ありがたし
真実ををしへたまひし師の言葉に胸内にあつき思ひこみあぐ

自分の意見を言うことができた

（亜細亜大学　経　二年　池野泰代）

先輩の勧めで何もわからず不安のまま参加した合宿であった。この合宿は、諸先生方の講義や輪読で感じたことを素直に話すことに意義があると毎年合宿に参加している先輩から教えてもらった。しかし、はじめのうち、不安だけで何も意見がでず、自分の勉強不足を悔いているばかりであった。三日目を過ぎ合宿の意義を自分自身把握できたとき、やっと自分の意見を言うことができた。何も言えないまま帰ったらき

っと後悔しただろうし、悪い印象だけが残ったと思う。また全く見知らぬ人の中で寝食を共にする経験を初めてもつことができた。わずか五日間であったが、私は自分なりに班員の人達と交流ができたと思っている。来年参加するか否かは別として、ここで知り合えた人達と手紙でも良いから、つき合えたらと考えている。最後に、小田村先生の言われた、「心の勉強」という言葉をいつも忘れず、大学生活を過していきたいと思っている。本当にどうもありがとうございました。

涙ぐみしきりに感謝する人を見ていつしか胸に何かがこみあぐ

真心を結び合わせるだけでいい

（鹿児島大学　教　二年　豆塚千寿子）

今年になってかねてより左翼思想を持っていると思われる教授の研究室にたずねていって話す経験をしました。大学一年の時より、自己をみつめ、日本という国をみつめ、心を動かした自分の姿をまことの姿であると、自分の内で言いきかせて生きてまいりましたが、どうしても私の思想に反ばくするものを身につけている人の存在が気にかかり、ついに行動に出たのであります。「天皇というお方は、日本になくてはならぬ御存在で、今の国内情況から推察して、天皇制は大変危機的情況にあるから、私はそれを憂えている」という旨を述べますと、「天皇制を残そうが残すまいが、そんなことはどちらでもいい。その時都合のいい方にいけばいいんだから」という言葉がかえってきました。私は天皇陛下に思いを

「また、会はう」と握手を交はし、再会を約す友。

寄せる一人の日本国民として、その言葉に怒りをおぼえたのですが、そのまえに「他人が何といおうとどう動こうと、自分はこうする」という信念をもって言われた言葉ではなかったから、なおさら腹立たしく感じられたのでした。ものごとを見つめるとき、自分の心を働かそうともせず、常に自分はどう生きるか、自分の全存在をかけて何をするかということから離れたところで考えている人が多い事は否定できません。この合宿は、お互いのまごころとまごころを結び合せるだけでいいのです。これからも、私はそれを続けていくだけなのです。そして、そこに日本人として進みゆくべき定められた道があると確信します。

まごころを結び合はせるこの道を心みがきつ学びゆきたし

第四十一班—社会人班—

長内先生の御姿が印象深かった

（中村学園女子高等学校　瀬口憲二　28歳）

初めての合宿研修で多少のとまどいがあったものの、諸先生方のたいへん熱意ある御講義で、心の中が高ぶってくる思いにかられました。その中で、和歌の批評をしていただいた長内先生の印象が心の中に焼きついています。先生の真心あふれる、やさしい、そして、何もかざりけのない人がらと、一言一言その作者の気持ちになって正してゆかれる御姿から、本当に、先生御自身の生き方が偲ばれました。又、輪読会は楽しい、時間を越えた一時でした。班付の松吉先生を中心に初めて会った人達と、真剣に討論をかわしていろいろな意見を出し合うことができたことは、ただうれしい限りです。社会に出ると、なかなか真剣に、かつ、互いに率直に意見を述べあうこともなくなるのですが、かつての学生時代の姿のまま、初心者のつもりで付き合うことができ、本当に悔いのない四泊五日でした。それから、少し残念だったのは、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の御本について、もっと多くのことを聞かせていただきたかったということです。今後機会あれば、この御本をひらいて、どのように太子が考えていたか偲んで参りたいと思います。

若き日の姿そのまゝうちつけに友と語れば楽しかりけり

日本をすばらしい国に育てるには

（熊本市立白坪小学校　佐野昭二　27歳）

四泊五日の合宿教室にはじめて参加して、今は、「ほんとうによかった。」という気持ちでいっぱいです。各大学の先生方や先輩方のお話を聞くにつれ、日本の国をすばらしい国に育て上げるには、今の日本の青年はもっとしっかりした生き方をしなければならないと思いました。現在の世の中を見回すとき、そこには、「退廃」と「偏見」が満ち満ちています。その中で、生きる「精神的なよりどころ」を与えてくれたのが本合宿であったと思います。

とこしへに大和の心忘れまじと涙流して誓ひたるかな

真心を持った人達の生き様を学んだ

（出光興産㈱中央訓練所　長田武士　35歳）

四泊五日の間、先生方より、「真心」を持った人達の生き様を学ばせて頂きました。又、班別討論では、先生方の御講義をさらに深く堀り下げて話し合い、私自身の感動を確めることができました。今も私の心の中に残っている先生方の姿に、少しでも近づいてゆきたいと思います。先生のお姿に圧倒され、萎縮してしまうことなく、少しづつでも努力し積み重ねて参りたいと思います。

学びたる日本の心今よりは伝へ広めん我が友どもへ

得るところ大であった

（高田工業所㈱　住田静昭　28歳）

今心静かに、この四泊五日の合宿研修を振り返ってみて、私自身得るところ大でありました。私自身を顧みて、一企業人として、社会にどれ程尽くせるかということについては、余り目を向けていなかった様に思います。この合宿に参加して、これからの日本、又、日本人はどうなければならないか、私自身の進むべき方向はどうなければならないか、どうありたいか、という熱い純粋な思いが、湧き起っております。会社に戻りましても、「日本人の心」を大切にして、会社の皆とも接してゆきたいと思います。

臨時便のバスで山を降りる友を見送る先輩たち。

霞立つ高千穂河原に友と立ち国の行く末に思ひはせるも

後輩達の姿に目頭が熱くなった

（出光興産㈱中夫訓練所　吉田彰秀　35歳）

四泊五日のこの研修に参加し、大へん有意義に過ごすことができ、感謝致します。講師の先生方の、ほとばしる熱気、班内での輪読・討論等、本当に充実したものでした。特に、青年研究発表を聞き、私より年少の後輩が、周囲の無理解を乗り越えて闘っている姿には、思わず目頭が熱くなりました。しかし、ただ感激に耽っている訳にはゆきません。職場に、家庭に、この私の思いを実践してゆかねばと、心に期しています。私もこれから、新入社員教育の担当を致しますが、合宿の光景を是非、語り伝えたいと思います。

坂口氏の青年体験発表を聞いて

信じたる道を歩みし後輩の声の強きに苦労思ほゆ
勇気持ち信じる道を歩みゆけばいかなさはりも突破するとふ
後輩の歩みし道に引きくらべ我が歩みしはなんと易きか
我も又今日より先は勇気持ち信じる道を進みていかん

学生諸兄のエネルギーに魅了された

（熊本県八代市立第二中学校　高野寿賀雄　46歳）

今回のように初日から終日まで、感動の連続であった研修は経験したことがない。四泊五日が、あっという間に過ぎてしまった。講義の内容もさることながら、若き学生諸君の溢れるエネルギーに魅了され、圧倒されたことが私をこんな思いにさせたのであろう。一つのテーマに取り組み、苦しみ、悩み、友と語る中に自分を発見したときの喜びは、何物にも変え難いものがある。ただ一言、学生諸君に申し上げたい。現実はきびしい。卒業し、一旦、社会に出ると、なかなか思うようにはいかない。私は一人の教師として、諸兄の思いを社会に出てからも燃やし続けてほしいと願うのである。

再びは語ることなき友がきと語りし今宵とはに忘れじ

第四十二班—社会人班—

涙を禁ずることができなかった

（出光興産㈱中央訓練所　中溝英夫　30歳）

全体所感発表を聞きながら、幾人かの人の発表に涙が出るのを禁ずることができなかった。果して、自分の学生時代に自分の考えを自分の言葉で話したことがあっただろうか。常に、人の考えの受け売りではなかっただろうか。そう考えると、この合宿に来て、涙ながらに話す彼らがとても美しく思えた。

松陰の誠を心の糧とせむ雨の降る日も風の吹く日も

感性の鋭い児童を育ててゆきたい

（八代市立植柳小学校　金井昌康　43歳）

四泊五日間、学生・青年たちと共に語り、共に討論し合い

自己研讃に努めてきたが、それは、今まで経験しなかった密度の濃い、次元の高い内容であった。特に、先生方の御講義は印象深く、学生時代に聞いたことのない熱弁と、激しい口調で語られるその姿には、胸を打たれた。今後、学校という職場に戻って児童の指導にあたることになるが、福沢諭吉の「恰も蜂尾の刺蠡に触るるが如く、心身共に顕敏にして、…」という言葉の如く、感性の鋭い児童を育ててゆくよう努めてゆきたいと思う。

小田村先生の御講義を聞きて
世をうれひ声大にして語らるる師の言の葉に涙流るる

「如何に生きるか」を教えられた

（出光興産㈱兵庫製油所　向井茂　29歳）

今回の合宿を通じ、「如何に生きるか」ということについて、大変深く深くお教え頂きました。特に、吉田松陰の生き様には、深く感動致しました。又、天照大御神より脈々と流れる日本人の心を知り、日本人としての喜びを身を持って感ずることができました。

雲海の上にそびえる桜島雄々しき姿ゆめ忘れまじ

松陰の生き方に学んだ

（中村学園女子高等学校　伊野直登　27歳）

諸先生方の御講義は、私にとってかなり難しい内容のものでした。また、輪読の場では、なかなか自分の意見が出せず、かなり苦慮しました。けれども、御講義の中では、小柳先生、小田村先生による吉田松陰の生き方についての御話が、特に印象に残りました。国を思う気持ちから国禁を犯しついには、獄中生活を送ることになりながらも、消えることのない勉学の精神には、教職にたずさわる私にとって、実に学ぶものが多くありました。

霧島に集ひしことを心にとめ思ひ新たに歩いてゆかん

新しい力が湧いてきた

（福岡県立三池高等学校　青柳正文　28歳）

昨今の教育界の混乱は、まことにひどいものです。生徒の純粋な心が歪んでゆく傾向を眼のあたりにして、本当にくやしく思います。その心の中から湧き上がってくる思いを持ち続けることが、歴史の中に自分が生きていることの証しではないかと、志賀運営委員長が話されたことは実に有難いものでした。また、坂口先生、前園先生のお話も、教職という同じ現場に居る者として、その苦しみや嬉しさがよく解りました。このような先生方がいらっしゃるのを知り、私自身にとって、大きな励げみとなりました。合宿を終える今、何か新しい力が湧いてきたような気がしております。

志賀先生のお話をききて
わが先輩の心より出づ言の葉に胸たかまりて学校思ほゆ

第四十三班—社会人班—

生き方に転換を与えてくれた

（八代市立八代小学校　久保貴資　44歳）

身も心も苦しい五日間ではあったが、人間として最も根源となる思想が培われて大変有意義であった。このようなハードスケジュールに、合宿教室に集まった学生・社会人は、よく音をあげず頑張っている態度に接し、日本の行く末は健在なりの感を強く持った。たのもしい限りである。皆の姿は、私自身の生き方に大きな転換を与えてくれたように思う。また、先生方の講義では、秀れた歴史上の人物に接する機会を与えて下さり、この上ない喜びである。合宿中、私の心にふれた数々の偉人について、これから、もっと追求して、自分の心を鍛えてゆきたいと存じます。

心こめし友の言葉に涙して別れの言葉のつまりて出でず

思わず涙がこぼれた

（出光興産㈱兵庫製油所　南　嘉高　34歳）

合宿二日目の青年研究発表で、坂口君、前園さんの力強い発表を聞いて、真剣に日本を考え、日本人の心を伝える努力をしている仲間がいるのだなあと、深い感激におそわれ、思わず涙がこぼれてきた。又、合宿最後の全体所感発表で、学生達が涙を流しながら真剣に自分の感じたことを述べる姿を拝見していて、自分も何か熱いものが込み上げてきた。学校も、生まれた所も、住んでいる所も違う参加者が、たった四泊五日の合宿で、こうも心を通わせることができるのだろうかと、しみじみ思った。会社に戻ってからも、合宿教室で体験したことを、心開いて仲間に話しかけてゆきたい。

いよよ今日は別るる日なりとみ友らの寝顔を見ればさびしさこみあぐ

言葉に自分自身が表はれてゐない

（倉敷市立児島高等学校　小坂博通　25歳）

今年再び合宿教室に参加し、自分の言葉に概念的なところがあったと強く感じました。それは、私の歌によく表はれてをり、諸兄から注意されて初めて気付いたことであります。自分の感動・実感が素直に表はれて来ないのです。自分の言葉に自分自身が表はれてゐないのです。私は、何か重大なところに気付かされた思ひがしてゐます。日頃、祖国のことを思ってゐると思ってゐながら、大事なところで自分自身を他へ追いやってゐたのではないかと思はれてなりません。

大君の大御心のしのばれてしみじみうれし大御歌かも

感ずる心を大切にしたい

（出光興産㈱中央訓練所　甲斐博隆　29歳）

先生方の御講義を聴かせていただき、非常に勉強になったのは勿論でありますが、それよりも、先生方の熱気こもるお

話しぶり、若い人達の発表の姿、国文研の方々のこの合宿に寄せる情熱を拝見させていただき、本当にすばらしいと感じました。私にとって、今一番大切にしなければならないことは、物にふれ、書にふれ、人にふれ、その時に感じた思いを素直に受けとめ、大事にしてゆくことだと思いました。すぐ再び、日常生活に入ってゆきますが、合宿で感じた新鮮な思いを持続できるよう頑張りたいと思います。

敷島の心学びし合宿も終へて心のはればれとしぬ

教師のもつべきものを教わった

（八代市立二見小学校　加来研一　26歳）

初めのうちは気が重く、このままで自分の中に残るものがあるのだろうかと、不安な毎日であった。しかし、小柳先生小田村先生の御講義、青年研究発表を拝聴するうちに、教師の持つべきもの、大切にしなければならないものを感じとらざるにはいられなくなってきた。教師生活三年目に入り、生徒とどう付き合い、どう教育していったらよいかと悩んでいただけに、御講義の感激は深かった。子供は生きている、その生きた子供には、生身の人間どうしがぶつかり合うような、生きた教育が必要である、知識だけを教えたのでは、とても教育はなりたたない、ということを教えていただいたような気がする。

涙して語りゆく後輩（とも）の言の葉にわが心うちあつくなりゆく

第四十四班―社会人―

心を鍛える道を真剣に考えたい

（鹿児島県揖宿郡頴娃町立青戸小学校講師　前園美代子　21歳）

聖徳太子や吉田松陰など、先人の学問に対する姿勢と生き方のすばらしさを知り、今まで自分の心の中に眠っていたものが強くゆさぶられ、よび起されたような気がします。『日本への回帰第14集』の小林秀雄先生、小田村先生のお言葉はまさしくこのことだと思いました。特に、吉田松陰が狭い獄中で、ありとあらゆる書物を読みほしたり、日本人としての生き方を諭すところなど松陰の学問に対する姿勢がいかに真剣であったかが、ひしひしと伝わってきました。と同時に、自分の学問に対する姿勢というものが、なんと薄っぺらなものであったかと痛感させられます。小田村先生の「心を鍛える場は、自分でつくらなければならない。」という言葉が心に強く残っています。心を知るのは心であり、その心を豊かにする道、心を鍛える道を、私たちはもっと真剣に考えてゆかなければいけないと思います。初めての参加で、いろいろな体験をさせていただきました。とりわけ和歌創作は、今まで苦に思っていたのが、今回は心がはずんでいたような気がします。これからも折にふれ、自分の心を素直に見つめ、詠んで行きたいと思います。

小田村先生の講話を聞いて

師の君の情熱あふる言の葉は我が魂をゆさぶり起こしぬ
師の君の生きた言葉にふるるとき我が魂は清められたり
師の君の日の本憂ふ御心を偲びて我も進みゆきなむ

真心と言葉の種をまいた

（熊本市役所　林ヒロ子　28歳）

心の畑に長い間茂ってゐた雑草を刈り、耕し、真心と言葉の種をまきました。これから、みづ〳〵しい芽を伸すやう、又、決して枯すことのないやう、大自然の空気を吸はせ、水をやり肥料を与へ育ててゆきます。

時経てば言葉少なき友どちもたかまる思ひ語りてくれぬ
甲高くひぐらしの声山々にひびきわたれり霧島の里
黒々と色をかへゆく山々にひぐらしの声しげくなりゆく

未熟さを痛感した

（鹿児島県揖宿郡頴娃町立青戸小学校教諭　徳永千草　22歳）

今回が初めてで、興味と不安を持ちながら複雑な気持ちで参加しましたが、諸先生方の熱心なお話、班員の方々の意見を聞くうちに、自分の考えの未熟さを痛感しました。今までをふり返ってみると、自分は上辺だけの人間ではなかっただろうかと思われます。心を開いて語り合い、自分がこれまで気づかなかったものを見つけ出し、うれしく思います。これからは、率直に自分の意見を告げ、一人でも多くの友を得たいと思うし、ここで体験したことを十分生かしていこうと思います。

友どちと共に過ごししこの日々を山下りても我は忘れじ
率直に自分の思ひを表はせば友も笑顔で答へたりける

見学参加者

日本を護っていこうと念じた

（亜細亜大学広報室　志賀雅一　23歳）

歴史とは何か。また、自分が今存在しているということは一体、どういうことなのか。私は、この合宿で、このようなことを考えさせられた。私が曾て、小、中、高校と学んできた歴史というものは、単なる表面的な、概念的なことにしか過ぎなかった。例えば、聖徳太子は何年に生まれ、何年に逝去されるまでどういうことをなさったか。ただこれだけを覚えるのみであった。その人物の人柄、思想、時代的背景を深く追求することをやらなかったのである。怠ったと言った方が妥当かもしれない。そんな私が、小田村先生のお話や、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、出征の折に詠まれた短歌などに触れることによって、歴史の内面的な、深層なる部分に近づけたことは何よりも嬉しいことである。日本の長い歴史の上に今がある。自分がある。そう思えた時、慰霊祭の時の「海ゆかば」を力一杯歌ったのである。その時の私にとってできることは、「これしかない」と感じたからである。

これから先、私の人生に何があるか分からない。日本もどうなるか分からない。しかし、どんなことがあっても、日本の長い歴史、一朝一夕にできたわけでないこの日本の国を心から護って行こうと念じた次第である。学ぶことの多かったこの合宿に感謝したい。

若人の涙にふるへるその声に目頭熱く我なりにけり

真剣に心を開いて語る姿に感動した

（亜細亜大学教務部　荒木邦夫　31歳）

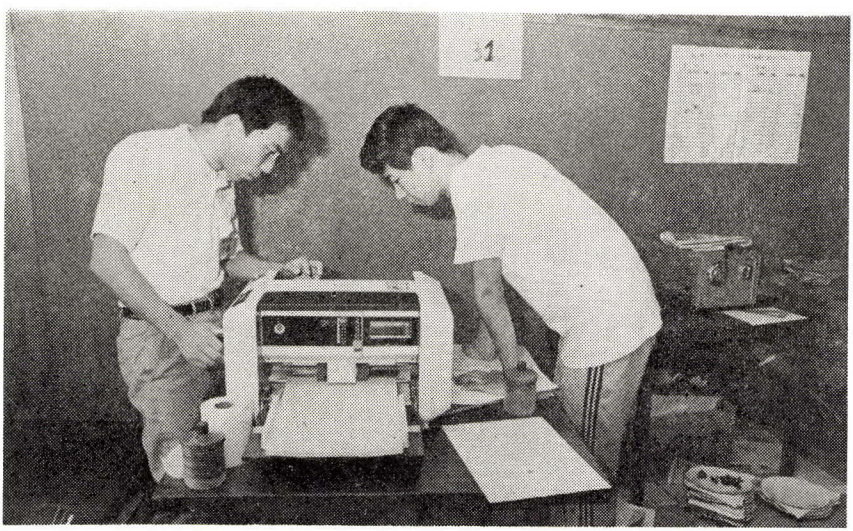
国を想う心、友を想う心のすばらしさを改めて知った。真剣に心を打ち開けて語る姿には目頭が熱くなり、涙のこぼれる事がしばしばあった。「聰慧利根。通敏易悟。」とは人間としてのあるいは学問を学ぼうとしている者の基礎だと思う。人の真剣に述べる事を真剣に聞きとり、その心を思いやる。文章に書けば簡単であるが、なかなか実行できないのが、今までの私であった。皆の真剣に心を開いて発言する言葉の一つ一つに感動した。これほどすばらしい感動は今までに経験したことがなかった。

君思ふ明治の人の清かりし心に触れて目頭熱き

事務局—高校生の感想文

歌稿や資料の印刷をはじめとしてこの合宿を蔭で支へてくれた事務手伝ひの高校生諸君も走り書きの感想文を残してくれました。

学生・社会人の参加者とともに緊張した合宿生活を過した姿が行間にあふれてゐますので、特に掲載しました。



事務局―高校生―

とても良い勉強になった

（東京都立蒲田高校　二年　松吉基光）

自分は二年目で、仕事の要点を忘れなかったので、滞りなく順調に、仕事が進みました。事務局のスピーカーで聞きながらでしたが、先生方のお話に深くうなずいてみたり、自分なりに考えてみたりして、とても良い勉強になりました。

天草へ帰り行くてふ女子たちと別れた後に夕立降りけり
夕立が激しく降りて霧かかる二人の友はどこを行くかな

大学生になったらもう一度来たい

（熊本県立人吉高校　二年　那須龍治）

今回は、事務班として参加したわけだが、アッという間に五日間が過ぎてしまったように思える。今ふり返ってみると楽しいことばかりであった。一つは、事務の仕事を、事務班でない方々とともに協力し合ってやりとげたこと。本当に手伝ってくださった方々に感謝したい。もう一つは、食事の時や、大浴場で、大学生の人と色々なことを語り合い、多くの人々と知り合いになれたことはすばらしいことだと思う。ただ残念なのは、もう別れなければならないことだ。しかし、来てよかった。本当に来てよかった。僕が大学生になったら是非もう一度来たいと思う。

友どちのぬくもり伝へる朝風呂で別れををしみ長く語らふ

真剣な姿はすばらしい

（熊本県立人吉高校　二年　板野一生）

四泊五日の合宿教室が大変早く過ぎてしまったような感じがした。仕事はそんなにきついことはなかったけれど、朝が早かったので、少しねむいだけであった。でも一つの仕事が終った時には、満足感というか、充実感のようなものが感じられた。又、仕事をしていて講義なども聞くことができて、大変勉強になった。それに大学生や、社会人の方が、何事にも、真剣に、一所懸命取り組んでおられる姿は、本当に良いものだと思った。それに僕達に対して、大学生や社会人の方が、「ごくろうさん」と言われた事が本当にうれしかった。あまり役に立たなかったけれど、僕としては頑張ってやった。

けふまでのにぎあふ霧島後にして我は帰らんいざ故郷へ
別れてもまた会ふことを祈りつつ笑顔で送らん遠方の友

友を得た

（熊本県立人吉高校　二年　小林敏郎）

私は事務手伝いとしてこの霧島に来た。四泊五日の合宿であったが、大変きついものであった。しかし私は二つの利益を得ることができた。その一つはお金であり、もう一つは友である。もちろん友達の方がずっと大事である。この合宿

は、私の人生に何らかの影響を与えてくれたのである。

幾日か枕並べて寝た友と別るる時ぞ空も晴れゆく
故郷へ帰ると思へばうれしけれど友と別るることの悲しき
またいつかあはむといひし友の目にながれし涙を忘れられずも

合宿中に創作された「和歌詠草」

——しきしまのみち——

高千穂河原に於ける和歌創作風景

和歌創作について

昨今、青少年、特に小・中・高校生の犯罪や、自殺が、新聞紙上を賑はせてゐます。それは、かつてのやうに、貧困や家庭的欠陥に原因があるのではなく、むしろ、さうした点とは全く無関係に、表面的には、ほんの些細なことが、少年少女達を暴走させてゐるやうです。しかし、この現象の根本的要因をさぐってゆくと、どうも現在の学校教育や家庭教育における根本的欠陥――情操教育の欠落に行きつくやうに思へるのです。

翻って、戦後の教育界は、果たして、〝心を磨くこと〟や〝心を鍛へること〟や〝心を通はすこと〟等について、本気になってとり組んだことが、あったでせうか。日本の少年少女が、生来具備してゐる筈の「純粋な心の働き」が、健全に育くまれるどころか、むしろ知育偏重の義務教育過程の中で、蝕まれてきてゐるのではないかと、思はずにはゐられません。

今回で、二十四回を数へるこの「合宿教室」では、初回より一貫して、すべての参加者が必らず和歌を創作し、そのあとその作品を相互に批評するといふ行事を、大切な柱として、日程の中に折り込んで参りました。そもそも、日本人は、千数百年の昔から（例へば『万葉集』に見られるやうに）あらゆる身分階層の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を超えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを率直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に和歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば和歌創作の過程で、「厳しい心の鍛練」が行はれる訳です。そこで、私達の祖先は、和歌を詠むことを人生の修業の一つの手だてと考へて、〝しきしまの道〟と呼んできました。日本人は、〝和歌を歌ひ交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き――情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。

さて、和歌創作の導入講義は、合宿の第三日目に国民文化研究会の青山直幸氏によって行はれました。自分の作歌体験や合宿参加学生の歌、寺尾博之さんの歌、正岡子規の歌等を紹介しながら、和歌創作の心構へ、創作上の留意点を述べました。中でも、さきの戦争の直後、福岡市郊外の油山で割腹自刃された寺尾博之さんの次の和歌は、参加者に強い感銘を与へました。

霧島温泉にて

再びは見る日もあらじきりしまに友と眺むる月の影かな

ゆけむりの上に輝く月かげにうせにし友をしのぶ夜かな

再びはくる日もあらじ霧島のいでゆに遊びし夜忘れめや
友どちと露天の風呂にひたりつつ木の間がくれの月を見るかな
友どちのねがほを見つつせせらぎの音聞きをればうづまく我が胸
つつがなくあれば今夜もともどもに遊びしものと友を恋ふかな
きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ

この歌は、寺尾さんが学徒出陣なさる直前に、数人の心知る友達と、霧島温泉を訪ねて来られ、その友らと、心ゆくまで名残りを惜しまれた際の歌です。国のために命を捧げる決意と、友らとの別離といふ人生の悲しい現実をぢっと心の中で、かみしめてゐる作者の思ひが、切々と伝はってくるやうです。

このあと、参加者一同は、バスを列ねて、霧島神宮に参拝、更に高千穂河原を散策し、第一回目の和歌創作を行ったのです。散策の途中、あるひは、帰った後、宿舎内で「できない、できない」と言葉を交はしながらも、精一杯に自己の感動をうたひ上げようとしてゐる学生達の姿が目につきました。和歌は、その夜の内に選歌され、事務局お手伝ひの高校生達によって、プリント三十数枚にも及ぶ歌稿が印刷されました。翌四日目の夜、その歌稿をもとに、長内俊平先生によって「和歌全体批評」が行はれました。先生は、十数首を例に取り上げられ、作者の心懐にそって、字句や表現の不正確さを正してゆかれました。時に笑ひが湧き上がるなごやかな雰囲気の中にも、作者の心の中に、全身を以って飛びこんでゆかうとされる先生の御姿勢は、強烈な印象となって、参加者の心に残ったのでした。先生が最後に言はれた「良い歌をたくさん声に出して詠みなさい。」といふ言葉は、参加者にとって貴重な指針となりました。

つづいて、各班ごとに班員の作品について「相互批評」が行はれました。一人の班員の作品を、班員全員が心を傾けながら検討しました。この体験の中で、参加者は、自己の思ひをありのままに表現することの難しさ、友の思ひを自己の心の中に蘇らせ、心を通はせ合ふことの難しさを共に痛感したのです。と同時に、今まで自己の心のどこかにあったこだはりや、てらひが、不思議にも氷解して、自己の心が開かれてゆくのを覚えたのでした。

（付記）ここに集録するにあたっては、ある程度の添削を加へ、仮名遣ひを正しました。

和歌詠草（しきしまのみち　合宿第一回目の創作作品）

古思ほゆ

第一班

霧島神宮にて

大阪経済法科大法二　陣内道也

霧島の木々に囲まれし神社からしんしんとしたる静けさをうく

中央大法四　馬淵雅宣

縁ありて同じグループになりし友と宮居の前で写真とりたり

九州大経一　井上総一郎

「まあ、きれい。」ガイドの声に振向けばはるかに浮かぶ開聞の山

亜細亜大経一　高橋康

深緑の苔の厚さに古の人の祈りの深さを偲ぶ

九州大経四　奈良崎修二

合宿に集ひし友らに代はりてぞ神のみ前に玉ぐしささぐ

我にあはせ友皆の打つかしは手の音森内に響きわたれり

福岡教育大教一　土屋健一

我れよりも優れまされる友の前におぼつかなきこと言ふ吾悲しき

第二班

西南学院大文一　重博巳

写真とる友のカメラにポーズとりおどける友のかほおもしろし

鹿児島大教二　上原敏彦

かなかなと杉のこずゑで鳴くひぐらし寝ころび聞けば眠気さそはる

中村学園大家政一　井上勇

深緑の高千穂山に比ぶれば小さきものよ人の姿は

露島神宮址にて

福岡大経三　大山輝昭

見渡せば霧たなびきて青々と繁りし杉の山々広ごる

ホテルの窓から夕焼けを眺めて

九州大教養二　公門泰博

柿色に染まりたりける夕空に真白き煙の立ちのぼりたり

早稲田大理工一　五木田茂也

静かなる赤松林で語りかくる友のひとみは輝きにけり

亜細亜大法二　谷萩香織

真緑の木々のこずゑにかかりたる静けき霧に

第三班

熊本工大工二　颯々野幸二

こけのむす石垣によりて語りをれば思ひもよらずうぐひすの声聞ゆ

九州大工一　甲斐郁人

高千穂の峰散策のとき詠める

先をゆく友に負けじと我もまた歯をくひしばりのぼりゆくなり

島根大文理三　和田正人

班別討論のとき長内先生の御話を聴きて

本当の友だちをつくることこそが国を愛することと語りぬ

班の友らと「螢の光」を歌ひて

友どもと「螢の光」歌ふとき胸のふるふを感じたりけり

熊本大医四　坂口守

輪読の折に

沈黙のしばしの後に聞くことばそのするどさにおどろかさるる

高崎経済大経三　清野幸三

答ふべく「つまり、つまり…。」とまるまりし友を励ます心の内に

八幡大法四　照　屋　唯　善

下りゆくバスの窓から遠方に桜島山あざやかに見ゆ

高千穂商科大商三　中　田　太　七

いびきかく友どちの顔見てをれば遠路の旅が思はるるなり

亜細亜大法四　大　塩　耕　三

小夜ふけて文にむかへる我が友の姿を見ればたのもしきかな

友達にめいわくかけたくないといふ強き言葉を友は語りぬ

第四班

専修大経三　細　川　悌　弘

友どちの暖かき言葉に吾が心いつしか知らず開かれてゆく

福岡大法三　源　嶋　秀　治

友どちの素直なる言葉に答へんとすれど言葉にならぬがもどかし

九州大法一　先　田　督　裕

ぼうふらのままに終はれよ人を食ふ性持つゆゑに汝は打たるる

福岡教育大教一　是　松　博　視

班別討論の折に

聴きをれど何もわからずただ一人意見も出せずくやしく思ふ

亜細亜大法一　大　木　　隆

高千穂でスクラム組みて誓ひあふ再会期する合宿の友

大阪市立大理四　氏　原　秀　起

先輩のお話を聴きて

突然に親しき友を失ひし先輩のお気持ち伝はりて来ぬ

法政大文一　町　山　和　也

我が胸に深く残れり桜島とかすみて見ゆる開聞の岳

九州共立大経三　宮　里　一　史

夕焼けに染まりし空に煙立ち硫黄のかほりす霧島の里

九州大工二　松　井　哲　也

星野先生の戦争体験をお聴きして

今し方隣に居りし戦友の敵弾に倒れしと話され給ひぬ

戦友の倒れしを見てその敵を八裂きにせんと思はれしとふ

淡々と話され給ふ言の葉に先生の悲しみの深さ偲ばる

高千穂商科大商三　小神野　洋　一

山道にひぐらしのこゑ聞こゆれどまだ夏さらぬ高千穂の峰

第五班

福岡教育大教二　那　須　三　元

若みどりしるけく見ゆる山肌をすべるが如く雲登りゆく

東海大政経二　須　崎　　進

友どちの和歌読む姿見てをれば己が心もまたあつくなる

中村学園大家政一　平　田　　繁

いくつものトンネル通り霧島へ近づくわれの気持ちたかぶる

高崎経済大経二　里　城　雅　文

せつかくの合宿なれば元気出し皆と一緒に過ごして欲しい

第七班

福岡大商四　山　鹿　耕　平

霧島神宮に参りし折に

薩南の健児育てし御社に我もますらをたらんと誓ふ

熊本大教一　仁　木　義　邦

おごそかなる神事の後に見しものは神さび立てる御神木なり

九州大医三　長　澤　一　成

高千穂河原にて

班友が心通はぬとうつむきて語りはじめぬ力

なき声で
苦しみもきはまりたるかこの友はうつむきしまま涙流しぬ
唇をわななかせつつ胸内の苦しき思ひを語り給ひぬ
この友の力にならむと思へどもいかにもすべなくもだしをるのみ
帰りゆくバスに乗るさに「がんばれ。」と声かくるほかに我にすべなし
「きはまればまたよみがへる」といふ歌を思ひ出しぬ友に語らむ

九州大法一　後藤和孝

坂口さんの発表を聴きて
このわれも教師になりて日の本の美し歴史を伝へてしがな
日の本の旗や歌をもふみにじるあやまてるやからわれは許さじ

高千穂商科大商二　渡辺卓志

前園由美子さんの発表を聴きて
ゆっくりと心をこめて話さるる先輩の言葉に人柄偲ばる

名城大理工四　浜田好徳

霧島神宮にて
きりしまの神の宮居に詣でき友とわけ入るしきしまの道
日の本のもとつ命を護らむとたちたる薩摩の志士をぞ思ふ

亜細亜大経営一　横山吉光

先輩の言はるる事が合宿にておぼろげながらわかりかけたり

第八班

西南学院大法四　酒村聡一郎

寺尾博之さんの歌をよみて
戦にゆかるる前に霧島のこの地に来られしかみ友らとともに
友どちのねがほを見てはうづまきし大人の心のいかにかありけむ
吾もまた奇しき縁にてともどもに学びをる友の思はるるかな

福岡大法三　久米奈津雄

胸のうち半分さへも伝へえぬちからのなさにいらだちにけり

皇学館大文一　小柴良介

霧島の山辺に見ゆる夕焼けは勉強離れし心をいやす

亜細亜大経営一　島山正明

夜もふけて時を忘れて輪読会みんなで読みし天皇御製

九州大法一　野田和孝

高千穂の峰を隠せる濃き霧のうらめしきとぞ友と語らふ

長崎大教一　植松伸之

石段をふみしめふみしめ語りつつ隣りを見れば友どちの顔

第九班

九州大工四　亀川龍彦

第二グループの班長集ひて話合ひし折に
班の友がうちとけあひて語り合ふこといまだなきを友らに語れり
我が思ひ話せど応へぬ班の友のこと語りゆくに涙いで来ぬ
泣くまじと思へど涙あふれ来ぬうちとけず居る友ら浮かびて
己が思ひ述ぶるばかりで友の声に耳傾けずに居りしかとも思ふ
今一度心開きて我が思ひ友らの胸にうちつくるのみ

九州共立大経三　町田豊彦

友達と歩き始めし遊歩道あまりの静けさに驚きにけり

中央大法二　中村芳生

天孫降臨祭神籬斎場にて
今はなき宮居の址に佇めば古人の心偲ばる

福岡大経一　柳川浩司

霧島に肩を並べて語りゆく友のあること我はうれしき

亜細亜大法三　矢　野　剛一郎

友どちと木立の中を歩きゆく足音ひびき心にしみいる

宮崎大教二　梶　栗　勝　敏

合宿にて待ちたる山登りも夢におはりし高千穂の峰

第十班

福岡教育大教三　大　石　育　郎

山田先生の御講義を聴きて

戦ひに散りにし友の悲しみを偲びて欲しきと大人はのたまふ

亡き友の思ひを皆に語る事が残されしものの任務とのたまふ

京都産業大経営四　鈴　木　利　幸

友どちの語るを聴けどなかなかにまことの思ひ語りてくれず

体験にもとづく所の切実なるおのが言葉にて語れよ友よ

高千穂商科大商二　池　田　満

輪読にのぞむ心は勇めどもいざ始まれば心痛むも

広島大理一　内　田　武　文

高千穂に負けじとばかり勇ましく競ひあふかな薩摩の山々

九州大工一　藤　田　泰　之

霧島神宮にて

皆とともにかしは手打ちてかうべたれ心清まるその雰囲気に

亜細亜大法四　富　本　哲　弘

桜島じっと見をれば胸内に熱き思ひの湧きいづるなり

国際商科大教養一　山　口　唯　観

輪読にて心に懸かりし言の葉を床につきてもあぢはひかへしぬ

熊本大法一　園　田　達　也

雨あがり緑の世界走るバス新しき友と胸おどらせて

第十一班

早稲田大政経一　斎　藤　勝

茶谷さんの遺書を読みて

先人は国を頼むと述べられしわが身もゆきなむ敷島の道

西南学院大文一　結　城　誠　二

高千穂河原にて

高千穂の峰仰がむと思へども雲かかる見て歩みを忘る

九州大法二　金　子　光　彦

茶谷さんの遺書を読みて

友どちとふみ読みゆけば言の葉にこもる御心つたはりてきぬ

後につづく我らを「第二の国民」と信じとほして逝き給ひしか

明治大法三　田　村　英　治

我が気持素直に皆に語らんと思ひをれども言葉にならず

東京農業大農二　石　井　一　行

父母にうけし御恩はかたときもわすれはせじとちかひあらたむ

中村学園大栄養一　塚　本　研　也

南北の見知らぬ友とこの出会ひ我はうれしや高千穂の山

第十二班

鹿児島大水産三　姫　野　政　直

見さくれば八重の山波そのはてに煙吹き上げ桜島たつ

佐賀大理工二　小　野　伴　美

班別討論にて

胸の内に燃ゆる思ひを抱きつつ語れる友のひとみするどし

慶応大経三　前　島　克　治

かなかなと夕べにせみの声きけば故郷の景色心に浮かびぬ

福岡大商四　原　田　憲　治

すみわたる青空白くつきすすむ飛行機雲のあざやかに見ゆ

長崎総合科学大工三　下　川　新　次

霧島山にて

友だちとテントの中で酒のみつつ夜を徹して話し合ひたし

第十三班

長崎大教一　川　上　浩太郎

今までの心のくもり忘れらるるすみたる小鳥のさへづり聞きて

高千穂をおほへる空気肌寒く秋の初めと感じられける

九州大農二　佐　野　淳　志

をちこちの山の中よりさまざまの鳥のさへづり聞こえ来るなり

静かなるこの地にをりて和歌詠めば心静まりさはやかになりけり

岡山大法文二　塚　村　範　雄

輪読の折

よき釈をみいださむとして話し合ひ真剣になる友の顔かな

佐賀大農二　佐　本　将　彦

山あひの霧のもなかゆ聞こえくる鳥の声すみて爽やかなるかな

亜細亜大法三　安　田　利　雄

浅霧にかすむ山々見渡せば思ひははする神代の高千穂

一橋大商一　水　原　潔

高千穂の赤き鳥居を見上ぐれば思ひは遠くいにしへにゆく

熊本大医二　古　井　博　明

高千穂の杉の林に霧たちて宮居の跡は神さびて見ゆ

第十四班

鹿児島大法文四　良　本　光　明

前園先輩の研究発表を聴きて

とつとつと語り給へる言の葉にわが長崎の母の偲ばゆ

福岡大経四　杉　山　直　樹

去年の夏集ひ来たりし友どちにまみえ得ざるはさびしかりけり

高千穂商科大商二　神　原　誠

高千穂へ向かふバスの中美しさを期待しながら胸おどるなり

熊本大理一　吉　田　真　徳

宮跡のこけのはえたる鳥居には歴史の深さひしと感ずる

早稲田大政経四　内　海　勝　彦

友みなと心しづめて拝殿にむかひてをれば身のひきしまる

九州大経一　江　崎　雅　彦

千歳経る川原の石を踏みしめてゆけば神代のことぞ偲ばる

東海大工三　濱　崎　博

雲海に浮かびて見ゆる桜島を病床の祖母に一目見せたし

第十五班

九州大理四　大　島　洋

とつとつと語れる友の言の葉に深き思ひを見いだしたるも

九州大工四　久　米　秀　俊

輪読の折に

生き生きと躍動したる言の葉に惹かれて皆に感想求めり

ある友は先刻ありし坂口さんの話せしことを思ひ出せりとふ

生徒らの中よりわきくる君が代を聴く先輩の姿浮かぶとふ

中央大経三　田　嶋　敬　一

高千穂の河原に立ちて見渡せど眺めをさへぎる雲と霧はも

鹿児島大工二　一　丸　修

もくもくとけふも硫黄の香りする湯けむりは立ちて空にのぼれる

宮崎大教二　松　原　慎　治

高千穂の峰に登るを待ちゐたれど霧たちこめて登れぬがくやし

福岡大商三　田　中　義　彦

もくもくと温泉の煙立つ見れば我家の風呂の懐しきかな

第十六班

東北大農一　桑　原　正　貴

赤松の原生林をながめつつ友と語らひ石だたみを行く

九州大法四　安　部　修

輪読の折に

一言を釈する時の真剣さに日頃の自分をはづかしと思ふ

九州大文一　岡　田　洋　三

はだ塞き高千穂河原をあとにするわれの背中にてふがとまれり

青山学院大法一　小田村　直　昌

霧島の宮に参りて見渡せばまはりはすべて雲の海原

高千穂商科大商二　林　宗　城

夏の日の暮れゆく時のおだやかさ黒雲いづくへ流れゆきたる

西南学院大商二　冨　田　重　徳

こみどりの杉の木立に囲まれて朱塗りの社見えてきにけり

熊本大医四　福　田　誠

霧島神宮にて

御神楽の笛の音さやに鳴り響く神さぶる宮に拝みまつりぬ

高千穂河原散策の折に

雲低み高千穂の峰仰がれず雲去りゆけと願ひをれども

班員の友らとゐるが楽しさよ共に過ぐして三日なれども

第十七班

亜細亜大法三　横　山　徹

我が心立ちのぼりたる湯煙に遠くに住めるかの君を思ふ

長崎大教二　北　村　芳　正

わがことばたとひ軽しと言はれむとも思ふがままに語らむ友と

福岡大卒・国文研　黒　岩　真　一

人影のまばらになりし宮跡にしばしたたずみ辺りながむる

熊本大理二　佐　藤　利　憲

山々の頂近く濃き霧のかかりて暗き雲と連なれり

九州大理二　白　水　重　憲

高千穂に登れぬは口惜しけれども桜島山見ゆるはうれし

鹿児島大法文四　松　竹　圭　輔

赤々と雲染まりたるこの夕べ眺めゐるまに暗くなりゆく

第十八班

学習院大経四　飯　島　啓　史

天孫を祭れる宮に心清め遠き祖先を思ひやるかな

八幡大法三　阿波連　昇

高原に友と来りて語り合へば涼しき風の我が胸を吹く

九州大工一　高　山　佳　久

高校時代の親友を思ひて

高千穂の石道歩めば友どちのなつかしき姿想ひ出さるる

早稲田大社四　阿　川　信　次

高千穂河原にて

今までに聞きしことなき山鳥の笛吹く如き声の聞こゆる

その声に応ふる如き鳥の声隣の山の方より聞こゆ

山中に声をかぎりに鳴き交はす鳥らの声にしばし聴き入る

高千穂商科大商二　菅　野　大　三

夏の山木々の緑もすばらしく祖母に見せたし霧島の山

山口大経済四　中　山　直　也

雨ふりて高千穂登山むつかしと友と二人で空

を見あぐる

霧島神宮にて

霧島の社の庭に今立ちてみおやの神に頭をたれぬ

熊本大工二　日野満司

銀色の海に浮かぶは薄青き開聞岳と桜島山

第十九班

第一薬科大薬二　栄　謙師

もうもうと湯けむり上ぐる硫黄谷夕日を受けていと無気味なり

佐賀大経二　大里富重

初日過ぎ二日目過ぎて三日目かな己が思ひは五日目にあり

鹿児島大法一　樺山浩二

山に入り耳をすませば静けさを破りて鳥の鳴き声のする

福岡大工一　橋口英生

ながむれば霧たちこめし山々が我が心を清らかにすなり

名城大商一　安江邦夫

初めての友にあれどもなごやかに言葉交はすは楽しからずや

九州大法四　加藤多夏詩

霧島神宮の旧跡を訪ねて

その昔瓊々杵尊（ニニギノミコト）の天降（あも）りしとふ高千穂の峰は霧にかくれし

火の山の噴きにし炎に御社は焼かれて今は鳥居のみ立つ

鳥居たつ丘より見れば山の辺の霧のしづかに動きゆく見ゆ

日本大経二　井口崇

寝静まりし友の中雲間より出でにし月に我が心なぐさむ

第二十班

早稲田大文一　小森秀俊

輪読の折に

先哲の深き言葉に戸惑ふも力尽くして心窮めむ

いつしかに夜のしじまの迫り来て語らふ声に熱のこもりぬ

亜細亜大法二　松田剛

霧島神宮にて

まっすぐにのびたる杉のすなほさに我の心もすなほになりぬ

鹿児島大工一　満丸浩

口ごもり短歌を詠みし友どちがひとこと言へりああすばらしと

多摩美術大油画二　河内実

御製を拝誦せし折

大君の御うたを偲び真実の歴史を知りしありがたさかな

九州大医三　笠普一朗

坂口先輩の発表を聴きて

だれとなく歌ひだしたる君が代に心あはせてみな歌ひぬとふ

生徒からわきあがりたる君が代のしらべを聞きて足ふるへぬとふ

第二十一班

日本大法二　松田一朗

霧島の清きながめは丈夫の清き心をなぐさむるかな

高千穂商科大商三　三戸康俊

霧島の山にたちたる湯煙に硫黄のにほひのほのかにただよふ

九州大工三　弓立忠弘

きりしまのみ社前の高台ゆはるかかすみて桜島見ゆ

山口大医四　小林俊三

平野国臣の歌を思ひて

胸開き槍に突かれて死にしてふ強き心を今偲ぶかな

九州大文一　渡辺健作

輪読の折に

友どちの光る言葉を耳にしておのれの道の灯（あかり）を見出づ

福岡大商四　柳　沢　均

苔むせる石段の残る神社跡友とたたずみいにしへを想ふ

第一薬科大薬一　古　井　祐　二

前園由美子さんの研究発表を聴きて

母親の我が子を思ふを聴きしとき我が母思ひて胸熱くなる

第二十二班

山口大理一　神　門　誠　司

その昔霧島神宮ありしとふ河原に立ちて往時を偲ぶ

日本大法二　松　田　従　郎

霧島の景色をみれば清らかなる気持ちになりて心落ちつく

高千穂商科大商一　山　本　啓　三

高千穂にのぼりてみれど視界あしく景色見られぬがロをしきかな

九州大経一　片　山　洋　徳

青山先生の御講義を聴きて

われわれにしきしまの道伝へんと説かるる言葉力こもれる

神奈川大工二　里　見　裕　之

懸命に話してくるる友どちの姿を見れば心通ひぬ

八幡大法経四　照　屋　全　明

友どちの語る言葉に我胸の深き喜び広がりてゆく

鳥海信用金庫・国文研　須　田　清　文

わが友のあかるき笑顔ま近くに見るぞうれしき共に集ひて

つね日ごろ教へをあふぐ師の君の御講義うつしく聴くはうれしも

第三十一班

旭川女子短大家政二　早　坂　栄理子

そそり立つ雄々しき木々に驚きてちいさきわれは前にたたずむ

鹿児島大法文一　江　口　定　子

班別討論の折に

感動を涙ながらに語りたる友の姿の忘れかねつる

我が思ひ素直に言葉にならざるがただに悲しく口惜しきかな

福岡教育大教四　久　間　敏　子

輪読の折に

友どちとひとつの文字に心寄せ語り合ふ時心なごみぬ

佐賀大教二　寺　崎　周　子

足もとのこけむす石を眺むれば微風にゆらぐ花もありけり

宮崎大教三　三　浦　紀　枝

貞明皇后の御歌にふれて

愛深き御歌のこころは日の本のをみなの歩む道とぞ思ふ

鹿児島大教四　前之園　登美子

石段の緑の苔の生ふる中ただ一本の草花咲きたり

第三十二班

青山学院大文一　西　峯　由　紀

あくせくと日々のつとめに追はれても敏なる心常に持ちたし

明治学院大文二　上　田　厚　子

霧島神宮跡にて

冷ややかなる風はこの身にいにしへの神代の国を語りかくるよ

大東文化大文三　平　崎　恵　美

九州の南のはての霧島に我今友と歌を創らむ

大東文化大法二　吉　田　千賀子

おはらひをしていただきて己が身の何かにつつまれ心満たさる

福岡教育大教四　伊　藤　智恵子

何気なくゴミひろはれし師の君の清らな姿勢に心驚く

福岡教育大教一　野　口　ゆかり

すばらしき眺めとききし高千穂の登山さまたぐる雨のうらめしき

第三十三班

宮崎大農二　木　下　小夜子

霧島神宮境内にて

皆と打つ拍手の音は吾が耳にさざ波のごと響きて聞こえぬ

西南学院大文一　一　宮　浩　子

飾りなく素直に生きる友見れば吾もなりたし友のごとくに

尚絅大文二　川　田　京　子

我のためやさしき友が気をくばり手をさしだせし山の坂道

埼玉大教一　高　木　秀　子

雲晴れて開聞見えしうれしさに我を忘れてただ見入るのみ

亜細亜大法三　小　貫　広　子

ひと夏の命と鳴けるせみの声死にゆく前に何をか語る

熊本大理三　村　上　佐代子

みどり濃き木立の蔭にひそやかに山百合咲ける霧島の山

長崎大教二　北　川　雅　子

御社までの道歩きつつ合宿に来ざりし友の思ひ出さるる

第三十四班

熊本大教三　武　藤　慶　子

前園さんの発表を聴きて

ひたすらに子らは素直と語られし先輩の言葉に胸あつくなる

亜細亜大経二　池　野　泰　代

雨あがり静かなる宮を訪ぬれば都会の騒音忘れけるなり

長崎大教三　下　釜　ゆかり

他人（ひと）の意見を聞いて来るのも良い事と話してくれし父に感謝す

福岡女子大文二　海　山　美津恵

旧宮（ふるみや）を囲める四方（よも）の山々の杉の木立に霧のかかれり

鹿児島大教二　豆　塚　千寿子

今上天皇の御歌にふれて

平和なる時代はきたれど大君の母君偲ばるる御心いかに

福岡教育大教四　平　山　とき子

緑なす高千穂山に黄色にぞ咲きたる花の美しきかな

第四十一班

熊本市立白坪小教諭　佐　野　昭　二

仰ぎみて静かに偲ぶ御心を我より知るは母なる大地

八代市立第二中教諭　高　野　寿賀雄

山路来て木々の姿の美しく語らふ声もしばしとぎるる

福岡県中村学園女子高教諭　瀬　口　憲　二

はるかなる錦江湾をながむれば雄姿は見せず桜島山

出光興産㈱　長　田　武　士

集ひ来て日本の心語り合ふ若き命を素晴らしと思ふ

出光興産㈱　吉　田　彰　秀

やや高き山に囲まれし斎場に昔の祭り偲ばるるかな

高田工業所㈱　住　田　静　昭

眺むれば遙に見ゆる桜島燃ゆる思ひを上げてやりたし

第四十二班

福岡県立三池高教諭　青　柳　正　文

雨あがり開聞岳の遠く見えバスの中より歓声おこる

出光興産㈱　中　溝　英　夫

いにしへの人の心を偲びつつ我今登る霧島の山

八代市立植柳小教諭　金　井　昌　康

緑なす木立の中に立ち昇る湯煙白く故里思ほ

ゆ

出光興産㈱　向井　茂

帰りなば友につげむと心してメモとる手にも力入りぬ

来る時の心の不安何ものぞ友と語りて喜びを知る

福岡県中村学園女子高教諭　伊野　直登

霧島の集ひにいでて聴きをればしみじみ思ふ日々の尊さ

第四十三班

出光興産㈱　南　嘉高

坂口秀俊君の発表を聴きて

道を説く若き教師の発表に我れ聴きほれて涙こぼるる

八代市立二見小教諭　加来　研一

夕焼けにそまる開聞錦江湾神の国にぞあらむと思ふ

八代市立八代小教諭　久保　貴資

高千穂の山に登りて眺むれば眼にぞしむ赤松林

倉敷市立児島高教諭　小坂　博通

ともどもに日の本の道語りたるこの霧島の二夜尊し

出光興産㈱　甲斐　博隆

霧島の紅き社に参り来て胸にしみわたる竜笛の音

第四十四班

熊本市役所　林　ヒロ子

貞明皇后の御歌を読みて

真心もてライ病患者を思はるる深き御慈愛に胸うたれけり

鹿児島県頴娃町立青戸小教諭　前園　美代子

今までは苦に思はれし和歌なれど今宵はなどか心はずみぬ

折にふれ敷島の道ふみゆけば心もいつかはればれとせむ

鹿児島県頴娃町立青戸小教諭　徳永　千草

友だちと共に過ごせしこの日々を時はたつとも我は忘れじ

見学参加者

亜細亜大職員　志賀　雅二

岩肌に白き湯けむりたちのぼりいで湯の里はけふも暮れゆく

亜細亜大職員　荒木　邦夫

和歌の道偽りなしに詠まねばと言の葉出でず気がせくばかり

大学教官有志協議会・国民文化研究会

㈶労働科学研究所理事・高千穂商科大教授　高木尚一

湯の滝のさらさら落つる岩肌をかくむ楓の葉
かげ涼しき
湯けぶりをあげて流るる溪流のいのちあふる
る岩間岩間に
神杉は深くしづけくみやしろをかくみて立て
りいく百とせを
山深く生ひ重なれる赤松の林をつたひ霧まひ
上る
雨はれし高千穂河原神さびて鳥居につづく石
の道けはし
天孫の天降りたまひしこの山に神のみたまを
仰ぐここちす

国民文化研究会理事長・亜細亜大教授　小田村寅二郎

遠ち方は晴れ上りたり群山の山の端しるけく
夕空かぎれる
ほの赤き夕暮空に金色に縁どられける雲浮ぶ
見ゆ
霧島の集ひの宿の窓に倚り友らの帰り待つ間
のひととき
リクレーションのこの午后にして晴れゆきし
み空有難く見守り続けぬ

亜細亜大教授・教養部長　夜久正雄

亡き友のうた朗々と若き友の読みゆく聞けば
思ひけうせつ
この宿の昔の宿につどひけむ友らをしのぶの
こせしうたに
今生の別れの酒をくみかはしすめらみいくさ
にゆきし友はや
いまも聞くせせらぎの音を亡き友がききてよ
みけむみうたかなしも
みうたよむこれのつどひを亡き友のかなしみ
魂はみそなはすらむ
遠足にゆくとき近くうれしくも雨やみて外の
面あかるくなりぬ
二日三日ふりつづきたる雨やみてみどりさや
けし宿の遠近
ただよへる雲のうすれてあなうれし高千穂の
峰のいただき見えぬ
神さぶる高千穂の峰霧雲のうすれゆくまに見
えしかしこさ

熊本女子商業高講師　故・瀬上安正

若き友いやつぎつぎに集ひ来て霧島神宮に此
度びも詣づる
太鼓の音とどろき渡りすめ国のはじめのとき
の昔偲びつ
天降りまししみおやの神の力もて此の若人ら
守らせ給へ

中央塩ビ製作所㈱役員　星野貢

二日あまり宿にこもりて出で来ればきりたち
こめてみどりさやけし
久々に会ひまつりたるみ友らと語らふ一時の
うれしかりけり
神宮のみ前にぬかづき神々の遠きみ代をば偲
びまつるも

八代市役所助役　加藤敏治

み軍にいづる日近みみ友らと別れ惜しみて旅
ゆきしかな
大浪の池をし見むと岩根ふみ友らと山道をた
どりゆきにし
静もれる池の水面に影うつし山の紅葉は美し
かりき
おのがじし手折り来りしもみぢ葉を部屋にか
ざりて酒をくみしか
酒によひゑまひ手たたき歌ひにし楽しき宴思
ひ出さるる
再びは来る日もあらじと歌ひにし亡き友忘れ
じ生くるかぎりは
亡き友を偲びてあれば鉾杉の木群がくれに日
ぐらしの鳴く

福岡教育大教授　山田輝彦

輪読の折に

霧島ははや秋ならし夜をこめて暗きしじまに
雨降りしきる
若きらと太子のみふみ読みをれば雨脚しげし
鉾杉の枝に
聖徳の皇子のみことば若きらとたどりてゆけ
ば心すがしも
むらぎもの心つくして一行の文に真向ふ面輪
きびしき

宝辺商店㈱社長　宝　辺　正　久

慰霊祭

ふりつづきし雨はれていま西の方夕映えしつ
つ暮れゆかんとす
かがり火のいや赤きかも国のためたふれし人
のみたままつりに
再びはかへらじと言ひし亡き友よかへりきま
さなこれのゆにはに
唱へまつる御歌のしらべは波のごとくわれら
が胸にゆりとどろくも
白雲は月に光りていつくしき空を仰げば亡友
ぞ恋しき

こんや別館㈲代表取締役　青　砥　宏　一

みどりこき木立にはえて御鳥居のしゅぬりの
色の目にはしむかも
ともどちと大き杉立つ参り路を玉砂利ふみて
あゆみゆくかも
思はぬに昇殿許され大前に近く拝するかしこ
かりけり
大前のみ旗み盾に金色の菊の紋章光り輝く
遠々し神代の昔高千穂に天もりましけむ神ぞ
かしこき
夕なづむ帰り路にして桜島開聞岳見つバスの
中より

吉野石膏㈱総務部長付　加　部　隆　三

霧島の山おりくれば桜島ゆん手遙かに開聞岳
見ゆ
白雲のたなびく方にしるけくも桜島見ゆ墨絵
のごとく

住宅金融公庫参与　島　田　好　衛

いくたびか詣でし神宮の本殿に昇りてをろが
むことのかしこさ
おごそかにのりとをまをす神官のうつ拍手の
音のよろしも
天降らしし神のみ前にぬかづきてをろがみま
つるけふのうれしさ

電源開発㈱環境立地部部長代理　長　内　俊　平

天孫をいつきますてふみ社をきだはしの下よ
り仰ぎまつるも
みあらかは山のなだりに三段に並びてましま
す朱の色して
玉串をいま捧ぐらし拝殿ゆみ里神楽の音きこ
えくる
広前にゐならぶ若きらともろともに拍手うち
てをろがみまつる
高千穂の峯はみえねど神域にただよふ気はひ
のいつかしきかも

福岡県立修猷館高教諭　小　柳　陽太郎

黒々となみ立つ鉾杉のそが上に照る月かげの
身にしむるかな
霧島のいでゆの里にさす月の光を見ればおも
ほゆるかも
みいくさに出で立つ前のたまゆらの一日をと
もにここにすぐしつ
寝しづまりし夜の一ときを月仰ぎ歌よみし友
よあふすべのなき
いつの日かこの里訪はむと歌よみて征きしみ
友よつひにかへらず
月かげをうけてひろごる南の国原遠くともし
びの見ゆ

舞岡八幡宮々司　関　正　臣

来む年を思ふも淋し二十年のゆかりを固く我
は思へど

高千穂商科大助教授　名越　二荒之助

高千穂平にて

日の本の古き昔ゆくにたみのあがめまつりし
霧島の宮

高千穂の峯に天降ると語られし古き伝へのいつかしきかな
高千穂は雲に覆はれ麓より仰ぎてあれど頂見えず

白浜君へ

こぞの暮ともに旅しつ霧島の再会約して別れしものを
せめになひまごころつくす君なれば病とききて心痛むも

農林漁業金融公庫副総裁　小田村　四　郎

霧島神宮参拝

ながの雨の漸くはれて霧島の山路をゆくはすがしかりけり
かみつ代に天降りましけむ皇孫をまつる社にけふまうでたり
みはるかす南の方に海を隔て桜島山煙たなびく

高千穂河原散策

石だたみの遊歩道よりわかれ来て山の小路をひとりゆきけり
高千穂のくしふる峯の尾根遠く若き友らが登りゆく見ゆ
頂に心残して石だたみ下りてゆけばうぐひすの啼く
古びたる鳥居の奥に石積みておごそかなりきふる宮のあと

㈱ファミリー常務取締役　松　吉　基　順

霧島高原雑詠

雨あがりし霧島高原雲ながれ眼交ひの丘緑目にしむ
霧島の宮の庭べにたたずめば桜島山うすがすむ見ゆ
白ひかる錦江湾に横たはる桜島山あかず眺むる
桜島あかず眺むる霧島の森の木立ちに蟬のしき鳴く

佐世保市交通局企画係長　朝　永　清　之

吾子思ひつながむる山なみ夕まけて西のかたへにあかねさしをり
旅立つ日にわづらひてゐし吾子のさま案じられつつ幾日を過しぬ
つねづねはうるさき吾子と思ひしも旅にてあればひたに恋ほしも

岡山県立岡山芳泉高教諭　三　宅　将　之

みまつりのにはをいづこに定めむと友らとともに空をみつめぬ
いつまでも決めかねゐてもせんなしとみ空晴れてよとにはに定めぬ
そのうちにみ空晴れゆきみんなみにはるかにかすむ桜島見ゆ
西空に残れる雲は黄に染まりやがてあかねにそまりてゆきぬ
夕されば風さはやかになりゆきてみたままつりの時近づきぬ

神奈川県立横浜翠嵐高教諭　国　武　忠　彦

畏くもにぎのみことおはします神の宮居へ足を運びき
さはやかに太鼓と笛の音聞こえきて神ををろがむ吾ら楽しき
神詣ですませて心清くなり老いし宮司のお話を聞く

熊本市立大江小教諭　貴　島　武　之

溶岩の流れし河原さすらへばうぐひすの声はるかに聞えく
くはがたに心奪はれをさな子は陸稲(おかぼ)踏みつけ畑を駆けゆく

熊本県教職員連盟書記長　満　崎　安

あざやけき緑の山に囲まれし御社跡のおごそかなるかな
御社の跡にたたずみ古を偲びてをれば鶯の鳴く

日商岩井㈱燃料第二部第二課課長代理　沢　部　寿　孫

晴れにしと思ふまもなく黒雲のたちまちおこりて空をおほひぬ
神々のみたまよばはふみまつりに雨な降りそ

とひたにいのりぬ
谷底ゆ吹きあげて来しゆけむりの杉の木の間に消えてゆくみゆ
忙しき日々の仕事にいつとなく歌詠む心忘れゐしかも
いつとなく忘れし心のおのづからよみがへり来ぬ友と語れば

航空自衛隊第4術科学校教官　村山寿彦

杉木立の中に鎮まる霧島の大御社に詣づる今日は
皇孫をまつれる宮にぬかづきて皇御国の無窮祈れり

神奈川県立横浜平沼高教諭　福田忠之

霧島ゆはるか望めば美しく桜島影浮びて見ゆる
厳かに冠のごと白雲を頂きてをり火を噴く山は

霧島神宮参拝

東急建設㈱技師　奥冨修一

五年の月日はや過ぎふたたびも見上ぐる社のなつかしく思ゆ
み恵みを吾娘もうけませと願ひつつお守り袋を社務所にもとめぬ
初めての合宿教室に集ひたるはこの地にありきと聞くもかしこき
石段を上りてゆけばここにてぞ写しゐとりきと先輩は語るも

講談社広告局　磯貝保博

み言葉のひびきは低くもさやとほり八十年過ぎたる方とはおもへず
み言葉は要得てしかも簡潔に歌のしらべに似てすがすがし
世の中の動きに一喜一憂する焦る心もなごみゆくかも

神奈川県湯河原町立吉浜小教諭　岩越豊雄

坂口秀俊兄の青年研究発表を聞きて

日の本の子らの命をめざめしめし君のまことに心うたるる
苦しきことあまたあるとも乗り越えて道貫きし勲雄々しも
日の本の子らのまことを踏みにじる心無き輩と戦はざらめや

福岡県立三池高教諭　志賀建一郎

坂口君の発表をききて

力強き一語一語にこもりたる君が思ひは永遠に忘れじ

福岡県立直方高教諭　小野吉宣

班友に語りゆけども伝はらずなすすべいかにと友は問ふなり
班友は心閉ざして語らずとわなわな唇ふるはせていふ
ひたむきに尽くせる友の胸内のいたくしのばれ身のひきしまる
かくまでも心をこめて尽くしゆく友の誠のありがたきかな

福岡県・吉田歯科医院　吉田哲太郎

雨雲もいつしか晴れてたなびける夕焼け雲の赤さ目にしむ

神奈川県立城山高教諭　原川猛雄

友どちと歩みてゆけば目の前に大きな鳥居のすがた見えくる
御社のあとにたたずみながむれど霧に隠れて霊峰見えず
階段に腰をおろして友達と鳥居をバックに写真うつせり
御社のあとにたたずみみおやらの神をまつりしいにしへしのばゆ
神々をまつりしにはに立ちをれば心清まるこちするなり

水崎法律事務所弁護士　中島繁樹

朝方の雨のあがりて雲々のかなたに青き空の見えたり

戸田建設㈱技師　青山直幸

みたまらの降りたたすらむかがり火の炎はいよよ燃えさかるなり
みたまらの我ら呼ぶごとかがり火の火の粉やにはに舞ひ上りたり

天皇の御歌誦まる師の君の御声しるけく響きわたるも
「海ゆかば」歌ひてゆけば胸底ゆ熱き思ひのこみ上げて来ぬ
ふとわれにかへれば谷のせせらぎの音のさやけく聞こえくるなり

大成建設㈱海外事業部経理課　山口　秀範

うす雲のそのはたてには高く低くうち重なりて山々の見ゆ
緑濃き木々のはざまゆ湯けむりの勢ひ強くたち昇る見ゆ
山ぎはに雲流れ来てつかの間の入日の影をまたも隠せり
乳色の雲にはつかに茜さし薩摩国原暮れゆかむとす
「再びは来る日もあらじ」と詠みましし先輩のみ心偲び已まずも
澄みし大気ふるはす如く鳴きしきるひぐらしの音の胸にしみ入る

座間市立座間小教諭　松本　洋治

くりかへし文読みゆけばいやましに太子のみことばひびきくるなり
心こめ友の語るを聴きをれば心の通ふことのうれしさ

熊本県立松島商業高教諭　中園　俊郎

真夏とも思へぬほどにここちよき風ふきわたる霧島の里
み友らと学び合はむとこの里に集ひ来たるも三度となりぬ

福岡県立福岡農業高教諭　小林　至

慰霊祭の祭壇を作りし折に

国のため命捧げし諸々の御霊むかへむこの祭壇に

福岡県立豊津高教諭　堀田　真澄

坂口兄の発表を聴きて

教壇につとむる姿しのばれて語る言葉のひびきは高し
英雄や偉人のことを生徒らに伝へる姿眼に見ゆるがに
君が代の歌声おのづと生徒らの中より起こりしことを語りぬ
歌声のひびきに体ふるへしと語る姿はうれしさあふる
生徒らの希望によりて卒業の日にも君が代歌ひしといふ
心なき者の仕業もなにものと歌声高く歌ひしといふ

福岡県立若松高教諭　坂口　秀俊

「君の気持ちを正確に言へ。」と言はれし先輩のきびしきことばのありがたきかな
うれしげにほほえみまして「よかった。」と言ひ給ひけり師の君と先輩
久々にみ空は晴れてさやかにも星輝けりみたままつりに

熊本大工修二　鎹　信弘

田之上兄のことを詠める

一語一語確認しつつ連絡事項を伝ふる友よ面輪しまりて
忙しき務めの合間に病む妻を案じて友は電話をかくる

熊本県立人吉高教諭　田之上　正明

合宿に集ひえざりし先輩は如何あらむと心にかかれり

東京都中野区立北中野中教諭　石井　孝一

ひもろぎに真向ひ立ちてつぎつぎに御製詠み上ぐる声の強しも

福岡市立春吉中教諭　西原　正博

雲去りて浮かぶがごとく現はれし薩摩の岬をのぞみやるかな

山口県立南陽工業高教諭　宝辺　矢太郎

坂口先輩の発表を聴きて

広瀬中佐の唱歌うたひし先輩のかがやくおもわうつつにうかびく
いのちかけたたかひ守りし民族の勇気伝へんとうたひし先輩よ
ただならぬ先輩の思ひの伝はりけむ運動会の閉会式は

生徒らのうたふ君が代つぎつぎとうねりのごとく伝はりしとふ
ぶるぶると身体はふるへ身の内にあつきかたまりのつかへしといふ

丸善石油化学㈱　島崎祐司

大町君の発表を聴きて

つまづくもたゆまず歩みし友どちの学ぶ姿に勇気づけらる

西南学院大聴講生　安部博之

なつかしき友らと会ひて語らへば心なごみて疲れ忘れぬ

鹿児島県菱刈町立菱刈小教諭　南田武法

雲の間に浮かぶがごとく山なみの連なりて見ゆ薩摩国原
吾が家のあるはかなたと青垣の山を見やれば心和むも

長崎県立長崎北高教諭　宮崎重人

亡き友をとむらふあまたの友どちの文を読みつつ合宿地にむかふ

宮崎県立宮崎盲学校教諭　竹下鉄郎

夕暮れの深き緑の谷間より白き湯けむり立ち上りゆく
夕闇のつつみそめにし山の上に朱きすじ雲たなびきてをり

鹿児島県山川町立大成小教諭　村田研史

口々に登りたしてふ声聞けど口惜し雲は低くたれこむ
かしこくも御霊を祀る祭壇の上にやうやく星の輝く

岡山県立東岡山工業高講師　砂川芳毅

御講義のさ中に風のそよぎきて硫黄のにほひ鼻につきけり

木内先生の御講義を拝聴して

学生の質問する声聴きとらむと耳に手をやる八十路（やそじ）の師の君

防衛施設庁建設部　皿田宏

慰霊祭の準備をする折に

神々の降り給へる祭壇と思ひて心ただしたりけり

日本ユニバック㈱　大町憲朗

心うたれし体験話す班友のまなこを見れば心ひきしまる
おのが思ひおのれの言葉で話されし友の心のありがたきかな

九州大工修二　山根清

慰霊祭にて

日の本に御命捧げし神々の御魂祭りすことぞ畏し
去年の夏失せにし友の天翔る御魂も祭りに集ひますらむ

市立大牟田養護学校教諭　小田正三

班別輪読の折に

友どちと心合はせて読む文の尊き御言葉胸に迫りく
真心をこめて語らるる先輩の御言葉に触れ開くるよろこび

日本興業銀行資金部　小柳志乃夫

高千穂河原下りてくればまなかひに桜島山さやかに見えつ
桜島の左手はるかに美しき開聞岳の姿望むも
雨雲は今消えゆきて広ごれる錦江湾を見渡すうれしも

坂口先輩の発表を聴きて

左翼との戦ひの様述べらるる先輩（とも）の言葉の力強しも
運動会につどひし高校生の輪の中ゆわきおこりきとふ君が代の歌
運動場にひびきわたりけむ君が代の高きしらべを偲びやまずも

鹿児島市立桜丘西小教諭　内山なな子

受けつけの仕事に立てば先生の思ひもかけぬ姿に接す
師の君は思ひのほかにおつかれのかげの見えしに心いたみぬ
後輩をよろしくたのむと話されていつもの笑顔を見せたまふなり
霧島の大御社の参道を友らと歩めば心はずみ

ぬ
参道の脇にそびゆる大杉の幹の太さに目をうばはれぬ

福岡県立小郡養護学校教諭　林　田　景　子

貞明皇后さまの御歌をよみて

震災に家も倒れし国民のいたづき思ひて歌よみたまひぬ
おもはざるわざはひうけて苦しみし民のうへをば偲ばれにけむ
なりはひは苦しかれどもみあれ日を祝ひまつりて旗かかげしか
そまつなる板屋なれども日の丸は青き御空にはためきたりけむ

福岡市立長丘小教諭　平　山　尚　美

高千穂の山々深くしづまりて神の降り来し古しのばる
久々に会ひける後輩（とも）らと語らへば心はずみてうれしくなりぬ

福岡県玄海町立玄海小教諭　前　園　由美子

師の君の「だいぢゃうぶ。」てふ言の葉に思はず涙こみあぐるなり

福岡女子大文卒　光　山　香奈子

高千穂河原より峰を仰ぎて

たれこめし霧のはつかにはれゆきて峰の稜線けざやかに見ゆ

事務局

国民文化研究会職員　蘇　原　幸　絵

事務局のあはただしさに夏は来ぬ霧島山の若人のつどひ

熊本県立松島商業高三　草　積　直　子

真剣に山に向かひて歌を詠む若人たちにわれ胸うたる

熊本県立松島商業高三　黒　川　シゲミ

来る時の心細さに比ぶれば今はうれしき友多くして

熊本県立人吉高二　那　須　龍　治

高千穂を下りゆくにはまだ早し帰らむ時は霧たちこめむ

熊本県立人吉高二　小　林　敏　郎

故郷の方角をふとながむれば目にうかぶのはあの友あの家

熊本県立人吉高二　板　野　一　生

夕焼けのさみしき空にゆつくりと山の湯けむり高く消えゆく

東京都立蒲田高二　松　吉　基　光

霧島の山の緑の山脈にひときははゆるみやしろの紅
夕空にしづかにながれる紅き雲ひぐらしせみの鳴き声ひびく

（記録班）

元最高裁秘書課・速記業　西　川　伍　朔

山峡の木立にゆけむりたゆたひて霧島山に夏の雨降る

（写真班）

亜細亜大広報室　加　藤　幸　雄

緑濃き山ふところにいだかれて湯けむり昇るここ硫黄谷

あとがき

朝夕はめっきり肌寒く、日増しに秋の深まり行くのを感ずる此の頃です。皆さんその後いかがお過ごしでせうか。（合宿教室での）若手助言者のうち在京の私たちは、今年もこの『感想文集』の編集作業に取り組み、やうやくこれを仕上げることができました。

合宿直後の八月十八日に第一回の編集会議を持って以来、殆んど毎週末には、銀座の「国文研」事務所に、あるいは、在京学生の寮である芝白金台の「正大寮」に集まり、十数名の人たちによってこの作業が進められました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・和歌を、たんねんに読みかへしながら編集しましたので、大変時間もかかり、神経も使ひましたが、皆さんがお書きになった生き生きとした言葉に心をうたれ、眠さも吹き飛ぶといふ、有難い経験もさせてもらひました。改めて「合宿教室」の一コマ一コマも、そして皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されてきました。

㈠「感想文」について

原文の長さはさまざまでしたが、ページ数の関係で、執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、慎重に加筆しました。原文のニュアンスが損はれないやう努力しましたが、万一にも取り違へてゐるやうな箇所がありましたら、どうかご容赦くださいませ。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

㈡「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回目のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊子の巻末の「和歌詠草」のところに収めました。また、感想文執筆の折につくっていただいた第二回目のものは、それぞれの感想文の末尾に入れました。十数首も詠まれた方もあり、また、多くの方が連作で詠んでをられましたが、スペースの関係で、収録の数を抑へざるをえませんでした。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正しました。また、この方は「和歌」ですので、すべて正かなづかひに改めました。

編集に従事してくださった方々は、それぞれの忙しい職場にをられながら、休日や、勤務終了後の時間をさいて下さいましたのをはじめ、「はしがき」は小田村理事長に、次の「あらまし」は福岡の学生寮「大観塾」に集ふ学生諸兄に、また、末尾の「和歌の編集」は九州在住の助言者、折田豊生・鎹信弘両会員のほか、熊本地区の方々に、おまとめいただきました。また、カメラレポートの写真については、合宿での写真班担当の亜細亜大学広報室勤務の加藤幸雄会員が、忙しい仕事の合間に、原版の濃淡に応じてたんねんに一枚一枚を焼付けて下さった一千枚を越える写真を届けて下され、その中から、選ばせていただきました。以上の方々に心から御礼申し上げます。

このように、多くの方々のご努力によって完成した『感想文集』ですから、是非とも全巻をご精読下さるやう願ってやみません。「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が、鮮明に甦って来る事と思ひます。二ヵ月前に霧島で得た感動を、単なる「思ひ出」に終らせることなく、新たな、学問の求道への出発とされるやう、切に祈ってをります。

（山口秀範、記）

〔資料〕
第二十四回〝合宿教室（霧島）〟感想文集
非売品
昭和五十四年十月二十日発行
編集兼発行者
東京都中央区銀座七―一〇―一八　柳瀬ビル
電話〇三―五七二―一五二六～七
社団法人　国民文化研究会
理事長　小田村寅二郎
編集委員　古川　修・原川　猛雄
山口　秀範・大町　憲朗
皿田　宏・小柳志乃夫